

宗方小太郎日記, 明治 26 ~ 29 年

大里浩秋

はじめに

本所報 No. 37 に「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」を載せ、No. 40 に「宗方小太郎日記, 明治 22~25 年」を載せた。今回は、No. 40 の続きとして明治 26~29 年の宗方の手書きの日記を活字に起し、解題をつけることにする。

宗方が残した日記の大部分及びその他の若干の文章は、上海社会科学院歴史研究所図書室（以下、歴史研究所と略称）に保存されているが、それらを筆者は歴史研究所の好意で閲覧してその一部をカメラに収めることが出来たので、No. 37 ではその資料を概括的に紹介すると共に明治 21（1888）年の日記中の中国滞在時期を活字に起し、No. 40 では明治 22~25 年の日記の全部を活字に起して読んでいただいたのである。といって、宗方がほぼ毎日書いたはずの日記を完璧な形で紹介できていないことをお断りする必要がある。その 1 は、ある時期の日記がまとめてみることができない点である。例えば No. 40 で扱った時期でいえば、明治 23 年 8 月 1 日から翌 24 年 4 月 17 日までの分がなく、今回扱う時期でいえば、明治 27 年 6 月 27 日から同年 12 月 31 日までの分がないのである。なぜある時期の日記がまとまってないかといえばその理由は恐らく一様ではなく、宗方の弟子の波多博が師の伝記をまとめるべく所持していたのを敗戦後上海から帰国する際に中国当局に没収され、その後どんな経緯をたどったかは不明ながら蘇州の古本屋が所持するところとなり、そして 1950 年代に歴史研究所の前身が買い取る事になったその以前に既に紛失していたとも考えられる。あるいはその時期の日記の記述内容を重視するためであろうか、どこか

の機関が所持したまま一般には公開していないとも考えられる。とくに明治 27 年については、日清戦争の勃発前後の時期に当たっていて、中国近代史資料叢刊続編『中日戦争』第六冊（以下、『中日戦争』と略称）（注）中に全てではないが中国語に翻訳された形で載っていることでその存在は確認されるだけに、どこかに秘蔵されていると思われる。その 2 に、筆者が歴史研究所でデジタルカメラを使って撮影する際に恐らくあるページを飛ばしてしまったことからくる数日分の欠落があり（今回については、26 年 6 月 29 日から 7 月 3 日までの分）、また歴史研究所での日記の製本の仕方に問題があって、1 行分、あるいは半行分が隠れてしまって読めない箇所が相当数あるという点である。この点は歴史研究所の原本に当たって可能な限り欠落を補いたいと考えている。その 3 に、筆者の力不足で解読できなかった字が多数ある点である（文中には□で示した）。これについても今後識者の協力を得て欠落を埋めるべく努めたい。

なお、日記の原文のカタカナはひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えた。しかし人名の漢字はそのままとし、同じ人物を示していると思しき名前の表記が異なる場合もそのままとした。今回も、日記の解読と入力作業を本学中国言語文化修士課程修了の増子直美さんに手伝ってもらった。

（注）中華書局、1993 年刊。

1. 明治 26 年 1 月 ~ 12 月の日記

荒尾精が企画し準備を進めた日清貿易研究所を上海に開設する件では、宗方は明治 23 年春から

参画して生徒募集や選考、上海への引率、開設後の運営に積極的に関わっている様子は、既に23年から25年の日記で見てきた。それが26年に入ると、1月5日に根津を訪ねて13日には帰国したいと相談し、それからは連日のように生徒たちに会ったり送別の宴に出たりして、大勢の見送りを受けつつ15日に上海を離れている。日頃実施している夜の生徒に対する点検を一時中止してまで研究所を挙げて見送ったことが知れるのである。根津を訪ねるまでの日記に研究所を去る事に関する記述がないので唐突の感を免れないが、『対支回顧録』下巻（以下『対支』と略称）（注）の「宗方小太郎」によると「君は別に計画する所ありて校を辞し」たとあり、その計画とは漢口で字林漢報なる新聞を発行するというものだった。なおそのつもりで前年までの日記を見直すと、25年秋に白岩龍平らとこの件で相談している事に気づく。

上海から1月17日に長崎に着くと、郷里宇土と熊本間を往復して家族、友人たちと会っており、3月になって上京した。東京での目に付く動きを追うと、7日に荒尾精と会って「今後対清の方策を論」じ、同じく漢口楽善堂の仲間であった井手三郎、中西正樹とも「対清の方策」を論じている。12日にも荒賀直順、緒方二三、山口外三、井手、中西ら古い仲間と共に荒尾精と会い「今後対清の方策に付き意見互に衝突し激論数回にして辞帰す」とある。衝突した中身に触れていないもののその中には研究所の経営に関する対立も含まれていたと思われ、宗方としては研究所の存続以外の道を探るべきだと主張したと推量されるが、それは今後明らかにすべき課題である。

ここで漢口での新聞発行を目指した動きについて見ると、3月21日長岡護美を訪ね（不在で会えず）、副島種臣を訪ねて話したあたりからはそれに向けての行動開始といってよく、31日に長岡に会って賛成してもらい4月に入って師佐々友房にしばしば会って協力を取り付けてからは話が一步進み、児玉源太郎少将の考えで機密費運用の実権を握っている参謀本部川上中将に図って決めようと言う事になったが、大山陸軍大臣が資金を出す事に反対の意を示した。その理由は、かつて

川上は荒尾の企画した日清貿易研究所設立に「数万の金を費し今日の失敗に至りしを以て四方の攻撃を受け、又大山等も其不始末を咎め」（4月25日）ていたからだという。こうしてこの計画は一頓挫して、2年後になって再度その実現に向けた動きを表面化させる事になる（後述）。

その後宗方は7月22日に佐々友房の仲介を得て中牟田海軍中将をたずねて「身上の事を商量」し、島崎大佐がその件の責任者であると言われて翌日には島崎を訪ねて相談し、数日のうちに「金百二十五円を受取り」（31日）海軍省の嘱託になった。こうして以後亡くなるまで続く中国に関する各種の情報を海軍省宛に届ける任務が確定し、情報収集の見返りとしての月々の報酬を得ることで、生活が安定した事になる。

8月4日の日記には、この日東京から熊本に向かうけれども「志を得ず・・・空しく帰程に上る」と記している。志を得なかったのは漢口における新聞発刊の件の挫折を指しているようである。その後主に熊本市内に滞在して各所で人に会い、県庁や学校で中国の現状について話をしている他、連日のごとくに上海の日清貿易研究所の生徒たちに会っていることが注目される。多数と会う場合も1、2人と会う場合もあったが、いずれにせよ「今後対清の方針に付き談話」したり（8月8日）、「生徒諸氏の部署を為」したり（8月17日）して、上海から帰国した生徒の行く末に心を砕いているように読める。この日清貿易研究所の結末と生徒のその後については不明な点が多く、今後の課題として残す事になる。

10月1日に長崎から上海に向かい、3日に上海に着くとまもなく研究所や陳列場に出かけている。11月14日には漢口に着き、楽善堂の仲間である松田満雄や当時漢口に進出していた吉利洋行の日本人と会い、以前と同様新街で営業している楽善堂に出入りすると共に、武昌に出かけて長江沿いに碇泊中の軍艦を見たり総督衙門などを視察（11月29日）、更に漢陽に出かけてそこにある大別山に上って「武漢の形勢を熟察」したり（12月6日）した。12月11日には上海に戻っているが、移動する際の各所における観察は、上海・漢口間の往復時にも怠りなく続けられている。上

海，漢口滞在中，10月5日に海軍島崎宛に「海軍調度提要」，11月9日に「清国大勢論」，12月4日に「武漢見聞記」を送っている。これらはそれと断わってはいないものの，海軍嘱託としての義務を果たす報告に当たるものと推量される。

（注）原本は昭和11（1936）年刊。再刊本は昭和43（1967）年刊，原書房。

明治二十六年正月

日誌 北平逸人

一月元日 晴。八時生徒，所員一同賀新の礼を行ふ。終りて生徒数十名交も来りて，賀を道ふ。湯昭煒来賀，予が新年の作に和す。終日在家，客に接す。夜田辺来り，宿す。

一月二日 晴。午前賀客紛至。晌午三池と出て楽善堂に至り拜年，去て上野に至り熊本県人十五人一同撮影す。終りて郵船会社高道の処にて会飲す。豪興勃然，四時帰る。田鍋氏に至り道賀，去て山口を訪ひ寛談。十時に至りて帰る。川村，岩元，牧，小山，中原等本日下午八時杭州より帰来，来り訪ふ。市川，松倉又来る。十時池田生来り，一時帰る。

一月初三日 晴天。下午平野，松倉，藤崎，川村，日高，大西禹，山内等来訪。四時山内と田鍋を訪ひ，九時帰る。

一月初四日 晴。午前深水，御幡来談。下午深水と高道を訪ひ，帰途楽善堂に至り小談，帰寓。夜，松倉，大川，本島等来談。夜猪飼氏に至り飲む。

一月初五日 晴天。午前松倉，大川と城内に至り，虚谷和尚を関帝廟に訪ふ，在らず。去て城隍廟に至り，磁器を買て帰る。下午白岩，沢本来談。夜大隈，本島，渡辺来談。

一月初六日 晴天。午前藤崎，内田，本島来談。根津氏を訪ひ，本月十三日帰国の事を諮る，決す。正午より三池氏に同県人一同会食す。夜本島，井口，小山，水谷，小野等来談。磯長来り。予の写真を携へ来り贈る。

一月初七日 雨天。午前田鍋，藤崎，井口来談。田鍋と西村氏に中食す。下午深水，大川来談。夜松倉，本島，岡田，大隈，内田，三沢，白岩来談。

一月初八日 雨天。西村と中餐す。下午藤崎酒を携へ来り，共に飲む。夜御幡氏の招邀に応じ行て，飲む。根津，原，三池来会。四馬路失火。楽善堂書房焼失すと云ふ。藤崎，白岩，深水，井口来談。十時中義来る。

一月初九日 雨天。早朝三毛，原氏と楽善堂に至り，昨夜の火災を弔す。下午井口，藤崎二氏来り。予の為に行きを整理す。夜藤崎，平野，白岩，牧，深水，川村，市川，内田来談。初十日 陰天。午前池田，田鍋来訪。下午小野氏来り，予の書を乞ふ。昨作の詩を書し，之に与ふ。山田，藤田来り。昨日往弔の礼に答ふ。夜出て山内を訪ひ，九時帰る。松倉，楠内，本島，内田，白岩，市川，深水来談。白岩，市川等委員となり，生徒和田純の劣跡多きを以て退所を命ずる事に付き商量す。是日山田珠一，鳥居赫雄，平山，田中善之助，佐野等信臻る。

一月十一日 雨天。午前白岩，藤崎来談。下午深水，原等来談。三池と出外，銭舗に至り銀貨七十五円を日本貨幣に兌換す。帰途永原壮次郎を訪ひ小談，帰寓。田鍋，青木来談。晚同県人三池氏に於て予の行を餞す。夜大川，深水，勝木，井口，岡田，福原林，水谷，大隈，森永等来談。是日成田の信到る。十時より原田，河野久，井口来談。

一月十二日 陰天。午前深水，白岩，原来談。朝山内に書を送る。答辞無礼固直に書を作りて之を駁す。下午岩元，楠内，和田，猪田，藤崎，那部，松倉，黒崎，森永，平野，猪田，西村諸氏来談。五時上車，田鍋氏の招邀に応ず。山内，速水来会。八時上車帰寓。第二室に於て生徒一同の離宴に列す。生徒，職員を餞別する。創立以来是を始（この後半行分不明）及び演説数番あり。予も亦た演説之に答ふ。終りて柿内，許斐，藤崎，三沢，松倉，藤城，青木，水谷，小山，井口，牧，大川，河野久等二十余人の剣舞あり。詩を吟じ歌を詠じ，十一時辞し帰る。創立以来の盛会なり。水谷，沢本，松倉来談。

一月十三日 雪。朝上車，楽善堂に至り銀五十元を受取り，小飲。去て藤田等を訪ひ別を告げ，磯長を叩き，領事館に至り林領事を訪ひ，別を

告げ写真を贈り、郵便会社に高道氏を訪ひ小飲。去て錢舗に就き銀貨を兌換し上車帰所。小山を訪ひ、小談。下午藤崎、井口、橋口、白岩、市川、香月、堺、小山平、岩崎、猪田、岡田、和田、渡辺、川本、岡田兼、森川、森永、深水、倉島来談。夜根津氏の離宴に列す。所員一同来会。小山、西村、御幡、草場、速水、原、三池、黒崎、根津等の諸氏来会。八時辞帰。江口、小野、内田、三沢、高橋、橋口、牧、井口、平野、大隈、高柳、松倉、中原、大西、原田、甲斐、向野、青木、志良川、富永、猪田、角田、小山、大西禹、中田、永田、栗村、日高、岡田晋、池橋、河野久、大木、園部、吉原、景山、藤崎、大川、藤城、福原、黒崎、田鍋、岡田兼、角田、大隈、三沢、福原、楠内、牧、大西諸氏留談す（この後1行分不明）に応酬て自作の詩を書す。予の行を送る為め、昨夜来点検を廢す。明日午前三時より大隈、水谷、岡田晋、青木、白岩、甲田河北、川野久、内田、角田の十二氏陸路雪を衝て研究所を出し、呉湊口に至りて神戸丸に移り、予の行を送る。七時研究所を發。生徒数十人郵船会社碼頭に來り送る。諸氏小蒸汽船より予を送る呉湊の神戸丸に至り、別を告ぐ。予の此行、生徒所員諸氏詩歌文章を以て行を送る者三十余人。昨夜岡田晋太郎・・・氏衣一領を送る。客其何物たるを知らず。岡田兼氏笠竹を探りて始て其の衣裳たるを知る。

八時半呉湊口の神戸丸に達す。朔風凜烈向通す可からず。到れば則ち昨夜陸路呉湊に向ひし諸氏也。已に船に在りて待てり。小蒸汽にて予を送る者、三沢、岡田兼、藤崎、池田、田鍋、西村、松金、深水、井口、横田諸氏なり。是日船終に發せず呉湊口に泊す。

一月十五日 晴天。九時三十五分船漸く動く。天気好しと雖（この後1行分不明）下午より夜に入り船頗る動揺す。

一月十六日 風雪。船動揺殊に甚し。船客皆酔。

一月十七日 陰。午前三時、船長崎に達す。呉湊を發してより長崎港口に至る迄、風波殊に甚し。土佐屋に投ず。予昨日以來僅に二食、飢渴殊に甚し。宿に投じ飯を食ふ。終宵寝ず、暁起

峨嵋山を望むに、雪花斑点景色絶佳。岡次郎、佐野直喜前後來訪。共に出て佐野氏に至り、牛肉を食ふ。夜徳丸策三を招き、共に出て鰻飯を食ふ。途中伊藤氏を訪ひ小談。佐野を誘ひ帰る。是日亦雪。

一月十八日 雪。朝、家大人及び右田、守田、津野に發信、帰国の事を告ぐ。午前佐野と深堀に至り、峯彦童を訪はんとす。風涛悪きが為果さず。佐野宅にて中食す。伊藤来会。晚三人出て銀杏亭に至り、鶏を割て食す。七時共に出て、養和楼に遊ぶ。痛飲快談、十時就寝。□立を
一月十九日 陰。伊藤、佐野と佐野氏に帰る。峯彦童来会。

一月十九日 半晴。五時土佐屋を發し、木曾川丸に投ず。伊藤勝三、佐野直喜、徳丸策三來り送る。中等室を買ふ。六時長崎拔錨、十一時三角に達す。梅花支店に投宿す。

一月二十日 晴。午前下田一巳氏を商船会社に、安富喬氏を郵便局に訪ふ。天草裁判所守田、津野等と三角に会するの約あり、待てども至らず。中餐後車を命じて三角を發す。道路海に沿ひ、山に入り風光絶佳、不覺人たるを快呼せしむ。首入に至る。家弟來り迎ふ。雨至る。車を家弟に譲り徒歩にて帰る。五時新一丁目の草廬に達す。家君弟妹悦んで迎ふ。小飲、夜に入る。出て野添重用の病を訪ひ、去て宮原に到る、在らず。矢島を訪ひ談話。移時而帰る。十一時宮原來り予を誘て自宅に帰る。酒を温て飲む。鶏鳴寝に就く。

一月二十一日 晴。川崎角太郎氏宅に中餐す。一時車を買て熊本に至る。鎮西館にて浅山知定、山田珠一、森亦八、朝山景春、前田彪諸氏に面す。共に出て飯店に至り飲む。前田、平山、右田来談。

一月二十二日 晴。午前前田、山田等來談。右田と出て、牧相之氏を訪ふ。中餐を饗せらる。深水繼雄、松倉宅、古城、財津志摩記諸氏を訪ひ、五時帰る。林田道利宇土より來り訪ふ。右田、林田と飯店に至り晚餐す。去て熊谷直亮を訪ふ、在らず。文学部に至り岡本源次を訪ふ。喜迎酒を出す。快飲夜更に至る。豪吟劍舞踊興味最も多し。十二時鎮西館に帰る。是日東京別

- 府真吉氏に送書。
- 一月二十三日 晴。朝野田正，秋山儀太郎等来訪。前田と野田，秋山の処に至り中食す。下午前田と大神宮に甲斐一彦を訪ひ，土宜を贈る。晡時池邊秀二来る。同人の招きを以て精養軒に至り洋饌を吃す。八時帰る。沼市郎，本郷大記来談。山田珠一，前田等来談。鶏鳴寢に就く。前田宿す。
- 一月二十四日 陰。朝九州学院文学部に至り，生徒を講堂に集め支那事情を談ず。一時半間にして止む。岡本源次の処に至り飲む。晌午片山と出て洗澡す。前田氏に至り小談。三人鎮西館に帰る。桑原信五郎氏来訪。五時雪を犯し上車北岡に至り，牧相之氏を訪ふ。来客有るを以て帰る。夜上海研究所々員諸氏及び山内，高道等に寄するの信を作る。又た長崎佐野直喜，伊藤勝三に一書を寄す。
- 一月二十五日 晴天。午前前田と出て，池田宅，沢本宅，中村六蔵，井口宅を歴訪し，貧兒寮に至り塘林虎五郎氏に面し，寮内を一覧し，朱子の書に係はる忠孝の二大字を寄附す。小談，去て法学部に至り有吉虎若を訪ふ，在らず。前田の処に中餐し，留て晚餐し，共に鎮西館に帰る。前田宿す。
- 一月二十六日 晴。午前出て脇山逸馬を訪ひ小談。去て五十一国立銀行に至り，林定男を訪ひ小談。去て海運社に佐々干城氏を訪ふ。待つ少時来らず。書を遣し石刻画梅を遣して，牧相之氏を訪ひ，中餐後松岡独醒庵氏を春竹に叩く，在らず，石造筆筒及び画梅石刻を遣して帰る。山田来談。晩朝山と出て春竹に至り，松岡氏に至り，招饗に応ず。十時上車帰る。
- 一月二十七日 雨。朝前田と熊谷直亮を訪ふ。談話時を移し，酒飲して帰る。予は文学部に至り，岡本源次を訪ひ，土宜を贈て前田氏に帰る。五時佐々干城氏来り訪ふ。共に出て海運社に至り飲む。十時帰る。岡本を学部を訪ひ，宿す。
- 一月二十八日 雨。午前前田と片山敏彦を京町に訪ふ。中餐後出て有吉虎若氏を叩く，在らず。鎮西館に帰る。三人出て鶏飯を喫す。前田氏に至り宿す。佐野の信及び家大人，林田の信至り，家宅移転の事決せりと云ふ。
- 一月二十九日 雨。朝前田氏より帰る。羽室湛純来訪。共に出て楠町野田宅に至る。山隈等在り，鶏を割て飲む。山田珠一，前田彪亦来る。四時鎮西館に帰る。宮崎寅蔵，永井源之進，脇山逸馬，井芹経平来訪。脇山と出で精養軒に至り，佐野の事に付き商量す。八時脇山と分れ，樗木大尉を角力丁に訪ふ。酒を飲み快談。時を移し帰る。帰て前田氏に至り宿す。
- 一月三十日 晴天。朝佐野直喜，別府真吉二氏に発信す。佐野には出熊を促すなり。宮崎寅三，山田珠一來訪。十一時上車宇土に帰る。家新小路鳥井宅に移転せり。篠原由雄，林田道利来談。夜宮原喜雄亦来る。三人留談，十一時帰る。荒尾精東京より電報あり。予の上京を促す。直に之に返電して，用事の如何を問ふ。東京別府，上海平野六郎，藤崎，牧，東京緒方諸氏の信到る。
- 一月三十一日 陰天。朝東京別府，鳥居両氏に発信す。午前宮原，篠原来談。下午宮原等と出で，玉崎を訪ひ小談。宮原氏に到り晚餐し，八時帰宅。井手三郎京都より信到る。
- 二月初一日 晴天。東京荒尾精氏に発信す。奥村傳，野添来談。下午篠原，淀江東来談。下午一時荒尾精京都よりの電報到る。長崎にて面会を求む。蓋し緊急の用事ありと云ふ。出て菅正懿を訪ひ小飲。去て篠原由誠を叩く。晚餐の饗を受く。去りて実光，傳を訪ふて帰る。林田，徳田二生在焉。野添氏と約有るを以て行て訪ふ。谷口叔母在焉。二十余年（この後1行分不明）以てなり。十時帰る。
- 二月二日 晴。朝野添氏に至り朝食の饗を受く。下午出て先妣の墓に展し，去て林正常，浅井九郎等を訪ふ，在らず。林田清太郎を訪ふ。談話移時而帰る。夜篠原，林田，徳田来談。
- 二月三日 晴。正午上車宇土を發し，熊本に至る。山田と前田氏に至り晚餐す。三人出て貧兒寮に至り，塘林虎五郎を訪ふ，在らず。小談帰る。
- 二月四日 晴。前田氏に朝食し，鳥田数雄を濟々饗に訪ふ，在らず。去て野田正，山隈等を訪ひ小談，帰る。前田，高木等と山田珠一の処に至

り晚餐す。前田氏に帰り宿す。山田来談。

二月五日 雨天。午前宮原義雄来る。飯店に至り中餐し、妹佐久を川崎氏より離縁の事を談ず。三時内藤儀十郎氏の招きを以て、前田、片山と至り晚餐す。九時帰りて、前田氏に宿す。

二月六日 晴。午前 氏来談。下午熊谷を訪ふ、在らず。去て岡本源次を文学部に訪ひ、五時共に出で、熊谷直亮の処に至る。山田珠一來会。薩摩琵琶の達人東島生を招き、小敦盛、村上義光、外数曲を弾ぜしむ。豪楽勃然、痛飲健啖十二時に至る。岩越、川瀬、外諸名来会。岡本の処に至り宿す。

二月七日 晴。岡本氏に朝餐し、前田に至り、山田と共に帰る。森安治、右田、平山来訪。是日楠内、深水、野中の信到る。下午根津乾、小山元三、白岩龍平、藤城諸氏の信、上海より到る。東京新納時亮氏の信亦来る。同氏朝鮮在勤を命ぜらるるに付き、予の同行を望めり。五時前田と出て新屋敷に至り、木村弦雄氏を訪ふ、在らず。井芹、西川諸氏を訪ふ、亦在らず。前田氏に帰り晚餐し、毛利篤氏宅の旧友会に列す。会する者岡本、池辺源太郎、井芹、前田、財津、藤本、朝山諸氏なり。十一時前田氏に至り宿す。

二月八日 陰天。下午前田と岡本を誘ひ、牧崎に鶴殿少尉を訪、飲んで八時に至り帰る。前田氏に宿す。

二月九日 晴。終日在鎮西館。糸川直元来訪。夜前田氏に至り宿す。

二月十日 晴。午前横尾三平来訪。下午九州学院普通部に至り、支那談を為す。二時半間にして終る。佐野直喜来る。本日長崎より来着せりと云ふ。共に鎮西館に帰り小談。岡本と約有るを以て大学部に至り、岡本と共に若水源吾を大江村に訪ふ。前田、藤本在焉。痛飲快談十一時に至り辞帰。余は佐野と約有るを以て上車明十橋に至り、佐野、脇山を訪ひ談話。深更に至り就寝。

二月十一日 晴。早起佐野氏を辞し上車。坪井に至り、前田を訪ひ朝餐し、山田珠一と池田停車場より上車。十時半□□を發し、植木、木葉、高瀬、長洲、大牟田、羽犬塚等の各駅を過ぎ、

午後一時久留米に着す。飯店に投じ中餐し、櫛原町に至り青木義方氏を訪ふ。研究所生徒青木喬氏の父也。同氏喜迎酒肴を出し饗す。銀行頭取佐々氏亦来会。研究所生徒猪田正吉の叔父也。五時強て青木氏を辞し、御井郡久留米に至り岡田兼次郎氏の留守宅を訪ふ。同氏の老母大に喜び、盛饌を設て大に饗す。切に一宿を勧めらる。因て宿す。夜風雪。

二月十二日 雪。午前五時岡田氏に朝餐し、停車場に至る。五時四十五分發。鳥栖、二日市、雑餉等の各駅を過ぎ、九時箱崎に達す。直に箱崎八幡祠に偈す。廟の四周老松蒼鬱、森に天に参はり、氣象森嚴犯す可からず。是日朔風雪を捲き、寒氣骨に透る。高く廟前に屹峙し、玄海に対するの門あり。之を伏敵門とす。敵国降伏の四大守を一遍す。延喜帝の御筆に係はる門より海岸に至る。約そ千米突大道坦々、一直海岸に通ず。道の両側老松列植、風趣名伏す可からず。山田と海浜に出んとす。寒風雪を吹き、向邇し難し。疾駆して漸く燈台の下に至る。玄海の怒涛鞆鞆天を打ち壯觀、道ふべからず。坐口に人をして元寇鏖殺の往時を追懐せしむ。右は千代松原、遠く多々良浜に至り、左は白沙青松湾曲して博多に達し、内に一大湾を擁す。実に天下の壯觀なり。茶店に投じ飲む。始て松露を食す。十一時上車二日市に帰り、陸路雪を踏で太宰府天満宮に展す。二日市を距る凡そ一里許、天拝山の麓に在り、廟宇壮大、風致太だ清幽。廟前老梅甚だ多し。中に飛梅なる者あり。北野より飛来せし者なりと云ふ。廟門題して菅聖廟と云ふ。清国湖北巡撫某の題する所なり。帰途北白川宮殿下の一行に逢ふ。去て敬意を表す。二日市に帰り、茶店に投じ中餐し、一時四十三分上車、旧路を取り五時半熊本池田駅に達す。途中山田に別れ、前田を訪ふ、在らず。通町にて鶏飯を食し、鎮西館に帰り、出て佐野を明十橋に訪ふ、在らず。去て森亦八を訪ひ小談。再び前田を訪ふ。又在らず。鎮西館に帰る。是日小濱為五郎、鳥居赫雄諸氏の信臻る。

二月十三日 晴天。前田氏に至り中餐し、共に出て片山を訪ひ、晚餐して帰る。前田氏に宿す。

二月十四日 晴。午前前田と佐野を訪ひ談ず。中

- 餐して帰る。夜島田数雄を普通部に訪ふ。九時阿部野と前田に至る。宿す。
- 二月十五日 晴。午前本妙寺に至り濱地正之の招魂祭に列す。会する者四十余人。下午四時熊本を發し、川尻にて上車宇土に帰る。夜山鹿巡查、板井豊彦来り、光彦の負債三十三円の事に付き云々す。林田道利来談。板井宿す。
- 二月十六日 陰。午前矢島篤宜来談。板井中食して帰る。是日別府、中西、小浜、上海山内崑に金三十円の受取状を發す。夜林田来談。是日陰曆除夜たり。
- 二月十七日 雨。午前矢島、徳田、篠原、宮原来談。矢島と出て玉崎を誘ひ、石橋に至り銃獵す。帰途雨。夜篠原来る。
- 二月十八日 半晴。午前矢島来り、中餐を案内す、到る。宮原亦た来る。下午共に出て栗崎直也氏宅に至り、飲む。帰途又た宮原氏に至り、晚餐し帰る。夜林田、篠原来談。
- 二月十九日 陰天。下午篠原と陸路熊本に帰る。夜前田氏に至り宿す。
- 二月二十日 晴。朝鮮行の事に付き御船、葉室湛純に発信し、其該地に赴かん事を勸（この後半行分不明）岡本を敲く、在らず。鷹匠小路に至り士官永井源之進を訪ふ、不在。道岡本に邂逅し、共に永井氏に至る。痛飲快談、十一時に至り辞帰。大島某、□口某来会。前田氏に至り宿す。
- 二月二十一日 晴。右田来談。上海松倉の信、長崎佐野の信到る。夜山田、前田、阿部野等と貧兒寮に至り、塘林虎五郎氏と面し授業を見る。終りて主人粟飯を饗す。味大牢に勝る。歓談十一時に至り、帰る。前田氏に宿す。
- 二月二十二日 晴。朝家大人の信到る。光彦鹿兒島に脱走の報あり。直に書を作りて其行を留む。久留米青木、岡田両氏に発信し、過日の饗を謝す外、古川権九郎に帰国を報じ、東京佐々友房氏に一封を送る。昨日葉室湛純来り、朝鮮行の意を決せしを告ぐ。予即刻書を新納氏に致し、之を報ず。中原尚雄氏に発信。晡時前田と出て、有吉虎若氏を訪ふ、在らず。前田氏に至り、牛を割て飲む。夜普通部に至り、島田数雄を訪ひ談話。移時十時帰鎮西館。
- 二月二十三日 快晴。終日在家。上海根津、小山、西村、田鍋、磯長、白岩、松倉、平野、野中、藤崎、楠内、三沢、青木、岡田諸氏に復するの信を作る。夜山田、朝山、柳原等七人と貧兒寮の祝宴に臨席す。寮主塘林氏貧兒の父兄を集め演説、語に赤誠より出で感泣する者あり。北白川宮殿下五拾円を下賜されしを以て、之を祝する也。島田数雄、池辺源太郎亦来会。十時辞帰。
- 二月二十四日 微雪。午前上海根津外諸友に寄信す。下午前田氏に至る。片山、岡本来会。猪肉を割て飲む。快談十時に至りて散帰す。
- 二月二十五日 晴。午前前田氏より帰る。小濱為五郎、中西正樹、板井豊彦の信来着。夜梶木氏に至り飲む。八時帰る。
- 二月二十六日 晴天。佐野直喜の信臻る。下午右田を訪ふ。晚餐を受く。共に出て鎮西館に至り、幻燈を見る。夜前田氏に至り宿す。
- 二月二十七日（この後1行分不明）宮崎弥蔵氏を訪ひ、薄暮辞帰。蕎麦を食ひ、前田と分れ去て、山田珠一を訪ひ東上の事を談じ、十時帰る。
- 二月二十八日 陰。响午上車宇土に帰り、上京の事に付き結束す。白岩龍平上海よりの信臻る。是日上海白岩、三沢二人及び熊本生一同に発信。東上の事を告ぐ。又た山内崑に一封を送る。夜井門亨氏を訪ひ談ず。
- 三月初一日 晴。終日在家。上海山内崑送金三十円来着。白岩龍平、深水十八の信来着（山内誤りて更に二十元を送ると云ふ。予書を送りて之を止む）。
- 三月二日 晴。午前家を辞し、上車熊本に帰る。海運社に佐々干城を訪ふ、在らず。鎮西館に帰る。古川権九郎及び上海山内崑、深水十八、大川愛、岡田兼次郎に発信す。大川、岡田の信臻る。中西、井手に発信、明日より上京の事を告ぐ。浅山知定氏の招きを以て晚餐の饗を受く。八時鎮西館に帰る。前田彪氏の寓に至る。片山、島田在焉。秋山儀太郎、山隈惟勇来訪。十二時帰る。此夜一睡せず。
- 三月三日 晴天。朝前田氏に在て朝餐す。山田珠一、秋山儀太郎、岡本源次、右田亀男、阿部野

利恭来訪，別を告ぐ。十時池田停車場に至り中等車に乗ず。山田珠一，片山敏彦来り送る。阿部野，右田送りて木の葉駅に至り分る。久留米に至り鹿野淳二と車中に邂逅す。箱崎を過ぎ，千代松原，多々良浜。香椎湯等の名勝を過ぐ。青松白沙風光明媚。左に玄海洋を望み，右に一帯の乱山を望む。行客宛然画図中に在り。五時小倉に達す。上車前田氏に至る（船場）。彪氏と鶏を割て小飲。夜春雨蕭條。九時前田氏と上車。九時三十分門司に達し，商船会社に至り紫藤猛，糸川直元二氏を訪ふ。風雨冥蒙倉皇舟に登る。前田彪氏と別れ，太龍丸の本船に至る。下等乗客多きを以て中等室に移る。（この後1行分不明）。

三月四日 晴。正午十二時備後尾の道に着す。池永，宗二氏と山陽鉄道の汽車に上る。一時五十六分発，一路風光頗る佳なり。晡時福山城下を過ぎ，薄暮岡山城下を通過す。山河襟帯城楼峙ち風光甚だ好し。十時明石，舞子，須磨を過ぐ。淡路島を海心に望み，鴨い越，一谷の諸山透迄相連り，一輪の大月海湾を照らし，風光名状し難し。十一時神戸に至り汽車に乗り換へ，十二時大坂に着す。宗氏と別れ，池永及び対州人某と中島の備前屋に投ず。東京直行の汽車無きを以てなり。二時就寢。

三月五日 晴天。朝池永奈良に向て去る。十二時半対州人と客店を發し，東京行の汽車に搭ず。一時六分発車。京都，彦根を過ぐ。琵琶湖上の風色頗る佳絶。米原マイハラに至る。朔風飛雪を捲き，遠水近山懐として望む可からず。敦賀線此に於て分る。長里，関原を過ぐるの時，降雪益す。急にして満目の峯□尽く白頭矣。垂井を至て日全く没す。是夜寒威凜烈。車上客満て眠る可からず。

三月六日 晴。黎明富嶽を天半に望む。積雪皚然人の氣象をして爽然たらしむ。午前八時半新橋に着す。上車，麴町富士見町の松葉亭に至り投ず。緒方二三氏在焉。少焉，井手三郎帰来互に久闊を叙す。別府，鳥井，中西諸氏に發信。着京を報ず。緒方と出て佐々友房氏を訪ふ，病褥に在り。談話す可からず，小談即ち帰る。中西正樹，鳥井赫雄前後來訪，酒を酌で快談す。深

更就寢。

三月七日 晴。朝井手，緒方と出て愛宕町東京病院に至り，別府真吉氏の病を訪ふ。別後三個月快殊に甚し。晌午去て荒尾精氏を訪ふ。小山元三，増田三郎等在焉。小山は本月三日帰来せりと云ふ。荒尾氏と今後対清の方策を論ず。中餐して帰る。井手と出て中西正樹を本郷菊坂町に訪ふ。蕭然たる茅屋，車夫馬丁と比隣相倚り悠然其中に起居し，共に対清の方策を論ず。五時に出て荒賀直順を森川町一番地に訪ひ，久潤を叙し小飲辞帰。伊地知季綱在焉。寛談十時に至て帰る。増田（この後1行分不明）

三月八日 晴。風大。午前緒方と安達謙三を訪ひ談話，移時而帰る。鳥井在焉。共に出て愛宕町に至り，別府真吉氏を訪ひ談話。暮に及で帰る。山田珠一より新納時亮氏の信を転送し来る。葉室朝鮮行の事に付き不得已事情有り違約し来る。夜鳥井，井手，緒方と亀井英三郎を訪ひ，十一時帰る。

三月九日 晴天。朝中西正樹来訪。午前共に出て，山口外三を訪ふ。今田力在焉。増田三郎氏に發するの書を作りし之を投郵す。台湾行の事を辞するなり。其意中原の機会に後れん事を恐るるなり。共に出て明神前の蕎麦店に至り小飲。去て芝公園に散歩し，増上寺を周覽す。途上山口，今田二氏に分れ，東京病院に至り，別府真吉氏の病を訪ひ談話。移時而帰る。中西と晚餐す。荒賀直順，米原繁藏等来訪。井手，緒方等亦来会，快談。十一時散帰す。

三月十日 晴天。風大。終日在家。午前今田力来訪。中西正樹又来る。夜井手の室に飲む。木下宇三郎来り訪ふ。安達謙造亦来訪。

三月十一日 晴天。午前中西正樹来訪。池永鶴次郎又来る。下午上田茂二郎，澤村雅夫，森田某等来訪。晩井手，緒方両氏と佐々友房氏を訪ひ寛談。九時に至りて帰る。

三月十二日 陰天。大屋半一郎来訪。下午荒賀来訪。夜荒賀，井手，緒方，中西諸氏と芝西の久保の荒尾精氏宅に会す。山口外三の支那行を餞する也。会する者，我一行と増田，山口，小山，木下。八時過ぎ井手と荒尾氏を辞し上車。神田連雀町に至り，津田静一氏を訪ふ。対清の

議論相合はず。荒尾の所にて今後対清の方策に付き意見互に衝突し、激論数回にして辞帰す。

三月十三日 晴天。午前大屋半一郎を京橋浜町に訪ひ、中餐後岡友次郎を訪ふ、在らず。井手、護城、小馬車に附し帰る。夜中西正樹来り宿す。

三月十四日 晴。八時中西、井手、緒方と出て新橋に至り、山口外三の天津行を送り、根津、猪飼、白岩、西村、田鍋、山内及び所員、生徒一同に寄するの信を托す。帰途東京病院に別府真吉氏を訪ひ、中餐（この後1行分不明）

三月十五日 雨天。八時中西、井手、鳥居等と新橋に至り、緒方二三、護城某の帰県を送る。熊本浅山知定、岡本源次、山田珠一に托するの信を托す。帰途東京病院に別府真吉氏を訪ひ、晌午上車帰寓。中西生来り九時帰る。井手と出て岐部熊雄を訪ひ、十二時帰寓。

三月十六日 晴天。午後井手と神田に至り鳥井赫雄を訪ふ、在らず。中西正樹を本郷に訪ひ小談。共に出て小山元三を叩く、亦た在らず。谷中、上野、寛永寺等を徘徊して帰る。

三月十七日 晴。午前増田三郎、岐部熊雄来訪。中西正樹来る。中餐後、井手と三人出て、荒尾精の病を訪ふ。増田、小山等と小談。帰途伊地知を筆司町に訪ふ、在らず帰る。夜亀井英三郎来談。

三月十八日 晴天。午前井手氏と出て矢野文雄を赤坂を訪ふ。病を以て面するを得ず。帰途木下卯三郎を訪ふ、在らず。下午、井手氏と荒尾精を訪ふ。氏今夕を以て上海に向ふ。因て其行を送る也。九時井手氏と送て新橋停車場に至り、別を叙して帰る。井深仲卿に寄するの書を荒尾氏に托す。

三月十九日 晴天。午前佐々氏を訪ひ、都門知名の士へ添書を請ふ。下午尾越辰雄及び家弟来訪。一時上車芝東京病院に至り別府氏の病を訪ひ、四時半上車帰寓。暮れに井手、岐部両氏と木下宇三郎を訪ふ、在らず。待つ少時、終に帰らず。辞して帰る。帰途安達謙三に逢ふ。共に誘ふて岐部氏に至り飲む。木下宇三亦た来会。怪談、十一時辞帰す。

三月二十日 晴天。胃痛。神田に鳥居を訪ふ、在

らず。去て中西を訪ふ、亦た在らず。有斐齋に至り野田寛を訪ひ小談、帰寓。下午安達を訪ふ、在らず帰る。夜鳥居赫雄、中西正樹来談。十時半帰る。

三月二十一日 晴天。午前井手氏と馬車に乗じ上野不忍池の寺院に至り、房室を借りんとす、得ず。京橋浜町に至り大屋半一郎を訪ひ中餐し、下午長岡護美子を訪ふ、在らず。去て築地に至り、副島種臣翁を訪ふ。翁病を力て接見清国の事に付き寛談、時を移す。翁白髮蒼顔、豪姿凜然。（この後1行分不明）齊藤員安、成田正、佐々正之等在り、談話時を移し、去て安達子を訪ひ小談、帰寓。

三月二十二日 晴天。山田珠一、緒方二三に発信す。午前井手氏と井添進一郎を番町に訪ひ談話。少時辞帰。品川弥二郎氏を訪ふ。面晤を得ず帰る。下午上車東京病院に別府真吉氏を訪ひ、五時帰る。荒賀直順、中西正樹在焉。

三月二十三日 雨天。午前松葉亭を出で、飯田町四丁目内地雑居講究会事務に移転し、井手氏と同居す。夜安達の室にて松村某の北海道行を饒す。佐々正之、齊藤員安、河野某、平山某、外二三名来会、飲啖す。深更に至て散ず。毎日新聞社員柵瀬軍之佐来訪。

三月二十四日 陰天。朝井手氏と品川弥二氏を訪ふ、在らず帰る。中西、荒賀来談。米原繁蔵又来る。是松村生の北海道行を送るの詩一章を作り寄送す。晩米原、安達、井手三氏と麵店に至り晚餐す。伊地知、小山、小浜三氏に発信す。

三月二十五日 晴。午前井手氏と品川弥二氏を訪ふ、在らず。転じて銀座に至り、岸田吟香を訪ふ。又た在らず。浜町に至り長岡護義子を拝訪す。待つ少時帰来。対清の方策に付き談話する所あり。五時帰る。夜中西来談。

三月二十六日 晴天。日曜日。朝西郷伯を訪ふ、在らず。去て川上中将を訪ふ。病を以て面するを得ず。岐部熊雄を訪ふ、在らず。途堤真人に逢ふ。共に同氏宅に至る。宅は牛込加賀町に在り。小飲閑談、時を移して去り、小石川に至り三浦中将を叩く。亦た在らず。有斐齋に至り小談、帰寓。夜中西、河野等来談。

三月二十七日 晴天。午前藪伍一郎来談。下午長

鳥萬里，伊地知季綱来談。伊地知と出て芝東京病院に至り，別府真吉氏の病を訪ひ，五時半帰る。

三月二十八日 晴。午前佐々正之，西仁太郎，中西正樹来談。下午荒賀又来る。四時荒賀，井手氏と出て，大尉木村丑徳を牛込に訪ふ。北京地方同遊の人なり。晩共に飲む。快談，初更に至て帰る。

三月二十九日 雨天。午前佐々正之，河野某来談。下午雨を衝て別府真吉氏を東京病院に訪ひ，五時半帰る。

三月三十日（この後1行分不明）の士山鹿素行先生の墓に展す（月海院瑚光浄珊居士）。去て礫川の音羽山に登り，都門の春色を一目の中に望み，転じて護国寺に謁し，三条公の墓に謁す。五時，中西を誘て帰る。

三月三十一日 晴天。朝岐部熊雄来る。是日三沢信一，白岩龍平上海より信到る。下午三時井手氏と浜町長岡護美子爵を訪ひ，字林漢報創立の事に付き協賛を求む。子爵大に之を賞賛し，一臂を添ふる事を諾し，盛饌を設け饗せらる。寛談数刻に及て辞帰。途鳥居赫雄を叩き小談。共に出て城東の橋上に月を賞す。淡靄春月を籠め，四天雲無く，暗香人を襲ふ。三人聯句を賦す。苦吟成らず。四更散帰す。山田珠一熊本より，西村忠一上海よりの信来着。

四月初一日 晴天。午前中西来談。下午出て別府君を東京病院に訪ひ，五時半帰る。夜岐部熊雄を訪ふ。井手又来る。十一時辞帰，岐部の処にて朝鮮の亡命鄭蘭教に面す。邦服邦言，居然たる郷人看別す可からず。

四月二日 雨天。下午上海西村忠一，白岩龍平，三沢信一に発信。熊本深水十八及び家大人に送書。夜安達，井手と出て，飯舗に至り小飲。

四月三日 晴。朝井手と佐々友房氏を牛込北町に訪ひ談話。時を移して帰る。氏水晶玉一個を贈らる。昨夜大磯より帰来せしなり。下午出て別府真吉氏を東京病院に訪ひ，五時帰る。晩餐後井手と一ツ橋通り大学講議室に至り，湯地丈雄，井上哲次郎等の元寇幻燈講談を聴く。九時半帰る。

四月四日 雨天。朝荒賀直順君来訪，晩帰る。夜

中西正樹来談。

四月五日 晴，夜雨。午前井手，安達と佐々氏を訪ふ，在らず。去て神田に至り，女優の演ずる肥後細川家の血達磨の戯を見る。殆んど断腸する者数回。夜井手，安達と佐々友房氏を訪ひ寛談。十一時に至り帰る。風雨蕭々。

四月六日 雨天。庭前の梅花四分開，春色可掬。午前井手氏と出で，赤坂表町に至り矢野文雄氏を訪ふ。寛談二時に至る。中食の饗を受け帰る。帰途佐々正之を訪ふ，在らず。古莊嘉門氏を訪ふ。来客有るを持って帰る。夜荒賀及亀井英三郎（この後1行分不明）色如海紅裙翠袖紛々如織。正午帰る。二時出て別府真吉氏を東京病院に訪ひ，六時帰る。緒方二三の信到る。

四月八日 晴天。上海熊本県生徒一同より書状到る。直に書を作って之に復し，別に西村，田鍋に発信す。夜玉川亭熊本倶楽部に赴き，支那談を為す。会する者三十余名。終て肥後琵琶の催あり。十二時散ず。

四月九日 晴。午前中西来談。正午齊藤員安，米原繁蔵，安達謙蔵と銀座天金に至り，油烤鱼を食ふ。味頗る美。三時安達，井手と出て高田細川侯の邸に至り，蓑田喜太郎，高島義恭両氏を訪ふ，在らず。待て暮に至り，初て帰来，共に飲む。十時高島氏に至り，又た飲む。十二時帰る。

四月十日 雨天。終日在家。

四月十一日 晴。朝佐々友房氏の信到る。下午出て別府真吉氏の病を訪ひ，七時帰る。夜出て川上操六氏を番町に訪ふ，在らず。去て岐部熊雄を訪ふ。朝鮮亡命人鄭蘭教在り。彼れ朝鮮に在りて事を挙げし顛末を評談す，頗る快絶。十一時辞帰。

彼曰く，明治十七年十二月挙兵の事に付ては数年前より準備し掛かり居りしか，竹添公使頻り其期日を促したるを以て，愈郵便局の開業式を以て各国公使及び朝鮮の重官（反対党の重なる者）を招きたるが，僅かに目的の人は閔泳翊一名来れり。宴闌にして外国公使を送り帰し，先つ閔氏を斬る。誤て耳より肩に及び，死せずして走る。其親兵直に之を保護環繞す。閔氏閑を得て逃る。右第一の計略誤

りしを以て、第二の計策、即ち国王を別宮に移し火を民家及び太子宮殿に放ち、大臣の上闕を待て之を斬らんとす。百方手を分て火を放つ。火燃せず、延て火薬庫を爆発せしむ。鄭氏国王に謁して曰く、事急なり、願くば別宮に移れ。此時兵官数名国王に侍す。鄭氏之に告て曰く、事端の発巨夕に在り、公等何ぞ去て兵を整へざる。兵官去る、鄭某閑を窺ひ王を誘て別宮に遷る。夜黒ふして咫尺を弁せず。漸く火を点ず。大臣数名變を聞て至る者あり。皆之を斬る。忽ちにして支那兵来り援ふ。日本兵国王を護して之を防戦す。朝鮮革命党兵器を庫に取り、十二連發銃を以て之に応ぜんとす。銃丸式に合はず發射するを得ず。竹添氏因循王を放て清軍に至らしむ。茲に至て事全く敗る。公使革命党に諭して曰く、事此に至る、又た為すべきなし。公等何ぞ身を潜て後凶を為さざる。衆曰く、我輩此を去らば又た身を容るゝの地無し。公の言、何ぞ其れ忍べる。公使曰く、好し、公等を伴ふて日本に帰らんと。直に残党九名を保護して仁川に去り人の指目を避け、昼間は日本人の家宅に潜伏せしめ、夜に乗じて日本汽船に移す。船底方の暗室に九名を迷閉す。彼等寝食せざる三昼夜、船長土某最く能く之を保護し、酒饌を饗する甚だ盛。長崎に至りて始て上等室に誘ひ、船長より牛肉を饗す。其船にて終に東京に来る、云々。

鄭氏の兄弟九名丈亦在り。今に其の死生を審にせず。事變の後、朝鮮人にして日本に遊び日本人と交り有る者は、事變に關係有ると否とを問はず悉く捕て之を慘刑に処す。閔泳翊は王妃の親姻たり。曾て袁世凱に向て国事を悦慨す。袁曰く、然らば何ぞ王を廢し新たに大院君の孫を出てざる。大院君は甚だ袁氏と好し、院君国王の叔父に係はると雖、父子の情甚だ好からず。今全く往来せず。且つ王妃、王を凌ぎ親戚を以て内閣を組織し政治を専らにするを以て、大院君大に之を惡む。閔泳翊、袁世凱に廢王を約す。袁氏其期を促す甚だ嚴。閔殆ど其責に任へず、去て天津に至る。李鴻章又た之を叱す。又た去て香港に走

り以て袁氏の督促を通る。又た閔氏は袁氏廢帝の言を以て国王に密奏せり。

四月十二日 晴。朝井手氏と上野に至り、桜花を觀る。春色十分海よりも深し。去て富坂に至り三浦中将を訪ふ、在らず。去て中西を訪ふ、亦た在らず。荒賀直順を新坂一番地に訪ふ、在り。談話少時、共に出て上野を横り、根岸より芳原堤に出で、千住骨原回向院に至り、吉田松陰、頼三樹八郎、橋本左内三君及び水戸十七士の墳に展す。三尺の荒墳一杯の土一世の英雄を埋了す。風霜多年感慨四集、低徊去るに忍びず。時恰も晩春、梅花爛漫、韶夫人を惱殺す。帰途橋場に至り、塩田氏の別荘に至り、菅谷五郎を訪ふ。北京にての知人なり。樓前向島白髭神社に対し、長堤一道桜花雪よりも白し。紅裙翠袖、雜□如織。五時辭歸。春雨蕭條衣袂悉く沾ふ。上野に至り荒賀氏と別れ、鉄道馬車より歸る。時に七時也。夜雨。夜熊本牧相愛の信到る。

四月十三日 晴天。中西正樹來談。夜中島半次郎、深水清、上田茂二郎等來談。

四月十四日 晴。午前中西來訪。佐々氏亦來談、昨夜大磯より歸來せりと云ふ。下午東京病院に別府真吉氏を訪ふ。病狀頗る好し。五時半辭歸。午前増田三郎來る。今日より台湾に赴くと云ふ。夜井手と鳥居赫雄を訪、十一時歸る。上海白岩生より近頃發兌の字林漢報を郵送し來る。

四月十五日 晴天。朝井氏と佐々友房氏を牛込北町に訪ふ。予輩計畫の事、品川弥二郎氏大に賛成せりと云ふ。寛談十一時に至て歸る。夜中西、鳥居等來談。

四月十六日 雨天。日曜日。午前木下宇三郎來訪。午時豚を割て飲む。下午井手と出て佐々氏を訪ふ、在らず。去て古庄氏を訪ふ、亦在らず。夜齊藤來談。

四月十七日 晴天。午前中西來談。下午井手氏と品川弥二郎氏を訪ふ。談ずる所あり。氏為に吉田松陰伝一部を出し贈らる。談話時を移して歸る。氏人を待つ、坦懷懇懃辺幅を修めず、送迎の礼最も慎む。帰途佐々友房氏を訪ふ、在らず。晚餐して之を待つ、終に歸らず、九時帰

寓。

四月十八日 晴。午前中西来談。下午井手と出て鳥尾中將を音羽の寓居に訪ふ。鳥田蕃根翁在焉。対清の方策に付き論ずる所あり。氏容□俊邁敏達人に過ぐ。議論周密頗る人を動す。然れども氏其器品川氏と伯仲し、廊廟の大器にあらず。懇談晡に至て辞帰す。是日上海田鍋安之助の信到る。写真を送り来る。

四月十九日 晴。朝中西正樹来談。佐々友房氏亦来る。曰く、漢口新聞事業に付き品川、西郷両氏に計り、児玉少将（源太郎）に就き資金の件を商量す。氏大に之を賛し、目下朝鮮滞在の川上中將に計り決する所有らんとす。為に佐々友房氏自ら朝鮮に至り、川上氏に面し商量せん事を歎む。晡時井手と出て市谷薬王寺前町に至り、児玉少将を訪ふ、在らず。堤真人氏を加賀町の寓に訪ひ晚餐し、七時出て児玉氏を訪ふ、在り。字林漢報創立の事に付き談議する所あり。氏明日を以て答ふる所あらんとす。十時帰る。途佐々友房氏を訪ひ小飲、辞帰。

四月二十日 晴天。午前出て品川子爵を訪ひ、昨夜児玉少将の事を告ぐ。子為に喜ばる。下午上車東京病院に至り別府真吉氏の病を訪ひ、病状甚だ好し。寛談、五時に至て帰る。白岩龍平上海より信来着。研究所の困迫の状を報じ来る。夜荒賀直順来訪、南州翁遺訓一冊を贈る。八時井手と佐々友房氏を訪ひ、児玉氏の返答如何を叩く。曰く、氏川上中將清韓旅行中の故を以明かに決する能はずと雖も大に賛同の意を表し、充分力を致さんと誓へり。独り品川弥二郎、西郷従道両氏大に我事業を賛し、参謀本部にて決する能はずば品川氏自ら誓て其資を出さんと謂へり。其義気誠実人をして感動せしむ。品川氏又曰く、我此の事業を助けて成らざるも怨む所なし。一旦其人を信じて之を助く。敗ると雖何の悔する事あらんと、同君の如き者真に知己と謂ふべし。

四月二十一日 雨天。午前佐々氏来訪。午時佐氏の招きを以て九段坂下の飯舗に至り中食す。（この後1行分不明）

四月二十二日 晴天。朝井手と長岡子爵を浜町に訪ひ小談。去て副島伯を築地に訪ふ。病を以て

面するを得ず。帰途鳥居赫雄を神田に叩き、午時帰寓。夜鳥居来談。中西正樹亦来り。剣具を借て帰る。

四月二十三日 陰天。午前佐々氏を訪ひ小談。下午出て別府真吉氏の病を訪ひ、六時半帰寓。夜山田珠一の信到る。夜井手と亀井英三郎を訪ひ、十一時帰る。

四月二十四日 陰天、晴雨無常。下午井手と中西を訪ひ、五時出て荒賀直順氏を叩く。晚餐の饗を受く。中西亦来、十時辞帰。夜半雷雨電を挿て到る。

四月二十五日 風雨太猛。朝井手と佐々氏を訪ひ、其朝鮮行を送るの詩を交す。中餐を饗せらる。氏曰く、今朝鮮西郷伯を訪ふ。伯我事業を以て一昨二十三日大山陸軍大臣に計る。大山氏熟慮之を決せんと答へ、佐々氏の西郷邸を去らざるに大山到り、賛成し能はざる事を言う。蓋し機密費の実権は参謀本部川上操六之を握る。川上嘗て荒尾精の事業を賛し数万の金を費し、今日の失敗に至りしを以て四方の攻撃を受け、又大山等も其不始末を咎め居る際なれば、大山より主として之を賛する能はざるの情実あり。且つ議会に対し答弁の責に任ずる者は陸軍省にして、参謀本部は此責無し。故に大山の躊躇する固より尤むるに足らざる所なり。夜中西宿す。佐々氏来。

四月二十六日 晴天。午前朝鮮京城横田三郎、釜山瀬川浅之進、仁川山崎亀造に寄するの書を作り、安達氏に托す。又た京城新納少佐に一封を作り佐々氏に托し、葉室の事を依頼す。外熊本山田、緒方、岡本、前田、佐野及び右田喜七郎に与ふるの書を作り、安達氏等の一行に托す。右田氏には其依頼品を買ひ送れり。下午佐藤謙造来談。二時出て別府氏を東京病院に訪ふ。五時半帰る。夜佐々氏を訪ひ小談。去て亀井英三郎、古城亀喜等と（この後1行分不明）

四月二十七日 晴。終日在家。下午荒賀来談。夜中西等来談。是日熊本深水十八、上海岡部喜三郎の信及び上海白岩龍平より頃者発兌の上海新聞報を送り来る。

四月二十八日 晴。六時出て、佐々氏に至る。晌午又た至り小飲。下午一時出て新橋に至り、

佐々友房、安達謙造、佐々政之三君の朝鮮行を送る。井手三郎も是日を以て京都に赴く。大坂荒尾精、井深仲卿二氏に送書す。帰途東京病院に別府真吉氏を訪ひ、五時半帰る。

四月二十九日 晴。朝中西、河野来談。下午河野、鳥居と亀井英三郎を訪ひ、共に出て木下宇三郎を叩く、在らず。京橋に至り講談を聞き、帰途鳥居氏に至り小談、帰る。米原、齊藤に邂逅す。誘て寓所に来り、筍を煮て食ふ。鳥居、藪亦来る。鳥居留談。是日佐々氏より金三十円を送り来る。上海西村氏の信到る。

四月三十日 晴天。午前九時鳥居を誘ひ目鏡より馬車に乗じ、上野に至り道を谷中天王山に取り、刺客来島恒喜、西野文太郎の墳を吊し、日暮里を経て、林蹊を過ぎ麦隴を渡り、十一時飛鳥山有斐学舎親睦会に臨む。会する者四十余人、飲啖後亀井、河野、鳥居、狩野と北豊島郡滝野川の勝地を探り、板橋を経て又た飛鳥山に帰り、三時一同帰途に就く。途中牡丹を賞し、亀井、河野、齊藤、米原等と有斐齋齊藤の処に至り晚餐。九時河野と共に帰る。

五月初一日 晴天。午前出て別府氏を病院に訪ひ、十二時帰る。朝弟亀雄に金八円を給し、写本、宿料十一円、蒲団料三円を払ふ。下午鳥居を訪ふ、在らず。詩を遺して帰る。夜長嶋萬里、中西正樹前後来談。井手三郎大坂よりの信到る。

五月初二日 晴天。深水清、鳥居赫雄（この後半行分不明）古、中三氏と互に難韻を分ち小詩を賦し、二十首を得たり。暮散会。夜佐藤謙三来談、留宿す。春雨蕭条。

五月初三日 雨天。朝佐藤帰る。志賀哲太郎来談。西京井手三郎に復信す。上海白岩龍平の信至る。白岩は研究所の困難を救ふ為め市川徹弥と共に大坂に帰る筈なりと云ふ。又た熊本緒方二三、前田彪より来信。夜緒方、山田に発信、東京運動の概略を報ず。

五月初四日 晴。朝中西、荒賀、宮内、中川義弥、志賀来談。下午中西と荒賀の処に至り談ず。夜炸醬麵を作り食ふ。味頗る美。十時帰る。亀雄来談。家大人の書あり。

五月初五日 晴天、風大。午前中西来り、午後去

る。井手京都より来信。品川子京都にて都合悪しと云ふ。古城、志賀来談。中川義来り宿す。井手三郎に復信す。

五月六日 晴天。朝出て東京病院に別府氏を訪ふ、午時帰る。家大人及び野添叔父に発信す。亀井英三郎、平山某来談。晡時共に出て神田の書肆を順覧す。夜鳥居赫雄来談。十一時帰る。

五月七日 晴天。日曜日。朝川野敬太郎、米澤佐太郎、荒賀直順、小山元三来談。十一時出て靖国神社に至り吊謁。終りて角力を見る。午時小山、荒賀と富士見町の牛肉店に至り中食し、再び角力を見る。五時帰る。夜鳥居、川野、中西来談。鳥、川二氏十二時帰る。

五月八日 晴天。朝出て別府真吉氏を病院に訪ひ、午時上車帰寓。途上書肆にて鉄木真樹木児用兵論を買ふ。夜川野、平山と亀井を訪ひ、十時半帰る。

五月九日 晴天。午前上田茂二郎来談。下午川野と出て衣類帽子を買ひ、共に荒賀直順を訪ひ、五時去て有斐齋に至り齊藤員安を訪ひ、晚餐して帰。夜深水、古城亀喜来談。

五月十日 陰天。午前荒賀来談。下午中西来談。共に四時帰る。是日上海根津、猪飼、西村、田鍋、所員一同、高道竹雄、山内、磯長、馮、熊本県人に寄する書状九通を認む。

五月十一日 晴、風大。下午出て荒賀を訪ひ、森川町の射的場に至り射的し、去て小山元三を駒込千駄木町三番地に訪ふ。晚餐を吃し、談時を移して帰る。上海諸友に寄するの信を托す。荒賀を誘て帰る。野間某来談。荒賀十一時帰る。

五月十二日 晴天。終日在家。朝河野敬太郎来談。中西又来、下午帰る。夜齊藤来談。

五月十三日 晴天。午前河野来談。下午上車別府氏を病院に訪ひ、五時帰る。晚河野と玉川亭の肥後倶楽部集會に臨む。横井時雄来り演説す。八時帰る。九時齊藤、鳥居、米原、河野来談、十二時過ぎ帰る。

五月十四日 晴天。朝出て品川弥二郎氏を訪ふ。代々木に移住せりと云ふ。中西来り、晡時帰る。菅正懿に発信。

五月十五日 陰。朝中西来り宿す。古城亀亦来。葉室湛純、前田彪、佐々正之朝鮮仁川よりの書

状来る。小濱為五郎の信来、直に小浜に返信す。

五月十六日 風雨。下午川野敬太郎来談。共に出て佐々翁の留守宅を訪ひ、去て古莊韜を訪ひ、晚餐の饗を受け、七時辞帰す。小山元三の信到る。明日より上海に向ふと云ふ。

五月十七日 晴天。朝出て荒賀直順を誘ひ、去て小山元三を本郷千駄木町に訪ひ、上海研究所生徒並に生徒野中林吉、猪田正吉、三池親信に寄するの信を托す。八時辞帰。荒賀氏に至り小談。去て中西に（この後1行分不明）至り伊太利三傑伝を買ふ。帰途勤工場あり、手巾、鞋等の小具を購ひ帰る。

五月十八日 雨天。下午上車、東京病院に別府氏を訪ひ、五時上車帰寓。

五月十九日 晴天。午前鳥居、河野、藪、相部来談。下午出て中西を訪ひ小談。去て荒賀氏を叩き、五時辞帰。夜八時中川義来り留宿す。十二時に至て就寝。

五月二十日 陰天、夜雨。午前中義帰る。深水清来談。九時河野と出て古城貞吉を訪ふ、在らず。去て鳥居赫雄を叩く。古城在焉。十二時帰る。荒賀、中西来訪。夜降雨蕭條、独坐感慨無量、得長短詩數首。

五月二十一日 雨天。終日在家。朝河野来。

五月二十二日 雨天。午前家大人より羽織を郵送し来る。光彦の書及び佐久の書到る。野添伯父本月十日に死去せりと云ふ、可痛□。田鍋安之助の信国許より送り来る。河野来談。下午中西、佐藤謙造来談。夜荒賀直順来談。中西、荒賀と快談四更に至る。両氏留宿す。別府氏の信到る。

五月二十三日 雨天。午後別府氏を東京病院に訪ふ。明後日頃退院すと云ふ。五時上車帰寓。夜出て鳥居赫雄を訪ふ、在らず。山田珠一に発信。

五月二十四日 雨天。朝井手三郎に発信す。鳥居、河野来談、十二時帰る。晩河野と出て岐部熊雄を訪ふ、在らず。河野を誘て帰る。

五月二十五日 雨天。午前中西、中川来談。下午白岩龍平上海よりの信到る。過般研究所を脱し、荒尾迎への為大坂に帰りし廉を以て本月初

一日退校を命ぜられたりと云ふ。夜河野を誘ひ小談、帰る。

五月二十六日 雨天。別府氏の信臻る。明日東京病院を退院（この後数字分不明）。夜河野を誘ひ、出て古城を訪ひ小談。去て亀井英三郎を叩き、十時帰る。途上麵店に入り吃麵して帰る。

五月二十七日 晴雨無常。午前荒賀来談、下午四時帰る。安達謙造朝鮮京城よりの信到る。夜出て河野を誘ふ、在らず帰る。鳥居、古城来談。十二時帰る。

五月二十八日 晴。朝荒賀来り、九時過ぎ帰る。別府氏及び其同郷人某来訪。下午古城貞吉、亀井英三郎来談。別府以下諸氏四時辞帰す。晡時今田主税及び長崎人西田龍太来訪。西田生最奇器あり、頗る談ずるに足る。五時半帰る。深水清亦来談。西京井手、熊本緒方、漢口高橋謙の信至る。

五月二十九日 天。午前中西正樹、別府真吉両氏前後来談。下午亀雄来り、学資の不足を請ふて去る。夜川野と出て成田定を文部大臣官舎に訪ひ、共に出て文部秘書官吉田作弥を訪ひ小談。又た成田の処に帰り、九時雨を衝て帰る。途中鳥麵を食ふ。

五月三十日 雨。午前河野を訪ふ。夜静林氏と約あり、来らず。

五月三十一日 午時上海白岩龍平、市川徹弥に復信す。夜別府君来訪。九時鳥居又来る。別府を留て宿す。事予期に違ふ。

明治二十六年六月初一日より十二月三十一日に至る七ヶ月分

日誌 北平逸人大亮

東京。熊本。上海。漢口。上海。

六月初一日 晴天。朝静林氏帰り、中西来る。十時共に出て牛込矢来町に至り、野間芳太郎を訪ひ、十二時辞帰。下午京都井手素行に発信す。三時半出て、牛込揚場町に至り、別府氏を訪ふ。晩鶏湯の饗を受け、八時帰る。河野宅を訪ふ。鳥居、古城等在焉。寛談十一時に至り帰寓。

六月初二日 雨天。五時半出て永田町に至り、文部大臣官舎に成田定を訪ひ、中西と会し共に出

て、芝公園内七番地四号に原通商局長を訪ふ。病を以て逢はず。帰途北村三郎を訪ふ、在らず帰る。夜河野敬太郎を訪ひ談ず。

六月初三日 晴天。午前河野、荒賀来談。下午荒賀と出て、途中水道橋に於て皇后陛下の御通贊を拝す。去て有斐学舎に至り、齊藤員安を訪ひ小談。河野と出て熊本倶楽部に至り、小憩帰寓。群馬忠次郎上海よりの信到る。夜中西来り宿す。八時出て鳥居赫雄を訪ひ中西氏の事を商量し、牛肉を食ひ談話。十時半に至りて帰る。留守中別府氏来訪せりと云ふ。

六月四日 晴天。午前中西帰る。夜中川義来り宿す。雨。

六月五日 雨天。午前河野と鳥居を訪ひ、午時帰る。下午中西及び日本新聞社員某来訪。夜荒賀、瀬戸両氏来談。

六月六日 半晴。午前鳥居、河野来談。下午別府、建部二子来談。別府氏晩食後帰る。夜今田主税、西田龍太、荒賀三君来談十一時半帰る。荒氏留宿。

六月七日 晴天。中西来談。下午中、荒二氏帰る。四時米澤来り贅談、七時に至て去る。夜河野と岐部熊雄を訪ふ、在らず。去て堤真人を訪ふ、又不在。古城貞吉に至る、在らず。神田に至り鳥居赫雄を訪ひ、十一時帰る。家大人及び光彦の書到る。光は看守と為りし旨報じ赴せり。

六月八日 晴天。下午宮内某来談。上海三池親信、猪田正吉の信到る。

六月九日 晴天。朝瀬戸晋来談。下午荒賀直順来談。共に出て牛込に至り、川嶋栄三郎を訪ふ、在らず。赤城神社に徘徊して帰る。河野を訪ひ小談。

六月十日 雨天。天津仲正一（陸軍大尉小沢徳平也）、芝罘白須直に寄するの書を作り、中西正樹の天津行に托す。午前出て河野を訪ひ、晌午帰る。別府氏留守中に来訪せりと云ふ。下午河野と古城貞吉を訪ひ、三時帰る。夜鳥居来談。是日家大人の書及び菅婦人、京都志賀哲太郎の書到る。

六月十一日 雨天。日曜日。午前別府君及び井手の親戚庄野三益来訪。井手の信及び単衣一件、

金三円、扇子一把、品川弥二郎氏の書二枚を送り来る。下午出て有斐巒に至り、齊藤、野田等を訪ひ帰る。荒賀、古城、河野等前後来談。

六月十二日 雨天。家大人及び光彦に送書す。夜中西来り宿す。八時出て鳥居を訪ふ、在らず。小談、帰る。

六月十三日 雨。午前中西帰る。下午荒賀直順来談。三時岐部中尉及び西田龍太、朝鮮亡命人浅田某（偽姓也、李圭官）来談。浅田年齒三十許、日本服を着し、日本語を善くす。沈然にして思慮に富む。亦た国土の風あり。談話五時に至りて帰る。夜堤中尉来訪。九時中川義弥来り宿す。

六月十四日 陰天。午前別府氏来談。下午河野と小石川表町に至り、鳥居の移転宅を訪ふ、在らず。有斐巒に至り、齊藤を訪ひ晩餐を吃し、共に鳥居宅に至る。暮時鳥居来る。八時古城亦来る。予終に留宿す。

六月十五日 陰天。清国公使館馮孔懷に送書す。午前河野来談。緒方二三熊本よりの信到る。直に之に返書す。下午中西、米原、河野来談。中西留飯。荒賀亦来。二氏終宿す。談話深更に至て就寝。雨。

六月十六日 雨。中、荒二氏朝餐して帰る。

六月十七日 晴。下午荒賀、河野来る。共に出て岐部熊雄を訪、餃子を作り食す。八時半帰る。亜細亜東部図を交換し朝鮮亡命朴泳孝の書一枚を借りて帰る。

六月十八日 晴天。下午亀井英三郎来談。四時辞帰。

六月十九日 晴。午後荒賀、米澤来談。四時荒賀と同氏宅に至り談ず。晩居蕎麦を食ふ。八時帰る。家大人及び葉室湛純の信到る。葉室は予の曾て周旋せし朝鮮行の事全く結着せしを告げ、近日中より出発すと云ふ。夜中西来り、十一時帰る。家大人に返信す。

六月二十日 晴天。午前荒賀氏、室内射的銃を携へ来る。晌午荒氏と出て神田に至り、雷管を購はんとす。鑑札無きを以て売らず。下午河野、別府、瀬戸来談。別府氏五時半帰る。夜今田主税来談、十時帰る。

六月二十一日 陰天。朝中川来る。茶室にて要務

を理す。出て河野を訪ふ。昨夜佐々翁帰京の事を聞き、平山、河野と出て之を訪ふ、在らず。言を遣して帰る。下午研究所生徒有泉朝次郎来訪。佐藤謙造亦来る。四時荒賀直順来談。夜河野と出て佐々翁を訪ふ、在らず。九時帰る。談話移時而帰る。中西在焉。終に留宿す。

六月二十二日 積陰。中西金一元を遣し帰る。午前井手に京都に発信し、佐翁の帰京を告げ、其上京を促す。猪飼は大津商業学校長となるを以て之を賀するなり。下午上海白岩龍平の信到る。荒賀雷管百個を携へ来る。即ち庭前にて射的をなす。別府氏亦来る。両氏を留め豚を割て晩食す。夜佐々氏来訪せりと云ふ。

六月二十三日 晴天。午前佐々翁来訪。下午有泉生来談。夜佐々氏を訪ふ。有斐学生二三十名来る。朝鮮談を聞き、十一時帰る。

六月二十四日 晴天。午前荒賀、中西来談。下午佐々翁来訪。朝鮮秘密書類を携へ来り、予に交へて校訂せしむ。荒賀、河野亦至る。室内射的を為す。午前井手三郎の信京都より至る。直に復信、其東上を催す。夜鳥居、河野来談。八時出て岐部熊雄を訪ひ、別府氏の為に朴泳孝の書二葉を請ひ、十一時半帰る。

六月二十五日 晴。午下雷雨頃刻にして歇む。別府君来訪。共に射的を為す。七時出て佐々氏を訪ひ、日清の形勢を談ず。古城、鳥居亦来る。十一時半辞帰。

六月二十六日 晴天。七時出て佐々氏を訪ひ、上車。共に出て築地劇場歌舞伎座に至る。先つ茶屋にて小憩。是日来賓大石朝鮮公使及び国分書記生と予也。皆佐々氏の招邀する所なり。十時入場、大盃、以下数番を演ず。倡優団十郎、菊五郎、左団次輩技最妙、団十か齊藤利三、菊五か齊藤寅盛、左団次間瀬某等殊に妙。十二時茶屋に帰り中餐。下午又た行て見る。六時大石、国分辞帰。佐々氏と予は七時上車、佐々氏に帰り晩餐し、帰途別府真吉氏を訪ふ、在らず帰る。

六月二十七日 晴。午前中西、荒賀、河野来談。下午上車、高島中將を紀尾伊坂の邸に訪ふ、在らず。帰途上車内尾直喜を訪ふ、亦た在らず帰る。晚古城貞吉、別府真吉二氏来談。

六月二十八日 晴天。午前上車、出て紀尾伊町に至り、高島中將を訪ひ計画の事を談す。同氏大に賛成し、八月に至らば助力せんと云ふ。十一時帰寓。荒賀氏在焉。下午米原来談。二時半出て牛込揚場町に至り、別府真吉氏を訪ひ、五時辞して北町に至り、佐々友房氏を訪ふ。病に臥す。一書を留て帰る。

七月初四日 晴天。午前荒賀来談。下午別府真吉氏富山県よりの書状到る。中西、河野前後来談。夜出て小川町に至り、有泉朝次郎を訪ふ。其兄某に面す。談話時を移て帰る。雷雨。

七月五日 陰天。午前河野と出て鳥居赫雄を訪ひ、共に出て小石川大学植物園を遊覧し、正午鳥居の処に帰り中餐し、河野と有斐巒に至り齊藤、米原を訪ひ寛談。五時に至て帰る。夜雷雨。

七月六日 晴天。早朝中島某来談。午前出て佐々氏訪ひ小談、帰る。荒賀亦来。下午河野、米原、齊藤、中西来談。米原、齊藤と晩餐後、亀井英三郎を訪ひ談話。十二時に至て帰る。

七月七日 晴天。下午中西来談。夜佐々氏を訪ふ、在らず。岐部熊雄を訪ひ小飲、帰る。是日家弟光彦及び富山市別府真吉に発信す。

七月八日 晴天。午前荒賀、河野来談。古新聞を売却して一元を得、直に三人神田に至り牛肉を食ひ帰る。下午中西、有泉前後来談。夜出て佐々友房氏を訪ふ、在らず。待て十時に至る。帰る途中之に逢ふ。立談、片刻別れ帰る。

七月九日 晴天。午前上車、出て銀座楽善堂に至り、岸田吟香を訪ふ、在らず。上車帰る。下午佐藤謙造来り、明日より帰郷を以て告ぐ。夜古城亀喜来談。十時佐々氏亦枉顧小談、帰る。

七月十日 晴天。午前有泉朝次郎、水谷三郎来談。午時中西来り中餐す。荒賀直順亦来る。荒賀と出て佐々氏を訪ふ。荒氏の事を佐々氏に囑托する所有りしが、本日其緒を得たればなり。佐氏と寛談。五時前帰る。晚

七月十一日 晴天。午前出て有斐学に至り、齊藤を誘ひ鳥居赫雄を訪ひ、十二時共に出て有斐巒に至り、米原、齊藤と帰寓。有泉朝次郎、河野敬太郎、古庄某来談。齊藤、米原を留め晩食す。荒賀、中西又来る。荒氏香□葡萄酒一瓶を

捉げ来る。六人且つ飲み且つ談じ、十時に至りて皆帰る。是日井手三郎京都より信到り、十七日熊本に帰るを以て荷物を送り呉れん事を請ふ。

七月十二日 晴天。朝荒賀直順来り、朝食して去る。(この後数字分不明)至り、要務を為す。下午中西来訪、十五日より天津に赴くと云ふ。晡時藪伍一来訪、佐々氏の意を致す。晚餐後出て佐々氏を訪ふ。素麵の饗を受け、佐々氏と共に音羽に至り、鳥尾中将を訪ふ、在らず。名刺を遺して出づ。道を枉て蓮通院前に至り、木下法学博士を訪ふ、在らず。去て有斐齋に至り、齊藤、米原等を訪ふ、又た在らず。終に三浦中将に至る、又た在らず。途中佐々氏と分れ帰寓。是日熊本緒方二三及び岸田吟香に発信す。

七月十三日 晴天。午前上車新橋に至り、井手三郎の荷物を京都に送る。下午河野と出て有斐齋に至り、齊藤、米原、狩野、野田等と談じ、十時帰る。

七月十四日 晴天。午前河野を訪ひ小談、帰る。下午河野、古城亀喜来談。夜古城貞吉、竹内鋭彦、吉富幸次郎、平田良知、河野敬等来談。中西又た来り、明晚出発の事を告ぐ。七月十五日晴天。天津仲正一(即ち小沢徳平)、石川伍一、芝罘白須直、北京中島雄、長崎佐野直喜、伊藤勝造諸氏に寄するの書を作り、今晚発朝該地向ふの中西正樹氏に托送す。下午荒賀来談。午前今田主税来談。下午西田龍太及び平戸の人守山純一来訪、五時半辞帰す。夜中西、荒賀来談。兩人留宿。

七月十六日 晴。午前七時荒賀と上車、新橋に至り中西正樹の天津行を送る。帰途上車麴町一番町に至り、研究所生徒水谷三郎を訪ふ。同所生徒香月梅外亦在焉。水谷酒を出し昼餐を饗す。下午一時辞帰。(この後数字分不明)井手三郎京都よりの信来到荷物領収を報するなり。夜出て佐々氏を訪ふ、在らず。去て鳥居氏を小石川に訪ふ。齊藤、米原、狩野、小笠原、古城諸氏在焉。談話十二時に至り、諸氏去る。予古城と留宿す。

七月十七日 陰天。早起鳥居氏より帰り、佐々氏

を訪ふ。小談帰寓。河野を誘て音羽町に鳥尾中将を訪ふ。閑談四時間の久しきに及び辞し帰る。中将為に其自著時事談一部を贈らる。帰途有斐齋に至り、齊藤、米原を訪ひ中餐し、四時齊藤、米原を誘ひ共に予の寓所に帰る。佐々氏の招きを以て上車北町に至る。井野春毅に面会云々の事なり。小談、上車帰寓。齊藤、米原を留て晩食し、予は上車連雀町に至り井野春毅を訪ふ。談話頃刻にして帰る。小雨。鳥居、河野、齊藤、米原等と寛談飲啖、十二時に至て散ず。

七月十八日 晴天。齊藤、米原、河野来談。午時山葯湯を造り食を競ふ。雅歌清談、暮時に至て帰る。夜小笠原某、上田弥次郎来訪。緒方二三、有泉朝次郎の書状来着。

七月十九日 晴天。午前狩野直記、今田主税、森山純一、米澤佐太郎来談。下午佐々氏を訪ひ、西郷伯への点書を乞ひ、四時帰る。晚河野、沢村、長谷川来談。家弟光彦の信到る。監獄を辞職せりと云ふ。

七月二十日 雨天。早朝上車、三年町に至り、西郷伯を訪ふ、在らず。晚餐又た同伯を訪ふ。本日沼津の別墅に赴けりと云ふ。帰途河野を訪ひ、共に出て亀井英三郎を敲き談話。十時に至て帰る。甘雨滂沱。是日別府真吉氏富山よりの信到る。

七月二十一日 晴天。早朝河野と出て、予は佐々氏を訪ひ上車、共に出て海軍中将委中牟田倉之助氏を赤坂氷川町に訪ふ。彷徨の間佐々氏約束の時間を誤り、終に中牟田氏に至る能はず。氏と分れ帰る。表町に至り鳥居赫雄を訪ひ中餐し、有斐齋に至り米原と談じ、四時帰る。河野敬、平山氏清在焉。研究所生徒小野常三郎、香月梅外来談。夜高等商業(この後半行分不明)来訪、十一時帰る。齊藤員安亦来。

七月二十二日 晴天。五時半出て、佐々氏を訪ひ、上車共に出て麻布に至り、海軍中将中牟田倉之助を訪ふ。年齒五十許り、莊重端嚴の好武臣なり。就て身上の事を商量す。同氏曰く、鳥崎大佐此事を管す、請ふ就て商量せよと。即ち辞して出て佐々翁と別れ、予は翁の宅に帰り、書を鳥崎氏に寄せ其住所を照会す。帰寓後河野

敬太郎を訪ひ、十二時帰る。井手三郎の信到る。昨日京都を出発せりと云ふ。西村忠四郎に発信す。三時出て海軍省に至り、島崎大佐の住所を問ひ、車を命じて麻布盛岡町に至る。近日鳥居坂近傍に移転せりと云ふ。找尋百方すれども終に其所を得ず、空く帰る。夜鳥居を訪ふ。齊藤、米原亦来る。談話十一時に至て帰る。帰途有斐巒に至り齊藤等の処に宿す。

七月二十三日 晴。五時有斐校を辞し、牛込に佐々氏を訪ふ。未だ褥に在るを以て帰る。上車、麻布盛岡町に至り島崎大佐の住所を問ひ、長坂町佐土原島津邸内に至り、大佐を訪ひ之に面し、身上の事を商量して帰る。佐々翁を訪ひ、大佐と談話の趣を告げ、中餐後一時に至て辞す。途上白井新太郎を訪ひ、対清の方策を談じ、三時辞帰す。河野来談。荒賀直順の信到る。夜和田純、水谷三郎来談。和田は本日着京せりと云ふ。齊藤員安、河野敬来談。熊本安達謙造の信到る。齊、安二氏十時半帰る。別府真吉氏に発信、上海の事を報ず。

七月二十四日 晴天。早朝河野と出て牛込に至り、佐々氏を訪ふ、不在。同氏宅にて朝食して帰る。夜出て佐々氏を訪ふ。志水小一郎、齊藤、河野、古庄嘉門氏来会。飲で十二時に至り辞帰す。齊藤来り宿す。

七月二十五日 晴。早朝河野、齊藤と出て新橋に至り、佐々氏の帰県を送る。齊、河二氏と帰寓。齊藤と中餐す。夜中西正樹、神戸よりの信到る。小雨。

七月二十六日 雨。涼気如秋。午前河野、上田茂、白井新太郎来談。下午河野、香月来談。野田寛来り、別を叙す。明日より帰県と云ふ。夜齊藤、河野、亀井前後来談。

七月二十七日 晴天。朝、藪、河野、小野常三郎、和田純、平山来談。河野と出て有斐巒に至り、野田寛の帰県を送る。十時帰る。下午米津来談。晚餐後上車麻布長坂町に至り、島崎大佐を訪ふ、在焉。海軍省に申込の事決定せりと云ふ。帰途河野を訪ひ、十時帰る。

七月二十八日 晴天。朝出て上車赤坂溜池榎坂町五番地に至り、海軍少佐安原金次氏を訪ひ対清の事を談じ、安原と出て海軍省に至り、島崎大

佐に面し一件の約束を為し、上車帰る。河野を訪ひ、午時帰る。下午出て有斐巒に至り、齊藤、米原等を訪ひ、齊藤と共に出て専門学務局長木下廣次氏を訪ひ寛談。五時有斐巒に帰り晚餐し、七時齊藤と本郷の藪蕎麦に至り二碗を吃し、齊藤と分れ帰る。明月如霜爽涼可人。晚北京帰来の船津辰一郎来訪せりと云ふ。

七月二十九日 晴天。終日在家。小野常三郎、深水十八の信到る。深水には直に復信す。

七月三十日 晴天。日曜日。下午出て佐々氏の留守宅を訪ひ、去て岐部熊雄を訪ふ、不在、書を遺して帰る。夜出て河野を訪ひ、十時帰る。島崎大佐の信到る。明日海軍省へ出願の事を告ぐ。

七月三十一日 小雨、晴。十時出て海軍省に至り、島崎大佐を軍令部に訪ひ、金百二十五円を受取り、上車帰寓。下午佐々氏を訪ひ前借の金四十五円を返却し、去て有斐巒に至り齊藤、米原を訪ひ、河野と四人出て本郷藪蕎麦に至り諸人を饗す。帰途鳥居宅に至り寛談、十時に至り帰る。月色玲瓏。佐々氏に発信、海軍省との関係落着の事を報じ、同氏を送るの短古一扁を郵送す。

八月初一日 晴天。朝出て古城貞吉を訪ひ別を告げ、去て亀井英三郎に至る。朝食を吃し小談、去て上車青山南町に至り、高橋昌を訪ふ、在らず。名刺を遺して帰り、紀尾伊町に至り、高島中将を訪ひ寛談。一時半間にして上車三番地町に至り、内尾直記を訪ひ小談、帰寓。下午鶏を割き魚を切り、亀井、齊藤、米原、河野、鳥居、古城諸氏を招き饗す。五時諸氏と共に出て神楽坂温泉に至り、碁を囲み茶を啜り、清風樓上に団坐し寛談。夜八時過ぎに至り散帰す。家大人及び妹佐久の書、小濱為五郎の信到る。夜平山来談。

八月二日 晴天。朝和田、香月、米澤、荒賀、中西乾及び富山市別府真吉氏へ発信、帰県を告げ、別府氏には東京にて運動の概略を報ず。午前和田純来る。留て中食す。下午香月、水谷及び船津辰一郎来訪。諸氏を留て晚餐を饗す。夜齊藤、河野二氏及び中西乾、正樹氏の兄、柳沢氏来談。齊藤、河野と出て氷を吃し、河野氏に

至り談じ、十一時帰る。頭痛。

八月三日 陰天。下午小雨。朝中島亮卿、弟亀雄、古城亀喜諸氏来談。八時上車牛込小山伏町に至り、古莊嘉門翁を訪ひ別を叙し、帰途佐々氏に至り中餐の饗を受け、下午帰寓。銀貨四十円を紙幣に兌換す。下午和田純、水谷三郎、香月梅外三氏来訪。予を誘て麴町三番町の萬亀亭に至り饗す。浴後三氏と飲み寛談。八時に至り散帰す。降雨。

八月四日 晴天。是日將に京地を發し熊城に帰らんとす。早起行李を收拾す。十時半河野敬太郎と上車、飯田町の寓を出て新橋停車場に至る。水谷三郎、香月梅外、和田純、齊藤員安、米原、鳥居、藪、狩野諸氏来り送る。十一時四十分開車、別を叙して去る。顧ふに予回天の鴻漢を齎らし孤劍神京に入りてより已に五閱月、左支右絀志を得ずして空く帰程に上る。時勢の未可なるか為に然ると雖、豈に多少感慨無きを得んや。沼津にて河野敬太郎と分る。同氏は避暑の為に此地に来遊せる者なり。下午箱根の險を過ぐ。涼爽為秋。此を過ぐれば富士を天半に望む。予二十三年以来東海道を往復する前後六回未だ曾て富山の真面望まざるなし。豈に名山の靈英雄を識取する有る乎。大井川を過ぎ、金谷に至れば日全く暮る。十二時名古屋を過ぐ。雨。

八月五日 黎明京都を過ぐ。比叡、愛宕の諸峯、翠嵐欲滴。六時二十分大坂に着し、梅田停車場にて下車。中の島五丁目富田氏方に投ず。旧済々養生徒福島清在焉。朝食後盤垣休憩す。下午二時結束旅店を辞し、福島氏の案内にて上車、安治川岸に至り汽車常盤丸に投ず。刻下汽船会社の競争中なるを以て、中等船賃僅かに一円七十銭たり。同室の客十余人。五時投錨、天保山沖に出つ。八時神戸に着し、九時又た開船す。港内の夜景頗る佳なり。甲板上に在りて涼を納る。和田岬を廻り、播磨灘を過ぐ。風波微動。

八月六日 黎明水島灘を過ぐ。六時半攢州多度津に達す。昨夜鹿兎人蒲地清実に邂逅す。同氏近に暹羅に赴くを聞き、其需に応じ香港領事館天野、豊島の両氏に添書す。船上左岸に丸亀の城

市を望む。山陽四国の内海、風波平穩、左望右眇、風色佳絶、名状す可からず。夜十二時船馬関に達す。小蒸気船に投じて門司港に至り、筑人岩附安義と共に旅店石田屋に投ず。談後就寝。

八月七日 四時起床。浴後朝食を吃し、五時四十分一番汽車に乗す。小倉にて岩附と分れ、下午一時池田駅に達す。車上熱氣如烘、腕車を雇て熊本鎮西館に至る。緒方二三、山田珠一、森又八、朝山景春、浅山知定、外諸氏に面す。少焉、右田、深水、松倉、井口、平山諸氏来訪。予を池田に迎へたりと云ふ。出て佐々氏を訪ふ、在らず。飯店に至り中餐を吃し鎮西館に帰る。晚岡本源次、井手三郎諸氏来訪。予は出て佐々氏を訪ひ小談。熊谷直亮、古川権九郎、廣吉秀雄、中西正義等と六間町に至り鰻飯を吃す。快談九時に至り散ず、鎮西館に帰る。岡本、山田、前田、緒方、井手、池邊源諸氏在り。寛談十一時に至り、予は岡本の処に至り宿す。

八月八日 晴。午前岡本と出て鎮西館に至り、同窓会に臨む。佐々、内藤、武藤、西川、浅山諸氏以下来会する者百三十余人。快飲健談、豪談五時に至り、予は研究所生徒諸氏と前約有るを以て右田、深水二氏と春日村に至り、板倉義家の宅に会し、今後対清の方針に付き談話。十二時に至り予は板倉氏に宿す。

八月九日 晴。朝食後板倉氏を辞し、薬園町に至り津野一雄を訪ひ、古川権九郎と三人旧を談じ新を話し、下午一時緒方を誘ひ、津野、古川二氏と途中明午橋にて分れ緒方と上車水前寺に至り、一旗亭を借り片山、井手、前田等と会し対清の方策を議し、飲談歡話、晡時に至り相伴て鎮西館に帰る。十時緒、片、前三氏と出て牛肉を食ふ。鎮西館に宿す。

八月十日 晴。午前上車、宇土に帰る。徳田、宮原、野村一松来訪。別府君富山よりの信到る。外に大隈の信又来る。一昨日板倉より上海平野、大隈、勝木、宮部、原、青木、松倉、山岸、吉武、三沢、橋口、猪田、野中諸氏の信に接手す。去る三月牧氏の帰県に托せし者なり。是別府真吉、西村忠一両氏に復信、帰県を報

- ず。
- 八月十一日 晴。終日宇土の宅に在り。
- 八月十二日 晴。午前上車宇土より熊本に帰り、鎮西館に至る。朝山景春と出て安達謙造を訪ふ。志垣等来談。晩山田珠一と安達を誘ひ通町飯店に至り饗す。安達の東行を餞するなり。夜矢鳥兄弟、柏木某等来訪。和田純の信東京より到る。
- 八月十三日 雨天。朝出て右田を訪ひ小談。去て宮本源次に到る、不在。去て楠町に秋山儀太郎を叩き小談。晌午上車薬園町に至り、前田を訪ふ。晩酒肉を命じ守田愿の厳父及び前田等と飲む。終に宿す。西村忠四郎、佐賀よりの信到る。
- 八月十四日 晴天。午前前田と鎮西館に帰る。志水元吾等に面す。山田等と清国曾遊会の事を商量し、予は上車春日に至り、松倉氏を訪ふ。内尾某、中西重太郎、井口等在焉。晩深水十八氏宅に至り飲む。三池親信、平山氏清又来会。夜松倉氏に帰り宿す。是日八代松井敏之、東京島崎好忠両氏に発信す。三池より上海大川愛次郎、甲斐靖の信に接手す。
- 八月十五日 晴。午前松倉氏に至り三池、深水、山田九郎諸氏と談ず。晌午深水、三池両氏と帰る途中岡部喜三郎を其旅寓に訪ふ。右田、勝木両氏に在り、小談。右、勝、深三氏と出て通町飯店に至り中餐を饗す。去て井手三郎を訪ふ、在らず。右田氏に至り談ず。後深水と前田を薬園町に訪ひ小談。予は出て津田一雄を叩き、帰って前田氏に宿す。
- 八月十六日 晴。午前鎮西館に至り親睦会の準備を為す。五時佐々、山田、有吉、村井諸氏以下二十余名鎮西館に会し、支那曾遊親睦会を開く。十時散会。片山と鎮西館に宿す。是八代松井、樗木大尉、河野敬太郎の信到る。
- 八月十七日 晴。午前十時明十橋富重に至り曾遊会員一同と撮影す。予は深水宅に至り研究所諸氏と会し生徒諸氏の部署を為す。五時辞帰。山田珠一と井手三郎の病を訪ひ、前田と鰻飯を吃し、去て志水を訪ふ、在らず。平山氏清を訪ひ、十時前田氏に帰り宿す。
- 八月十八日 晴。午前緒方と出て家屋を找む。秋山儀太郎を訪ひ小談。下午深水、井口両氏と出て山崎町通町を往来して家屋を找む、無し。山崎町に於て支那大地図の表装を托す。代一元三角。帰途永井源之進を訪ふ、在らず、帰る。夜佐々氏を訪ふ、在らず。山田珠一、井芹経平両氏と鎮西館に談ず。
- 八月十九日 晴。午前深水、松倉両氏と井手の病を訪ふ。予は留て大友達行、佐々木某等と談じ、諸氏と同居中食し、二時辞帰鎮西館、研究所生徒諸氏在焉。晩佐々氏を鎮西館に訪ひ小談、帰る。夜上羽矢直、桑原信五郎、永井勝太来談。
- 八月二十日 雨天。午前緒方と出て竹屋町長谷川氏の一室を借るを約す。帰途井手三郎の病を訪ひ帰る。晡時杉谷平七郎来訪。夜平山来談。
- 八月二十一日 雨天。午前竹屋町長谷川氏に移寓す。下午雨を衝て緒方と出て松平知事を其官舎に訪ふ、不在。去て県庁に至り之を訪ふ。五時官舎にて会談を約し、鎮西館に帰る。五時半緒方と松平知事を訪ふ。安楽警部長、笹田書記官、山内参事官等在焉。座に着き諸氏の質問に対し縷々清国に政体、風俗、兵制、現勢等を評論す。酒を出し晚餐を饗せらる。歓談十時半に至り辞帰、鎮西館に宿す。
- 八月二十二日 晴。早朝鎮西館より寓所に帰る。深水、勝木、右田、井口来談。事を緒方に譲り、予は出て鎮西館に至り中食す。下午一時佐々布遠氏の迎を以て手取高等小学校に至り、市内各学校教員七十名許りに向ひ清国談を為す。二時半間にして終る。校長諸氏と茶談、少時にして鎮西館に帰る。晩食後鎮西館に至り浅山知定氏の党派幻燈を見る。是日午前和田純鎮西館に來り、清国内地の事情を質問す。藤城亀彦上海より、林田道利宇土よりの信到る。
- 八月二十三日 晴。午前寓所に在り。生徒諸氏来会。福岡大熊鵬来訪。本日来着せりと云ふ。中餐後上車、出て脇山逸馬を明十橋に訪ひ、酒談。時を移し、帰途家弟を山崎町に訪ひ小談、鎮西館に帰る。六時清国曾遊諸氏と村井同吉氏の招饗に應ず。会する者佐々、津田両氏を初め外来和田、大熊を加へ十五六名、歓談興を極

め、十一時半辞し帰る。是朝鮮葉室湛純、遠州永原虎雄の信到る。

八月二十四日 雨。午前上車、出て本山村に財津志満記氏を訪ひ、計画上の事を談じ、晌午辞帰。春日に至り松倉を訪ふ、在らず、上車帰寓。下午二時上車、緒方、井口、松倉、深水、右田、池部、勝木諸氏と出て、研究所生徒大熊鵬、和田純両子を砂取町碧水楼に饗す。諸氏と二小舟を砂取川に泛べ小魚を漁す。帰りて宴を開く。豪飲健啖、八時半に至り月を踏で帰る。一路虫声天秋に入る。

八月二十五日 晴。午前緒方、井口、勝木三氏と池田駅より汽車に乗り春日に至り、大熊鵬の帰県を送り、松倉氏に至る。鹿児島の子生徒楠内友次郎在焉。本日来着せりと云ふ。飲酒午餉、楠内、橋口二氏辞帰。四時半緒方氏等と帰寓。夜緒方と山田珠一を訪ひ、十一時帰る。

八月二十六日 晴。五時緒方と熊本を發、郷里に帰る。川尻にて緒方と分れ、上車帰家。上海白岩龍平、長崎山内崑両氏の信来着。午時出て矢島兄弟を訪ふ。富永□朗在焉。五時帰家。夜光彦と親戚を廻訪し、西念寺、法華寺、城山等の塋地に至り、先妣及び叔父母、祖父母の墳を拝す。此夜月色清朗。兄弟相付ふて母堂の墓に展す。指を屈すれば十年前に在り。

八月二十七日 晴。朝矢島篤政を誘ひ、湯白山に登らんとす。途神山村に至る。矢島病を發し登る能はず。予独り光園寺に遊ぶ。林を穿ち泉を掬し、徜徉甚適。東宇土、熊本城市を望み、南松橋沖を襟帯の下に俯瞰す。山の東北稲田万頃蒼翠天に接す。予海を渡てより此山に登らざる、殆んど十年矣。柱上の題名模糊として尚存す。蓋し明治十一年五月十九日、片山、沼、矢島三子と同遊の時題せし者、指を屈すれば殆ど十六年、正に予が十四五歳の頃なりし。拾年想之恍として世を隔つるが如し。山を下り神山村小山某宅に至り、矢島生の病癒するを待ち、午時帰家。七時光彦と家を辞し、月を踏で熊本に向ふ途上若宮附近の茶店に小休し、九時半春日に達し、松倉を訪ふ、在らず。十一時竹屋町の寓所に帰る。是日富山別府氏に復信す(□日なり)。夜涼如秋。

八月二十八日 晴。午前深水、松倉、勝木来る。緒方亦帰来。予は出て岡本源次を訪ふ。西川良樹、沼田九八郎、池邊源太郎両氏に在焉。午時帰寓。中食後出て、樗木大尉を訪ふ、在らず。去て永井(この後、紙がにじんで半行分不明)三氏来る。三時永井の招きを以て上車(半行分不明)倉義家を招き共に飲む。永井頗る酔ふ。十時半永井を護(数字分不明)帰り、予は松倉氏に至り宿す。西村忠一佐賀よりの信到る。

八月二十九日 雨。終日在家。松倉、勝木、深水、篠原諸氏来る。夜鹿児島人蒲地清実来り、金を借て去る。此夜眼甚だ病む。山田珠一來談。

八月三十日 晴。朝出て山崎町に至り、支那大地国地の表装せし者を取る。表装一元三角。上車鎮西館に帰り、篠原に托し色粧を為す。暮時終る。鎮西館に帰る。上海猪田正吉の信到る。夜山田珠一を訪ひ談ず。

八月三十一日 晴。午前生徒諸氏来会。下午出て秋山儀太郎を訪ひ、林田道利の事に付き商量し、鎮西館に至り小談、帰る。天津中西正樹の信到る。井手三郎に発信す。是日細川侯爵相州三浦郡葉山の別荘に薨す。

九月初一日 晴天。晩食後緒方氏と出で洗馬、新町地方に至り清朝史略、元明史略、和漢年表、蕪舟令、文章規範正統、十八史略等の書を購ふて帰る。是日上海田鍋安之助、山内崑に発信す。

九月二日 陰天。朝出て不知館に至り、佐々氏を訪ひ立談片刻、去て山田を新聞社に訪ひ小談。岡本源次を文学部に訪ひ、十三時帰る。下午秋山儀太郎、片山敏彦来訪。秋山と出て志水元吾を新屋敷に訪ふ、在らず。宇野貞友に至る、亦た在らず、帰る。

九月三日 風雨。下午鎮西館に至る。前田彪小倉より、井手三郎中島村よりの信来着。

九月四日 晴天。下午緒方氏と島田数雄氏を新屋敷に弔唁す。其母堂昨夜仙遊せしを以てなり。晩出て緒方と佐々氏を訪ひ小談。去て九州学院に至り、池邊源太郎を訪ひ、九時帰る。文学部に至り岡本源次を叩き、十時共に出て島田数雄に至る。内藤儀十郎、池邊、藤本、井芹諸氏に

- 焉。十二時半辞帰る。
- 九月五日 晴。朝佐々氏を訪ふ、病を以て面せず。下午四時子飼源空寺に至り、島田氏母堂の葬に会す。古城貞吉東京よりの信来着。
- 九月六日 晴。朝出て佐々氏を訪ふ。病未だ愈へず。鎮西館に至り志水元吾と山尾直人を訪ひ、十二時帰寓。下午池部秀次来談。夜右田、緒方、高木末熊と壮士芝居なる者を見る。一時帰る。
- 九月七日 晴。下午秋山儀太郎来談、五時帰る。晩食後緒方、阿部野と島田数雄に至り談じ、十時帰る。
- 九月八日 晴天。終日在寓。夜今山氏来談。
- 九月九日 晴。下午志水、秋山、山尾、宇野貞度、井芹諸氏と新屋敷藤本友世の宅に会す。十時秋山等と共に帰る。
- 九月十日 晴。午前出て、佐々氏を不知館に訪ふ。下午緒方氏と白川に游泳し、島田数雄を訪ひ、五時帰る。夜右田来談。大澤龍二郎氏鹿兒島より帰途来訪、一宿す。
- 九月十一日 晴。午前佐々氏を訪ひ小談、帰る。東京中川義弥、長崎佐野直記に発信す。晩食後緒方、大澤二氏と白川に浴す。東京齊藤員安の信来着。
- 九月十二日 晴天。午前大澤龍二郎博多に帰る。夜井芹経平氏の招邀に応じ新屋敷に至る。片山敏彦来会。飲談、十二時に至て帰寓。
- 九月十三日 晴。午前出て、大谷高寛を新屋敷に訪ひ、原田信次郎の事に付き商量する所あり。晩去て安楽警部長を訪ひ、光彦の事を托し、酒談時を移し、去て不知大館に佐々氏を訪ふ。牧相愛又来訪。本日上海より帰来せりと云ふ。九時帰寓。右田、牧来談、十一時帰る。上海富永又吉、岡田晋太郎、大川愛次郎、群島忠次郎、甲斐靖の信来る。
- 九月十四日 晴。研究所諸氏来会。下午浅野徳義、吉田幾太郎、篠原由雄、家弟光彦来訪。安楽警部長の信到る。家弟の事成規の許さざる所あり。満期の後にあらざれば意の如くならずと云ふ。晡時緒方、右田と白川に浴す。
- 九月十五日 雨天。上海田鍋に発信、再遊の期を報ず。晌午緒方、右田、深水諸氏と末廣坐に至り星亨、龍野、金森、田中等の演説を傍聴す。帰途不知大館に至り佐々翁を訪ひ寛談。暮に及て帰る。夜右田来談。鳥居赫雄東京よりの信到る。
- 九月十六日 陰天。別府氏に発信す。
- 九月十七日 小雨。夜緒方氏と上通町五丁目に転寓す。研究所諸氏来談。
- 九月十八日 晴。午前三池氏来る。下午片山氏と其寓所に至り閑談。晩食後共に出て文学部に至り、支那語学生諸氏に面し、岡本を訪ひ、九時阿部野と共に帰る。
- 九月十九日 雨天。下午井手三郎来談。三時上車、海運社に至り佐々干城氏に面し、克堂翁周旋の金百弍拾円を受取り、百五拾円の借用証を納る。利子毎月一步二銭五厘たり。夜諸物品を購ふ。是日東京中川義弥及び大沢龍次郎、脇山逸馬、永井源之進、前田彪諸氏の信到る。九時三池氏と競商場に至り、衣類数点を購ふ。
- 九月二十日 雨天。朝井手三郎を訪ひ寛談。晌午井手、護城二氏と通町鶏飯屋に至り中餐す。下午井手、護城、桑原来談。桑原の南洋行を送るの詩一篇を書し之に与ふ。藪伍一郎の書東京より来る。夜脇山逸馬、秋山儀太郎来談。
- 九月二十一日 雨天。午前佐々氏を訪ひ小談。去て井手三郎を訪ふ。下午北京中島雄、別府真吉諸氏の信来着。是日我熊本人士が清国に対せる事業着手せし歴史を作り佐々氏に贈る。其嘱に応ぜるなり。夜秋山儀太郎を訪ふ。其住所を得ずして帰る。脇山来談。
- 九月二十二日 晴。朝秋山来談。下午上車、宇土に帰る。
- 九月二十三日 晴。朝板井豊彦に発信す。林田道利来談。夜玉崎を訪ひ、共に出て町役場に至り、高柳轍を訪ひ、十時帰る。
- 九月二十四日 雷雨。是日熊本諸友と出漁の約あり。朝上車川尻に至り、緒方二三氏を訪ふ。熊本より来会する者なし。因て鮮を割り共に飲み、午食後上車、熊本に帰る。是日藤崎宮の祭会にて市上頗る熱鬧。山田珠一等と新町地方を徘徊して帰る。夜伊□と板井豊彦来る。即ち弟光彦の借金弍拾円を弁償す。
- 九月二十五日 晴。午時佐々友房を不知大館に訪

ひ別を叙す。歸りて研究所生徒諸氏所設の離宴に列す。会する者、右田、緒方、松倉、井口、勝木、深水、平山、池部、岩崎、牧諸氏なり。四時出て有吉平吉氏を訪ひ小談。去て内藤儀十郎氏を敲く、不在。去て秋山儀太郎に至り小談。共に出て鎮西館に至り、交友諸氏の祖道を受く。会する者、中津静一郎、浅山知定、右田喜七郎、志水元吾、岡本源次、宇野□月、渡邊敬昌、秋山儀太郎、宇野貞度、藤本友世、井芹経平、池邊源太郎、山田珠一、西川良樹、緒方二三、西口敬止、毛利篤、森亦八、大畑、志垣、片山、有田、高木、石坂、岡本貞政諸氏なり。痛飲快談、九時に至て散ず。中沢、宇野両氏、詩及び国風を贈らる。志水、井芹、山田、右田等來談。

九月二十六日 雨天。午前上車貧兒寮に至り、塘林虎五郎を訪ひ茶談。時を移し、別を叙して歸る。途中新屋敷に至り島田数雄、志水元吾を訪ひ小談、歸寓。下午九州学院に至り内藤、井芹、宇野、片山、岡本、池邊、藤本、西口諸氏を訪ひ、別を叙し歸る。二時出て永井源之進、浅山知定、佐々干城、脇山逸馬、樗木政章諸氏を歴訪し、別を叙す。帰途秋山儀太郎を訪ひ、五時半歸る。六時研究所生徒諸氏と電光、九州日々、九州自由、熊本の新新聞社員を山崎町の京常樓に饗す。痛飲、十時に至りて歸る。阿部野氏來談。

九月二十七日 晴。午前右田氏に至り醴酪を飲む。下午上車、出て家弟光彦及び村井同吉、松平知事等を訪ふ、皆在らず。晩右田氏と鰻飯を吃す。夜片山、秋山、島田、阿部野、篠原、小山、右田、脇山諸氏來談。酒を出し飲み快談、十時に至て散ず。是日古川権九郎に発信す。

九月二十八日 晴天。早起結束す。山尾、有田、松倉、右田、平山、井口、勝木諸氏來りて別を告ぐ。鎮西館に至り、浅山、右田両氏に告別し、歸りて上車歸寓。林田、矢島、徳田三氏酒肴を携へ來り、行を送る。四時矢島と出て一丁目佐吉の処に至る。途中林田清太郎、浅井九郎二氏を訪ふ、在らず。名刺を留て別を為す。是夜会する者、高柳轍、石塚近思、宮原、菅正懿、玉崎、上羽矢直、高浜重、矢島兄弟、木村

友平、田邊某等なり。新を談じ旧を話し、献酬の間頗る愉快を覚ふ。十時散ず。篠原由雄來訪。十一時出て、一里親戚に至り別を告ぐ。

九月二十九日 晴天。早起水浴。祖先、先妣の靈牌に調し遠行を告げ、終りて朝食。巖君及び兩妹に別る。雄情甚だ切、不覺飲泣。親戚及び林田道利來りて行を送る。七時発車、十時三角港に着し、浦島分店に投ず。小憩出て、商船会社に至り、下田一巳氏を訪ひ、叙談、小刻乃歸る。中餐後支店長下田一巳氏來談。二時出て郵便局に至り、安富喬氏を訪ふ。林田清太郎氏在焉。談話時を移し、去て下田一巳に抵る酒肴を出し饗さる。安富氏亦來会。九時辞歸す。小林庸政氏油屋より予を招く、行かず。雷雨。

九月三十日 晴天。五時半起床。倉皇行李を理し、六甲丸に搭じ、中等室に賃す。六時開船、三時長崎に着し、土佐屋に搭ず。川北純三郎來訪。佐野発信し着崎を報ず。晩佐野直喜、徳丸策三來談。佐野宅に至り寛談。移時十二時就寝。

十月初一日 晴天。佐野氏に朝食し、共に出て雜品数点を購ひ、土佐屋に至り結束す。十一時汽船神戸丸に搭じ、河北純三郎と席を同ふす。風波平穩。

十月初二日 晴。終日洋上を走る。夜十二時吳淞沖に至り碇泊す。

十月初三日 雨天。朝吳淞に至る。潮少きを以て進口する能はず。終に小汽船に搭じ十一時上海に着し、田邊氏に投ず。寛談後出て、草場氏を隣屋を訪ふ。夜井深仲郷、三沢信一、大川愛次郎、甲斐靖、富永又、猪田正吉、江口音三、大木、武藤、藤城、白岩、草場諸氏來談。白岩、草場二氏留談。深更に至て歸る。

十月初四日 雨天。朝井深來談。岡田晋太郎、水谷三郎又來訪。十時出て高道竹雄を正金銀行に訪ひ、去て山内崑を樂善堂に敲き寛談。中餐の饗を受け十二時歸る。藤森茂一郎、武藤光彦來訪。藤森と共に出て、武藤氏に至る。中島裁之又來訪、今夕より漢口に赴くと云ふ。夜成田鍊之助、角田隆司郎、鐘崎、大川、隈元、中原、高道竹雄、山内崑、中島真浩、佐久間諸氏來談。田鍋氏と談話、五更に至り就寝。

十月初四日 晴。午前大川来談。出て中島真浩、佐久間等を訪ひ寛談。移時中餐して去り、草場氏を訪ひ小談、帰る。黒崎氏来談。夜上車樂善堂に至り、山内氏を訪ひ取継の銀二十元を交付し、去て研究所に至り、小山元三を訪ひ寛談。去て井深氏に抵り、十一時帰る。

十月五日 晴。沈文藻、山内、鐘崎両氏来談。下午熊本浅山、中津、右田、山田、緒方列一同、父上、光彦、高柳、石塚、秋山諸氏及び富山別府氏、東京島崎好忠氏に寄するの信を作り、別に海軍調度提要一部を島崎氏に郵送す。那部武次来訪。

十月六日 陰天。夜速水一孔を領事館に訪ひ、九時帰る。

十月七日 小雨。朝熊本、東京の知人に発信す。帰途武藤岩彦を訪ひ小談、帰る。白岩、群島来談。夜猪田正吉、内田英治来談。

十月八日 晴。下午成田、鐘崎来る。支那服の購買を両氏に托す。大川又来談。隠岐嘉雄、金島文四郎亦来る。夜成田留談、十時に至て帰る。

十月九日 陰天。午前田中義男来訪。下午上車、陳列場に至り観る。濱田、佐野、正木、諸人に面し寛談、帰る。帰途磯長を訪ひ小談。武藤を敲き帰る。夜草場氏を訪ひ、十時帰る。

十月十日 雨天。冷氣甚し。午前河北生来訪。下午藤城来談。夜鐘崎来。是日横浜丸入港。

十月十一日 雨天。午前邦人服を解き、頭髮及び鬚鬚を剃去し、満州衣冠に改む。優孟十年鏡に対して不覚大笑。下午出て日華洋行に至り、井深、御幡諸氏に面す。帰途樂善堂及び上野に至り、山内、磯長両氏を訪ひ、城外にて物品数点を購ひ帰る。夜成田、大川来談。

十月十二日 晴。午前田鍋氏を辞し、武藤の寓に移居す。夜大川、藤城、田鍋、甲斐諸氏来談。夜市に至り零碎を購て帰る。

十月十三日 晴。朝井深来訪。午前出て田鍋、佐久間、中島真行、草場等の諸氏を訪ふ。晩出て、草場氏に至り洗澡す。

十月十四日 晴。土曜日。午前上車英界に至り帽子、枕子を購ふ。下午出て郵船碼頭に至り、中島真浩の帰国を送る。白岩、青木、鐘崎、成田、大川等前後来談。夜大西、三澤前後来談。

十月十五日 晴天。日曜日。下午上車出て濱田氏を訪ひ、青木熊五郎、田鍋氏に至り、五時帰る。成田、井深、佐野、隈元、甲斐、高橋、白岩、富永諸氏来談。井深と出て日進洋行に至り、阿川太郎を訪ふ。萩の人、新たに天津より来る者。寛談、十時に至て帰る。白岩留宿。

十月十六日 晴天。下午阿川太郎来訪。携て佐久間を訪ひ小談。去て田鍋に至り談話、片刻即帰る。夜田鍋、猪田来談。

十月十七日 晴。夜出て草場氏に至り洗澡。去て田鍋に至り酒談、十時帰る。

十月十八日 晴。朝藤森茂一郎甯波より来る。下午大川来訪。夜天津中西、石川に発信す。十月十九日晴。下午成田、草場来談。夜出て田鍋に至る、在らず帰る。是日熊本松倉義家、東京荒賀直順、家大人、永井源之進の書状来る。

十月二十日 晴。熊本合資会社諸氏及び東京佐々友房氏、小倉前田彪宛ての書を発す。外に永井源之進、小濱為五郎、別府真吉諸氏に寄するの書を作る。晩黒崎来談。食後共に出て田鍋を訪ひ、九時帰る。成田鍊之助来訪、十二時半帰る。

十月二十一日 晴天。下午新北門外に至り、綿襖一件を購ふて帰る。大川、隈元両氏来談。黒崎君亦来る。中野氏来り、別を告ぐ。一旦帰国の後新嘉坡に赴き医業を営むと云ふ。夜田鍋氏に至り、中野光三氏の離盃に列す。酒間詩を賦して其行を送る。

十月二十二日 晴天。早朝出て佐久間浩、中野光三、黒崎恒二郎三氏の帰国を送り、日本知人に寄するの書を黒崎氏に托し、長崎より発せしむ。午前阿川太郎、成田鍊之助、大川愛次郎来談。十一時成田と大川、角田等の寓に至り饗を受く。四時辞帰。田鍋氏に至り小談、帰る。白岩龍平来談。

十月二十三日 晴天。下午英界に至り雑品を購ふ。帰途田鍋に至り小談、帰る。夜甲斐、大川、隈元、中原来談、十時半帰る。

十月二十四日 晴。午前江南製造局徐幼樵の詩に和するの絶句四章を作る。下午田鍋氏に至り小談、帰る。夜猪田、高原哲太郎両氏来談。九時田鍋、井深来談。田氏留談、一時半に至て帰

る。是日島崎好忠，秋山儀太郎，緒方二三三君の信到る。

十一月六日 晴天。阿川太郎来談。下午出て日華洋行に至り臉盆を購ひ，帰途樂善堂に山内を訪ひ帰る。夜高橋正二，大川愛次郎等前後来談。

十一月七日 晴。午前金子新太郎来談。是日終日清国大勢論を作る。夜中原，鐘崎，河本，猪田，川北，武藤，群馬諸氏来談。高橋謙東京よりの書を山内を転送し来る。予と合同して事業を計画せん事を言ふ。

十一月八日 晴天。終日大勢論を草す。午前武藤，齊藤，大川来談。下午金子新太郎，其同志荒井甲子之助を伴ひ来る。昨日来滬せる者なり。伊東良造来訪。哺鹿兒島俱樂部に至り，汁子の饗を受く。夜猪田，内田等来談。前田彪，弟亀雄の信来着。

十一月九日 天。東京島崎好忠氏に清国大勢論の自著を郵送す。外に齊藤員安に発信，亀雄の身上を托す。是日漢口に赴かん事を期す。船便の可ならざる有るを以て止む。午前河野久太郎，西田某来る。其杭州に遊ぶを聞き戴愷君に紹介す。河本，香月，甲田，玉置諸氏来る。夜鐘崎，藤城，白岩，三沢，沢本，三谷，甲斐，富永，井深，草場，中原，武藤，沈文藻諸氏来り訪ふ。是晚東京島居赫雄氏の信到る。

十一月十日 陰天。風甚大，冷氣大に加ふ。午前草場氏に至り談ず。晌午富山別府真吉氏の信到る。下午堺与三吉，永田熊麿来り訪ふ。晩草場氏の招饗に赴く。白岩，武藤，土井，岡田晋，水谷三郎，江口，大木，大川，隈元，向野，郡島，角田，三沢，大木，高橋，河北，甲斐，猪田，田中，富永，田鍋諸氏来り送る。九時半田鍋氏を辞し，太古洋行の安慶輪船に投ず。船客無慮三四百艙房に充滿し殆ど立足の地なし。漸くして一床を得，之に居る。河本磯平同行たり。十一時半諸友散帰す。

十一月十一日 健晴。午前一時開船，九時半過通州。来客四五十名あり。左岸山あり，狼山と云ふ。宝塔一坐あり。下午一時江陰を過ぐ。此辺江幅一千二百米突。日暮圖山を望む。九時半船鎮江に達す。雑踏織るが如し。十一時開船。平

常に比して二時間余の早着なり。秋風如水，星斗爛然。京口の諸山を隱約の中に望む。左岸燈火隱見，之を瓜州と為す。前人の詩に，潮落夜江斜月裡兩三星火是瓜州。午前一時就寢。

十一月十二日 健晴。六点半起床。已に金陵を過ぐ。江の左右皆低山，輕煙縷々籬落を籠め，宛然画中之景矣。十時半東西梁山の間を過ぐ。西梁山の下，新たに砲台を築き，兵營を置く。此辺江幅甚だ狭し。此間一帶兩岸平行，時に低山を望むのみ。沿江の地芦苇叢生す。東西の梁山最も奇絶。十二時蕪湖に達す。保甲局の巡勇十余人あり。交も来りて船貨を査す。美生事件の後如此なりと云ふ。十二時半開船。兩岸平広，小山点に見るに足る者なし。三時二十分左方フリン山を望む。頗る高し。山谷亦甚だ佳，水浜有市集，「チュウシエン」と云ふ。四時パンツ磯を過ぐ。江中に在り，磯上廢塔あり，二層を存す。廟あり，風致甚佳。此を過ぎて少許左岸に人家数百あり，「テーカン」と曰ふ。山を負ひ，江に枕に紅葉粧点，山延水緩，風趣如画。此辺より始て紅葉を見る，豈秋来之早乎。下午七時四十分安慶を過ぐ。雑踏の為に睡夢を破る。

十一月十三日 晴。六時起床。四顧風景甚佳。七時過九江府属の馬当磯を過ぐ。左岸に在り，江に臨て削るが如し。山形奇截，青苔綴缺，風趣妙絶，山腹臨水，有寺，紅葉埋之欲画不得，真天下之絶観也。若非江山之任在我，願老残年於此地也。此处江流逼迫為風涛至險之处。七時四十分過小姑山，独立江中与澎浪磯相对，奇観不可状。八時過ホーカイ県（彭沢県乎）。在左岸山間城壁蜿蜒亘山，人煙六七百，大抵沿江之景在左岸不在右岸。江北即平行而芦菽生之見山甚稀。江南則愈進風趣愈佳。十時十分過鄱陽湖。湖口県在左方。挾山俯瞰江湖形勝甚雄偉。城壁委它亘山頂。南方遠望鄱陽湖，万頃渺々茫無際涯，大姑山兀立，湖口山上有塔一座，与湖口県相对之处有砲台一坐（船人呼大姑山曰鞋山）。左岸瀕湖之山頗似須磨明石近傍之山容。十二時点鐘望九江廬山，峯鋒秀拔，晴空真面可見。一時開船，徒出九江，左右地勢微隆，平凡無足観者，閑坐讀放翁之入蜀紀終之，至武

穴近傍北岸漸得山。五時過田家鎮，人煙一百在北岸。鎮前則半辺山臨江流，半面為削題。田鉄鎮沈江又曰長江鎮鑰，山脚有砲台二坐，砲数合十七門，对岸（即北岸）有砲台一坐，砲数九門。此三砲台共向下游失勢力砲門多□死角，自此而上風色愈妙絶。山客非凡奇古可愛，稚松青苔綴間隙。山麓亦墟落班点紅葉擁護之。上甲板縦眺望日落眉月上暮山之景愈可愛。四天無雲，秋高气清，纖月□懸山端，偶得微風澹月入薰州之句。九時達黄石港。夜暗不能見形勢。

十一月十四日 晴。午前六時船達漢口。上陸至河街吉利洋行。午前与松田氏散歩市上。帰途上月華樓啜茶。樓臨長江武漢之形勢在指顧之間。午時帰吉利洋行。山崎羔三郎来談。晚洗浴。食後移寓春元客棧。山崎，松田，前田諸氏来客，室陋隘才容膝。七時就寢。

十一月十五日 晴。午後至吉利洋行。与河本子訪新街樂善堂。晚食後与山崎，井上二氏出。予は松田氏等と出で，山口栄三の上海に帰るを送り，田鍋，武藤二氏に寄するの信を托す。此船にて湖北提督呉姓上海に赴き，転じて北上引見すと云ふ。帰途松田氏に談じ，十一時帰る。是日樂善堂にて官星塔に会す。

十一月十六日 晴。下午官氏来訪す。棧内に在りて小詩数首を作る。晚食後吉利洋行に至り，十時帰る。

十一月十七日 晴。午前十一時松田氏と江を渡り武昌織布局に至り，吉島某に面し，下午文昌門を入り，曾文正公の祠に展す。蛇山の南服に在り。創立日尚浅しと雖も早く已に荒涼に属し，頽垣宿草，無足見者。羅，李両氏を合祀す。帰途黄鶴樓に上り賞玩。時を移し，江を渡りて帰る。途上投一旗亭小飲。吉利洋行に至り，九時帰る。黄鶴樓に湧月亭あり。又た王羲之の鵞字あり。高さ六尺余，筆力勁快欲飛動，其他名人の題咏頗る多し。

十一月十八日 晴。午前到新街樂善堂。晚食後山崎氏と禹王廟馬頭より漢水を渡り，漢陽の大別山に上り，武漢の形勢を望む。製鉄場を目下に見る。山を縫して西角より下り，月湖の辺に出で，白牙の琴台を見，漢水を渡り，五聖廟より上陸樂善堂に至り，七時山崎，井上と吉利に至

り，九時半帰る。

十一月十九日 晴。終日在棧内。星塔の至るを待つ，終来らず。晚吉利に至り談ず。

十一月二十日 晴。午前官及び周姓来る。共に出で龍王廟剪子街に至り新裕客棧を見る。帰途吉利に至り，山内，田鍋，井深，三沢，日華洋行の浜田諸氏及び金子に寄するの書を作り，松田氏の上海行に托す。八時松田氏を船に送り，九時半山崎氏に帰る。

十一月二十一日 晴。午前剪子街に移寓す。下午出で樂善堂に至り，晡時山崎と出で予の寓にて晚餐し，洋街を散歩して帰る。十時官，周心如，陳旺臣等来談。是夜山崎と武秀才王竹封に面す。

十一月二十二日 陰天。午食後剃頭，吉利洋行に至る。洗浴，晚餐す。山崎，井上，河本，康岐山等亦来談話，九時に至て帰る。

十一月二十三日 晴。寒氣頓に長ず。午前官星塔及び歐陽箴甫来談，三時に至て帰る。箴甫吉州廬陵の人，歐陽修の末裔なりと云ふ。晚食後樂善堂に至り，山崎，井上等と飲み，九時帰る。月色玲瓏，武昌，漢陽を隱約の中に望む。江上の風色殊に佳なり。

十一月二十四日 晴天。下午租界に一遊し，去て大智門外に至り眺望，三時帰る。晚食後吉利に至り談ず。夜官星塔来談。

十一月二十五日 晴天。晌午官星塔，黄頌声来訪。共に出で魯秋舫，冷焱春を訪ひ，去て樂善堂に至り談じ，井上と競馬場に散歩し，帰途洞庭春に上り洋食を吃し寛談，井上と予の寓に帰る。周心如来訪。

十一月二十六日 晴天。終日在家。官氏を待つ，来らず。夜吉利に至る。井上，山崎亦来る。十時樂善堂に至り，山崎，井上，河本等と談じ，午前三時就寢。

十一月二十七日 晴。東京島崎好忠氏に発信す。午食後樂善堂より帰る。官氏長江水師の調書を携へ来る。即ち之を謄写して半終る。

十一月二十八日 晴天。午食後隣室の漢陽人李士華なる者来り訪ふ。一時出で洋街に散歩し，帰途山崎を熊家巷に訪ふ。明日より写真業を開くと云ふ。吉利洋行に至り小談，帰る。天津石川

伍一の信、田鍋氏より転送し来る。

十一月二十九日 晴。午前十一時武昌に至り望山門外に至り、江辺碇泊の軍艦楚材、測海の二号を見、望山門を入りて総督衙門を一覧し、文昌門を出で織布局に至り、吉島と談じ、帰途城内に入り武昌府署を見、東門内に至りて貢院を見る。惟楚有材明經取士等の語句を題す。文廟の傍に在り規模甚大、万余人を容るべし。暮時江を渡り龍王廟より上陸、帰棧。晩食後樂善堂に至り河本と談じ、十時帰る。隣室の李士華来談。予所説の大道を聴き、敬服して帰る。

十一月三十日 晴天。午食後山崎を熊家巷の照相舗に訪ふ、小談。井上と出て副将周楚人を訪ふ。齡六十七醇良の君子なり。談話移時、其子及び周坤山と河街の萬年春茶楼に上り吃茶。五時山崎氏の照相舗に至り、開張の祝宴に列す。会する者二十人。八時帰る。帰途吉利に至り、上海白岩龍平、井深仲郷二氏の信を取りて帰る。

十二月初一日 晴天。終日在寓。晩出て山崎氏を訪ひ、九時吉利洋行に至る。松田氏今夕上海より帰る。大澤龍二郎、大熊鵬、高原鉄太郎、三澤信一、篠原由雄諸氏の信書を齎らし来る。談話十時半に至て帰る。官氏来談、十二時帰る。

十二月初二日 晴天。午前樂善堂に至る。支那宣教師楊子荃に面す。晩食後辞して吉利洋行に至り松田氏を訪ひ、康等と談じ、十時帰る。

十二月初三日 晴天。十二時井上と江を渡り、武昌武勝門を入り、米国人の設立する聖公会堂に至り、楊子荃外五名の清人及び米国人員^{（イ）}姓に面す。清語を善す。談話時を移す。清に在る八年と云ふ。楊姓の案内にて禮拜堂、文華書院、医室、浴室、食堂、自習室、寢室、病室、体操場、教堂等を周覽して残す所なし。三時江を渡り河街月華楼に上り、茶を啜り、予は井上と分れ吉利に至る。松田氏鶏を割き酒を出す。官星塔亦来る。官等と道理を談じ歎笑。十時に至て帰る。成田鍊之助鹿兒島よりの信到る。十一時李士華来談。

十二月四日 晴。十二時松田、周心如、官星塔、外二清人と漢水を渡りて漢陽に至り、案内を請ふて鉄政局を周覽す。規模宏大人をして一驚を

吃せしむ。帰途周、官、松田三氏と樂善堂に至り、麵を吃し、藥材商成宝亭を一訪して、予は松田、井上と帰る。六時出て吉利に至り小談。松田と出て山崎を相照館に訪ひ小談、帰る。武漢見聞紀事を作り、一時寝に就く。

十二月五日 晴天。下午樂善堂に至り井上を訪ひ、三時帰る。夜黃頌声来談。七時出て山崎を訪ひ、酒談。十時に至て帰る。

十二月六日 晴天。十一時漢水を渡りて漢陽に至り、晴川閣に上る。閣門膽雲の二字を題し、内門に古晴川閣と題す。東武昌の形勢を襟下に望み、孤帆遠影大江悠々、真に天下の絶観なり。名人の題咏頗る多し。去て大別山に上り、武漢の形勢を熟察し、漢陽の東門朝宗門を入り、西門鳳山門を出で、右転して月湖の畔に出で、琴台に遊ぶ。大門題して古琴台と云ふ。光緒十六年本地官紳の重修に係はると雖、壞頽殊に甚し。清人利を貪る食色より甚し。数十万の資を投ぜし建築も数年を出でずして敗頽に属する者多し。建築の資を以て私囊を肥すが為なり。園内荒涼に属すと雖も雅澹尚ほ愛すべし。高山流水（この後数字分不明）、当年の高風を欽仰す。四面月湖に瀕し、一道の堤道大別山の西麓に通ず。湖中彌望皆荷、花時の風光可思也。賞玩移時、去て鉄政局を踏査して帰る、時に四時。晩餐後出て吉利に至り、松田と共に山崎を訪ひ、九時帰る。周副将に面す。是日武昌の楊子荃詩信を寄せ来る。予の韻に和する者なり。上海金子新太郎、荒井甲子之助の信到る。

十二月七日 晴天。午前剃頭。下午樂善堂に至り、武漢地図及び李太白の書二枚を受取り、晩餐後去て吉利に至り小談、帰る。七時又た吉利に至り洗澡す。九時山崎と樂善堂に至り、井上を誘ひ夾街醉春楼に至り飲み、十一時帰り、樂善堂に宿す。是日武昌楊子荃に復信し、小詩一首を賦し留別と為す。是夜棧房老板に先付洋銀三塊錢（兌錢三吊二百十文）。

十二月八日 晴。朝食後山崎と樂善堂を辞し、去て城外に至る。二里許の間一望人家なし。夏季は此間湖水となる、後湖是也。秋に入りて水減じて後ち耕して麦を種ゆ。毎年即ち然り。下後官星塔、周心如と市街を散歩し、樂善堂に至り

小談。帰途官氏と正街李瑞昌雜貨舗に至り一覽す。夜吉利洋行に至り、十時帰る。

十二月九日 晴。八時半松田氏と漢陽に至り、鉄政局を踏査し、大別山に上り鉄政局の図を作り、三時に至り終る。漢水を下り禹王廟より上陸。品芳茶樓に上り茶点を肴ひ帰る。武藤岩彦来訪、本日到着せりと云ふ。晩食後武藤と出て吉利に至り、去て山崎を訪ひ、七時又た吉利に帰り、九時帰る。是日家大人の書及び山田珠一、東肥合資会社員一同よりの書、田鍋、島崎好忠、片山敏彦、前田彪、妹佐久、田鍋柳太郎、牧、柳原又熊、齊藤員安等の信到る。十時官氏漢陽の胡海東を携へ来る。

十二月十日 晴天。中食後出て樂善堂に至り、井上を訪ひ辞別す。武藤亦来る。三時帰る。官氏来訪。吉利に至り、七時半帰る。

十二月十一日 晴天。是日將に上海に帰らんとす。午食後行李を拾収す。下午出裕新客棧留一吊二百、為酒資。周心如來送。至吉利洋行。吉島亦到。至福海訪山崎氏、不在。請鉄政局写真而帰。少焉山崎、康、武藤等来、割雁而飲。六時投萃利輪船、井上、松田、吉島、前田、山崎、服部、康、武藤諸氏来送。賃船員之室而居至上海四元半也。七時開船。

十二月十二日 晴天。寒。八時達九江、購茶壺二個。廬山半峯在雲間不可見。船員葉文彪、鮑楚生、楊、戴等交來談、款待無不至、十二時過繁峙縣。縣在右岸、三面繞山一面望江、城壁碗蜒山頂。城在四山之底部人煙寥寥。下流少許即小姑山兀立、江心南面生稚竹弱樹、從遠望恰為羽毛、北面巉巖奇崛水鳥、多棲之、其糞如雪、蔽山之北面不生竹樹、澎郎磯与之相对、此处江幅四五丁耳。下午一時過馬当磯、江之右岸磯雖不少余推馬当為第一。東西梁山、螃蟹、澎郎次之、而大小二姑山之勝在□外也。五時以船員之招往晩食、六時至安慶府、在左岸有白色七層之塔。城負山臨水、形勝控扼一方居照雄鎮、城外沿江一帶人家櫛比城郭為乱角形高臨江流。予往來長江于茲六回、日中過安慶。是為初時恰黄昏寒空為水眉月上矣。

十二月十三日 晴。黎明船達蕪湖。八時開船推窓、蔽霜如雪、自入冬見霜以今朝為初。九時半

過東西梁山間、東梁之北面有兵營砲台、備砲五門。下午一時達金陵。山河襟帶為自然之形勝。砲台三四座面江而在小砲船十八隻泊此。四時半十二圩有小河口、船舶多泊此。小河之上流見宝塔必有一城市也。六時達鎮江、時金山上已上燈矣。象山、北固、焦、宝蓋、銀台等之諸山、暮景殊佳。錨泊二時間即到八時船開矣。十一時就寢。十二時過江陰。

十二月十四日 晴。未明船達通州、體子不來為舫欄體一時半許。七時開船、十一時半達吳淞口以潮少錨泊、十二時十五分徐々展輪、一時五十分達上海、直上岸投乍浦路田鍋氏少憩、出訪草場氏及金子、荒井、隈元等之寓。夜牧相愛、大隈、藤城等來談。

十二月十五日 晴。午前上車至樂善堂。漢口井上より依托の書信及び物件を交付し、同處にて中食し、去て磯長を訪ひ山崎の信を付し、出て日華洋行井深、濱田等を訪ひ、大馬路佐藤伝吉を訪ひ井上の銀信一封を届け、上車領事館に至り、服部より托せし日本行の信を付郵し、速水、加藤兩氏及び副領事を訪ひ小談。帰途中桐洋行に至り立談、半刻即帰る。白岩龍平、甲斐靖、牧等來談。夜草場氏に至り洗澡す。七時帰る。大尉津川氏及び猪田來談。

十二月十六日 晴。午前阿川太郎、金子、荒井諸氏來談。下午鐘崎氏來訪。夜上車湧泉路に至り濱田、井深等を訪ひ酒談、十一時に至て帰る。

十二月十七日晴。午前草場氏を訪ひ談ず。下午猪田、江口、柳原、高柳等前後來談。夜隈元を訪ひ小談、帰る。頭痛甚しく九時就寢。

十二月十八日 晴。午前剃頭。出て工学士桑原政を東和洋行に訪ひ立談。片刻即ち帰る。途津川大尉を訪ひ小談、帰寓。井深仲郷來る。夜青木熊五郎、工藤省三郎、大川、鐘崎等來談。

十二月十九日 微雨。午前阿川來談。下午出て阿川を訪ひ小談、帰る。東京島崎好忠、大島在留。原田嘉久次の信到る。晩牧來る。出て東和に至り工学士桑原政を訪ふ。詳に製鉄場の景況を聞くを得たり。上車帰寓。

十二月二十日 晴天。是日漢口松田満雄、山崎羔三郎、井上、吉島等に発信す。午前金子等を訪。下午津川氏を叩き談話。移時而帰。六時津

川、田鍋と出て楊樹浦に至り、沈少坪の招飲に列す。飲啖九時に至て帰る。

十二月二十一日 陰天。午前金子等を訪ひ談ず。下午金子来り、予を帮て漢陽製鉄場の写を作り、暮時之を終ふ。夜白岩、高見等来談。渡邊正樹亦来。

十二月二十二日 晴。製鉄場の報告を作る。夜高橋正二、郡島、牧、井深、富永、大川等来談。井深留談。十一時に至り帰る。此夜報告書を作りて夜を徹し一睡せず。

十二月二十三日 晴。八時郵便局に至り、島崎好忠氏に製鉄場報告と写真を郵送し、外に東京斉藤、鳥居、河野、古城等へ連名の信及び熊本合資会社一同、大島、原田嘉久次等へ復信す。午前津川大尉を訪ひ小談。帰途金子等の寓に至り中食し、午睡。四時間の久を越て帰る。夜鐘崎、藤城等を訪ひ、十時帰る。

十二月二十四日 晴。夜田鍋と郊外に散歩す。月色高潔。

十二月二十五日 晴。午前山内崑来る。共に出て虹口に至り汁子を食ひ、去て領事館に速水を訪ふ、在らず。山内と別れ帰る。夜田鍋と津川を訪ひ、十一時帰る。

十二月二十六日 晴。是日前田彪及び東京亀雄の信到る。牧、大熊等来談。

十二月二十七日 陰。午前草場氏を訪ひ談話、中餐、洗浴して帰る。金子等の寓居に至り暮時帰る。夜出て山内崑を訪ひ、十時帰る。

十二月二十八日 雪。向野生一來り、別を告ぐ。

十二月二十九日 晴。下午出て向野の帰国を送る。是日源口、松田、井上に寄するの信を作り、伊東良造の上漢に托す。夜出て鐘崎生を訪ひ、十時帰る。

十二月三十日 晴。下午阿川太郎の寓に至り飲み、八時帰る。磯長、牧来談。

十二月三十一日 晴天。夜金子新太郎の離盃に赴き痛飲、九時に至て帰る。是日除夕田鍋と飲み、二時就寝。

2. 明治27年1月～6月の日記

前年12月14日から上海に滞在しており、2月

16日に漢口に向けて出発するまでは、それ以前と同様軍人を含むおびただしい数の日本人と連日会っており、また日清貿易研究所の生徒だった複数の青年と繰り返し会っている。生徒だった者の中には、日本に戻ってまた上海に来た者もいるしずっと上海に滞在している者もいるようである。前年海軍省の囑託になったことと関連する動きを追うと、1月5日に島崎から「一月より四月迄の酒資百元」が送られてきて、同20日に「韶州の兵乱・台湾の兵備に関する報告」、26日に「韶州の兵乱第二の報告」2月10日に「魯清密約の報告」を島崎宛に送っている。これらの報告には通し番号をふっていて、2月10日のそれを第六報告としている。

2月19日に漢口に着き、24日の日記には山口外三が1月初めに郷里会津でなくなったとの知らせを受け取ったことを記している。山口は明治21～22年宗方が北京に滞在した時は連日のごとくに会っており、漢口楽善堂では行動を共にしていないけれども、同志としての付き合いのあった人物だった。漢口でも海軍省宛の報告が続き、2月25日に「韶州第七報告」、3月14日に「第八号軍艦製造の件」、5月1日に「湖北兵備及び輔仁社云々湖南遊の事等第九」を送り、4月25日に海軍省安原金次から「五月より十月迄六ヶ月の手当百五十弗」が上海田鍋経由で送られてきた。他に「岷江四日記」を執筆し、これは3月31日に九州日々新聞の知人に送っているのも同新聞に掲載されたのであろう（未確認）。内容は、前年11月10日に上海を発って長江を船で漢口に着くまでの4日間の見聞を綴ったものである。この時の漢口ではずっと楽善堂に泊まり、松田満雄、緒方二三などの古い仲間を含む多くの日本人や中国人と往来している様子は上海と同様であり、数年来漢口に入出入りする日本人の数が増えていることを日記からも実感できる。そして3月9日は楽善堂の大開帳の日とあって、「同主人内外の知人を招き飲む」とあり、翌日も「賀客門に満ちて商売が活気を呈していることをうかがわせる記述になっている。

ところで、「朝鮮の亡命人金玉均」が3月28日に上海で暗殺されたことを知って、「李鴻章、袁

世凱等の計らひにて謀殺せし者ならん。其手段甚だ悪むべし」と記し(4月2日)、さらに「東京に在る朴泳孝も刺客に逢て遁れ、李圭冠は既に殺されりと云ふ。予終夜眠らず万感交集」と記して(4月8日)、緊迫の度を深める朝鮮情勢に並々ならぬ関心を抱いていることを知るが、その後事態の急変で自らが日中軍事衝突の前線での情報収集に出向く事になるとはこの時点では予想しておらず、「湖南地方漫遊の護照願を封入し」て上海の田鍋にその手続きを依頼している(4月25日)。しかし、6月に入って「朝鮮東学党の変状」を知りそれに対する清朝の兵隊派遣を知ってまもなく、26日に海軍島崎からの電報が届き、至急芝罘に向へとの指令を受ける事になる。同じ26日に受け取った上海の白岩からの手紙には漢報の管理を宗方に譲っていいとの中国人からの希望があると書かれていたが、その話は先送りにするしかない事態であった。

明治二十七年正月起

日誌 北平逸人亮

上海、漢口

正月元日 快晴。早起盥漱衣冠を改め東天の一涯を遥拝す。午前新旧知交も来て正を賀す。下午頗る酩酊。褥を破て臥す。四時半熊本屋に至り同県諸子と快飲し、八時帰る。

一月二日 晴。朝草場氏に至り雑煮を食ひ小談。去て角田等の寓に至り閑談。移時而帰る。午前東京島崎氏の信到る。一月より四月迄の酒資百を送り来る。是日郵便局停公に付き書留信を領収する能はず。領事館浦田氏に至り小談帰る。夜金子等の寓に至り寛談、十時帰る。

一月三日 陰天。午前出て新聞郊外に至り、金子新太郎の遠遊を餞す。予は荒井、隈元二氏と小車に乗じ金氏を南翔鎮に送る。五時到着。盛春客棧に投宿。隈元と出て晩食し、後金子、荒井、隈元と孟家湾に至り医師汪宗淦を訪ふ。本鎮の豪族にして頗る徳望あり。寛談九時に至り辞帰す。途中王(穀生)に邂逅、再び汪家に帰り閑談、移時而帰る。

一月四日 陰。朝三氏と茶館に至り小賀す。汪、王両氏訪ひ来り、相携て麵坊に至り麵を吃し、

去て汪氏に至り小談、辞帰。十一時金子を南翔の北郊黄漚河畔に送る。同氏は江蘇、安徽、江西、両湖、両広、福建に漫遊する者也。漢口松田、山崎、井上三氏に寄するの書を送り金子に附す。十二時南翔を發し、下午二時鎮市に達し中食し、小車に乗じて帰る。是夜熊雄と戯る。

一月五日 微雨。別府真吉、西村忠一氏の信到る。午前楽善堂に至り東京島崎氏の送銀百を送る。夜牧、齊藤来談。別府真吉、西村忠一、島崎好忠三氏に復するの信を作る。

一月六日 晴。朝領事館に至り發信す。朝食後出て岡田晋太郎、馮孔懷の帰京を送る。十時開船。三池、青木、阿川、鐘崎来談。角田等の処に至り洗濯す。

一月七日 晴。午前汪緝甫と出て飯舗に至り小酌し、共に天仙茶園に至り戯を聴き、暮帰る。草場氏の招きを以て到る。牟田熊五郎、白岩、吉原等来る。近日發行すべき上海週報の事に付き照量する所あり。十時帰る。

一月八日 陰。寒氣甚し。午前石頭街に至り衣裳を購ふ。沈文藻、高見武夫来談。下午牧氏来訪。高見生普陀山に赴くを以て寧波藤森に添書す。

一月九日 晴。午前沈氏と裏虹口文昌閣に至り一屋に賃せんと欲す。主人家に在らず。再訪を約して帰る。夜田鍋と山内を訪ひ寛談、十二時に至て帰る。家大人及び福州岡田兼信到る。

一月十日 晴。午前東京齊藤、鳥居に發信、並に金四円の匯票を齊藤に托し弟亀雄に送る。東京鳥居赫雄の信到る。夜杭州戴愷君に寄するの書を作り、外に銅板四書合講、詩韻合璧各一部を添へ、荒井、隈元、甲斐等の杭州に遊ぶに托す。高橋正二、田中某来る。田中は明後日帰朝すと云ふ。熊子を得たり。

一月十一日 晴。

一月十二日 晴。午前家大人に金貳拾八円を郵送す。外に牧相之、鎮西館浅山知定、中澤静一郎、右田喜七郎、九州日々新聞、電光新聞、並に九州学院一同に新年の賀状を送る。井深、阿川前後来談。夜福岡県人來談。

一月十三日 陰。午前陸軍大尉宇都宮、松石両氏

- の招きを以て田鍋と東和洋行に至り飲む。右両氏は印度に駐在する者なり。津川大尉及び御幡、吉原、山内亦来会。十一時両氏出発す。十二時帰る。下午草場氏に至り上海週報の祝文を送り、去て角田等の寓に至り入浴す。夜熊子を得、沈文藻来談。
- 一月十四日 陰。午前鐘崎三郎等を訪ひ、同処にて中餐し帰る。夜井深を訪ひ、十時帰る。一月十五日陰。終日在家、日清露関係を読む。夜田鍋と出て津川を訪ふ。病を得て就褥、面せずして帰る。
- 一月十六日 陰天。下午出て天后宮に遊び帰る。津田静一氏欧州帰朝の途次来訪せりと云ふ。故に直に氏を東和洋行に訪ひ暢談。共に晚餐し、七時氏を送りて仏国郵船に至り談話。八時半に至て帰る。是日小濱為五郎、東肥合資会社、及び弟亀雄の信到る。
- 一月十七日 陰天。熊本浅山知定氏の紹介状到る。森勝磨持参す。下午牧氏と城内に至り金剛経を購ひ、帰途樂善堂に山内を訪ひ小飲。暮時帰る。
- 一月十八日 陰。午前沈文藻来訪。阿川、及び前後森勝磨来談。夜沢本、牧、齊藤、福原等来談。
- 一月十九日 半晴。漢口松田、山崎、井上に寄するの信を作り福原林平に托す。是日九州日々新聞社へ通信を認め、山田珠一に一封を送る。下午島崎好忠氏信来着。隠岐嘉雄来る。十時井深大酔して来る。
- 一月二十日 晴。七時郵便局に至り島崎好忠に韶州の変乱、台湾の兵備を報告し、上海週報一葉を送る。山田珠一に発信す。午前阿川太郎来る。共に出て城内に至り関廟、孔廟、城隍廟に遊び帰る。阿川の処に至り中餐し談話。移時而帰る。中野熊五郎来る。田邊と三人東和に至り中野の処にて晚餐し、八時帰る。
- 一月二十一日 陰。剃頭。十一時沈文藻を誘て四馬路飯店に至り中食し、天仙茶園に至り戯を聴く。汪緝甫亦在焉。戯終るの後両人を誘ひ酒館に至り晚饌して帰る。井深を訪ふ、在らず。
- 一月二十二日 半晴。午前津川氏の病を訪ひ、小談帰る。沈文藻来る。下午出羽少将に面す。猪田正吉来談。磯長亦来る。
- 一月二十三日 雨天。午前阿川太郎来談。下午郵船来着。小山平次郎、岩崎博隆二人熊本より来る。松倉、平野六郎、右田、深水、緒方等の信到る。
- 一月二十四日 雨天。夜山内崑来る。飲談、十時に至て帰る。大川、齊藤等来訪。
- 一月二十五日 陰天。山田、白岩、吉原、池畑等来訪。夜大川、齊藤の離盃に赴く。
- 一月二十六日 陰天。芝罘白須直、朝鮮新納少佐、葉室湛純、山崎亀造等に寄するの信を作り、齊藤生の該地に赴くに托す。是日東京島崎好忠氏に発信。韶州の変乱第二の報告を為す(五号)。此地東肥合資会社員一同、元島正礼への吊状、佐野直喜への添書を發す。別に藤条九本と信一封を大川に托し、長崎佐野に送り、津田静一氏に転交せしむ。白須直の年賀状来着。夜大川、齊藤二生の離盃に赴く。雪。
- 一月二十七日 雪。午前郵便局に至り東肥合資会社並に島崎氏の信を發す。下午出て大川子の帰国を送る。夜齊藤生芝罘に赴く。其寓に至り之を送る。是日家大人の信来着。
- 一月二十八日 陰。下午出て鐘崎等を訪ひ、三時帰る。阿川等来談。夜角田等の寓に至り談ず。
- 一月二十九日 晴天。夜田鍋と井深を訪ひ、十二時帰る。
- 一月三十日 晴。山田珠一の信到る。午時角田等の処に至り中餐の饗を受く。今便にて楠内、岩本等来る。藤崎秀、尾上正連、成田鍊之助の信到る。夜阿川を訪ひ寛談、十時帰る。
- 一月三十一日 晴天。下午津川を訪ひ小談、帰る。夜樂善堂に山内を訪ふ、在らず。草場氏に至り小談、帰る。
- 二月初一日 晴。午後速水来る。晚餐後共に出て井深を訪ひ、十一時帰る。
- 二月初二日 晴。午前川村、牧二氏、杭州人洪繩伯を伴ひ来る。沈文藻亦来る。飲談下午に至りて帰る。杭州戴愷君の信到る。樂善堂に山内を訪ひ、暮時帰る。夜草場氏に至り洗澡す。
- 二月三日 晴。朝出て土井伊八を送り、大津猪飼麻次郎に与ふるの信を托す。牧氏と宝美街新悦来客棧に至り、洪繩伯を訪ひ小談、辞帰。牧氏

の寓に至り小談。帰途日華洋行に濱田等を訪ひ、午時帰る。夜荒井、鐘崎来談。

二月四日 陰天。日曜日。下後剃頭。楽善堂に至り山内を訪ひ帰る。夜郡島、白岩、阿川、青木来談。白須直芝罘よりの信到る。

二月五日 半晴。午前牧子の囑により共に城外に至り、衣服を購ふ。帰途長楽里に至り小談、帰る。下午角田楽の寓に至り小談。去て武藤岩彦を訪ふ、在らず、帰る。晡時中野熊五郎、鐘崎、井深、武藤来談。夜出て津川を訪ひ、十一時帰る。是日陰曆除夕たり。二月六日晴。陰曆正月元日。朝草場氏来談。午前阿川と出て井深を訪ひ小談、帰る。是日熊本合資会社員及び片山敏彦の信到る。夜田鍋と副領事山座円次郎を訪ひ、十一時帰る。

二月七日 雨天。下午阿川太郎を訪ひ、暮刻帰る。夜鐘崎、隈元、小山平等来談。

二月八日 晴。午前牟田熊五郎、鐘崎等来り、会食す。下午牟田、鐘崎、隈元と出で熊本屋に至り汁子を食ひ帰る。夜青木、内田、大熊、荒井、藤城等来談。

二月九日 陰天。下午東京なる弟亀雄に金五円を郵送す。熊本佐々友房、津田静一、小沢徳平、樗木政章、岡本、池邊、片山、島田列、山田珠一、其他佐野直喜、鹿児島小濱、藤崎、成田諸氏に寄するの信を作る。別に東肥合資会社一同及び家大人に寄するの書十二本を隈元氏の帰国に托す。津田氏には金二円を送還し、山田珠一には有斐学舎寄附金及び高原雜誌六号以下の前金六十銭を送る。外に北京中島雄、天津中西、石川への添書を作り牧相愛氏に附す。六時隈元武次氏の離盃に列す。七時鐘崎、田鍋と四馬路杏花楼に至り日華洋行長濱田氏の招饗に応ず。快飲快談十時に至て散ず。井深と三馬路に至り二分の明（この後数字分不明）十一時雨を衝て日華住宅に至り宿す。

二月十日 雨天。東京島崎好忠氏への報告を作り発信す（魯清密約第六号）。下午速水を訪ひ小談。去て磯長に至り談、片刻にして帰る。夜猪田、藤城等来談。

二月十一日 陰。紀元節。角田、楠内等の処に午食す。下午阿川太郎来談。夜山内崑を訪、十時

帰る。

二月十二日 晴。草場氏と角田等の寓に至る。中食して帰る。後ち津川を訪ひ小談、帰る。夜山内崑、楠内、岩元、小山平、荒井、高橋等来談。

二月十三日 陰。朝草場氏と楠内等を訪ふ。十一時田鍋と出て四馬路杏花楼に至り、津川大尉の招饗に応ず。予の漢遊を餞するなり。来会する者は山内、御幡、鐘崎、田鍋、井深、青木、郡島、安達操一、沈文藻、中野熊五郎等なり。飲談三時に至て散じ、去て安達操一の奇術を見る。五時帰る。予は角田、楠内外諸氏の招きを以て行て晚餐し、八時帰る。白岩龍平来談。是日芝罘白須直の信到る。

二月十四日 晴天。朝領事館に至り速水一孔、加藤義三、山座円次郎三氏に告別し、郵便局に至り、家大人に金拾円、別府真吉氏に一封を送る。外に白須氏より托されし暹羅熊谷直亮への信を投函す。是日成田鍊、合資会社、弟亀雄、森勝磨、小澤大尉及び光彦並に家大人の信到り、伯父義澄君病死の事を報ず、嗟々。此の兩三年間凶報並至、天涯の孤客涕泣如雨。阿川、牧諸氏来談。夜阿川を訪ふ。八時井深、正木、御幡等を訪ふ、在らず。領事館加藤義三氏より、麻の見本を購ひ呉れよとて金三円を送り来る。

二月十五日 陰。午前萃利輪船に至り船員に面し席を定て帰る。阿川氏に至り飲む。二時帰る。那部武次、牧等来談。夜郡島、鐘崎、楠内、小山、岩元、荒井、高橋、阿川、川野、小池、草場、田鍋、三沢、内田、津川、秦、吉原、堺、吉武、倉富、青木、角田、甲斐、前田、三谷、川村、大木等二十七人来りて行を送る。九時半萃利輪船に投ず。

二月十六日 陰。前六時開船。下午四時江陰を過ぐ。賑房諸人予を招て晚餐す。十一時鎮江に達す。

二月十七日 快晴。未明金陵を過ぐ。零時二十分東西梁山の間を過ぐ。此処江幅五丁許。二時蕪湖に達す。同二十分起梘。夜九時半大通を過ぐ。小丘上燈台あり。此夜空江不波月色高潔□一詩。

二月十八日 健晴。午前九時五十分小姑山を過ぐ。十時十分彭沢県を過ぐ。淵明先生為令地三面繞山一面臨江，風景清淡寔可愛也。十二時十分湖口県を過ぐ。遙に鄱陽湖を望む。此処江流南北二脈に分れ，稱して内江，外江と云ふ。南路を以て外江と為す。水浅き時，船多く外江を過ぐ。下午二時四十分九江に達す。廬山一峯雪斑点々晴空に兀立し，堂々として偉丈夫の概あり。府城の下流に沿て二砲台あり。共に砲五門を備ふ。穹窿製にして，塗るに黒漆を以てす。租界洋屋三十許。五時二十分開船。八時四十分武穴を過ぐ。此より江の左右再び山を得，恰も我山陰山陽の内海を航するが如し。此夜陰曆十三夜。月色殊に妙絶。碧落如水江静無波。

二月十九日 健晴。十一時十分船漢口に達す。洋煙一箱を汽船帳房諸人に贈り数日間の厚遇を謝す。外に六百文を船夥に給す。吉利洋行に至る。呉永寿，吉島，松田，山崎，福原，林等在焉。下午福原，伊東を伴ひ楽善堂に至る。井上に面し堂内に寄留する事に決す。楊，官來談。夜頭痛，薬を用て臥す。

二月二十日 雨天。終日在家，病を養ふ。

二月二十一日 晴。官，福原，伊東等來談。晚吉利に至り松田を訪ふ。泥酔人事を省せず。面せずして去り，山崎を訪ふ。九時山崎を誘て帰る。

二月二十二日 雨。安徽寧国人方城詩二首を寄せ来る。即刻之に和す。夜井上，山崎等と会食す。

二月二十三日 陰天。上海田鍋，速水，津川，久慶里，廣懋館，家大人，林田，光彦，山内諸氏に寄するの信を作る。外に天津中西，石川，芝罘白須直に寄するの信を作り呉永寿の北行に托せんとす。

二月二十四日 半晴。下午五時景山と出て吉利洋行に至る。山崎，福原，伊東等來会。此夜井深仲卿上海よりの信來着。山口外三正月八日郷里会津に死去の事を報ず。九時帰る。

二月二十五日 晴天。下午島崎好忠氏に発信す（韶州第七報告）。外に荒賀直順に支那人書四枚を送る。猪田に托し上海より發するなり。下午井上氏と出て呉永寿を訪ふ。吉島在焉。茶談，

時を移し去て吉利に至る。福原，山崎以下五六人在焉。飲で八時に至り散ず。予は松田，山崎両氏と十時より出て，柳巷花園に至り夜花を賞し，予と山崎は留宿す。夜雨衣袂尽く沾ふ。

二月二十六日 雨天。九時半起来。松田氏來り迎ふ。花園を辞して吉利に至り中餐後洗浴し，晚餐を終り轎子を賃して楽善堂に帰る。飛雪粉々。

二月二十七日 雨天。終日在家。晚山崎氏來り宿す。

二月二十八日 雨。下午山崎と吉利に至る。井上亦来る。八時共に帰る。

三月初一日 雨天。終日在寓。夜寧国人方城來訪。

三月二日 雨天。下午家大人の信及び東京亀雄並に齊藤員安の信到る。家大人と亀雄は金円領収を報じ来る。外に高原雜誌第五号と島崎好忠氏の信到る。晚松田氏に至り小談，帰る。

三月三日 雨天。

三月四日 半晴。下午井上と吉利に至る。晚前田及び東京毎日新聞通信員林正文上海より来る。夜怡和客棧に至り飲み，山崎氏に至り宿す。

三月五日 雨天。朝食後松田氏の処に至る。五時河本磯平長安号より上海に送る。之を船中に送り，家大人並に東京島崎好忠，上海田鍋，山内，久慶里諸子への信を托す。外に領事館より依囑の麻一色を買ひ河本に托し，加藤に送る金一円八十錢加藤氏より預り，麻買入れの余剰加藤氏に返却す。夜井上，山崎と帰る。

三月六日 積陰。上海山内崑の信到る。

三月七日 雨天。楽善堂員某來着。晡時出て洋街に至り散歩し，帰途吉利に至り，八時帰る。

三月八日 陰天。終日在寓。夜松田，山崎諸氏來談。

三月九日 晴。晡時出て山崎を訪ひ，去て景山，林等の寓に至り小飲。松田等と工部局に至り富山別府真吉氏の信書を受取り帰る。別府氏は家を挙て鹿兒島に移寓すと云ふ。是日陰曆三日，楽善堂大開帳の日に当るを以て，堂主人内外の知人を招き飲む。会する者松田，山崎，林正夫，前田，福原，伊東，景山，服部等の諸人なり。豪飲深更に至りて散ず。予は官星塔，井上

其他二三の清人と徹夜す。
三月十日 晴。是日開帳の正日とす。賀客門に満つ。夜更林、福原等帰る。
三月十一日 晴。中餐後出て山崎の処に至り、去て吉利に至る。晩食後松田、山崎、林、前田等と洋街に散歩し、予は松田、山崎二氏と花園に至り茶を啜り、九時松田氏に帰り、十時辞帰す。
三月十二日 健晴。下午出て松田氏に至り洗濯す。是日帝国軍艦赤城入港。武昌鮎魚套に泊す。鐘崎姓来訪、軍艦に乗じ来る者。夜食後鐘崎を伴て楽善堂に帰り、二時就寝。
三月十三日 雨。十時松田、井上、野崎、山崎、鐘崎諸氏と、龍王廟より官渡船を賃し武昌に至り軍艦を訪問せんとす。本日早朝漢口に下りしを聞き、織布局に吉島を訪ひ小談。又た小舟に賃して洋街前碇泊の軍艦赤城に至り、艦長出羽氏に面し談話。時を移して帰る。夜米国の偉人アブラハム氏の詩を読んで之を終る。
三月十四日 晴天。早朝井深仲卿来訪、小談辞帰。是日上海田鍋、藤城、加藤、阿川、荒井等に寄するの信を作る。阿川は日清魯の關係一冊を返付し、荒井には南翔汪姓に寄するの信を転致せしむ。外に西京井手三郎、東京鳥居、齊藤、古城、河野等へ連名の書を作り明日帰中の伊東良造に托す。別に東京島崎好忠氏（第八号軍艦製造の件）に寄するの書を作り、鳥居列の分と共に上海猪田氏に托し投函せしむ。蕪湖金子新太郎に一封を發す。夜上海深水十八、藤城、池畑、熊本緒方、片山諸氏の信到る。
三月十五日 晴。朝餐後井深と約有るを以て吉利に至り、井深来らず。去て山崎氏を訪ふ、在らず。松田氏と伊東生を訪ひ上海及び日本への書信を托す。松田と共に競馬場に散歩し、帰途萃利輪船に至り、伊東生の上海に帰るを送る。八時山崎を誘ひて帰る。楊子荃来る。談話二時に至て就寝す。楊姓輔仁義社設立の主旨書を示し予に入会を勧む。予之を諾す。
三月十六日 晴。赤城艦長出羽氏より依托の長江水師の調査書を作り之を終る。夜松田氏来り。明日赤城艦員招待の事を商量す。予之を賛成し、井上、松田二氏と出て山崎、福原等を訪ひ

同意を求め、直に松田、山崎二氏を軍艦に遣り此旨を告ぐ。井上と帰る。井深仲卿在焉。来て病を養ふ者なり。予同人の暹羅行を送るの叙一篇を草し贈る。十一時松田、山崎、甲田、福原等来り、明五時月華樓に艦員招待の事を告ぐ。夜雨。
三月十七日 晴。井深と談じ、三時出て吉利に至り松田氏と軍艦赤城号を訪ひ、出羽艦長に晤し、艦長及び士官七人を伴て月華樓に至る。会する者主客二十人、快談痛飲九時に至て散ず。松田氏に至り留談、十時に至て帰る。是日上海田鍋の信到る。東京西村忠四郎の（この後数字分不明）来る。
三月十八日 陰天。朝鐘崎三郎来る。井深帰る。十一時井上等と出て軍艦の端艇に乗じ、赤城号に至り、甲板にて立食の饗を受く。仏国領事夫婦亦来会。終て一同撮影し端艇に乗じ、三時吉利洋行に帰る。松田氏の帰るを待ち談話。八時に至り帰寓。井深の帰滬に托し、田鍋安之助にアブラハムの伝一冊と書状を送る。
三月十九日 晴天。午前山崎来る。上海猪田正吉の信及び九州日々新聞到る。晌午漢水渡り大別山に上り眺望す。五分の春色鄂渚に動き鸚鵡洲頭草色青みたり。二時帰る。松田氏在焉。
三月二十日 健晴。終日在寓、雑書を読む。夜微雨。独坐深更万感攢集す。忽ち亡母の事を思ひ熱淚闌干恨み難禁。
三月二十一日 雨天。下午官氏来り唱和す。晚吉利洋行に至り洗濯す。終に宿す。
三月二十二日 陰天。午前吉利より帰る。
三月二十三日 晴。晚吉利洋行に至り、松田を誘て大智門外に遊ぶ。麦浪万頃菜花其間を綴り、春色如海時に夕陽如盤、青草原頭に巻く、風趣佳絶、人をして転た当年の遨遊を追想せしむ。帰途山崎を訪ひ、誘て帰る。
三月二十四日 健晴。午前吉利に至り、転じて工部局に至り津田静一氏、田鍋、大川、齊藤、別府、天津中西及び家大人の信書と九州日々新聞を受取り、吉利に帰り松田と小談。十二時帰寓。
三月二十五日 雨天。午前上海より実相寺某及び東京小名木川綿布会社永井米蔵来着。

三月二十六日 晴。岷江四日記を作る。下午景山、甲田来談。晚景山等と吉利洋行に至り洗澡し、八時帰る。夜山崎来り宿す。

三月二十七日 晴天。是日岷江四日記を成就す。白岩龍平の信到る。上海山内崑に発信し預け金の残額五円七十五銭を家大人に送致せん事を托し、家巖に呈するの書一封を封入す。

三月二十八日 晴。四時出て吉利に至り松田と洋街に散歩し、帰途山崎を訪ひ写真代を払ふて吉利に帰り、夜食す。上海より緒方二三の電報来り、近日上漢するを以て予に待たん事を勧む。緒方は昨日来着せし者なり。松田に托し製せし単衣及び褲子を受取りて帰る。

三月二十九日 晴天。終日在家。夜楊子荃来談、唱和。十二時に至り就寝。

三月三十日 晴天。終日在家。

三月三十一日 晴。上海山内崑、田鍋、白岩に寄するの信を作り野崎氏の帰滬に托す。外に九州日々新聞の山田に一封を郵寄し、岷江四日記を送る。三時出て吉利洋行に至り談話。夜入浴後山崎、松田等と談じ、終に宿す。

四月初一日 健晴。吉利に在て中食す。晌午松田氏と洞庭春茶楼に上り吃茶、閑談。一時帰る。是日島崎大佐の信長崎より、山内崑の信上海より到る。

四月二日 晴。三時出て吉利に至り晚餐に鯨を食ひ、夜松田氏と出て長安号輪船に至り、実相寺、野崎、永井米蔵三氏の上海に帰るを送る。上海白岩、田鍋、山内に寄するの書及び伊東に致すの書を野崎氏に托す。伊東には其帰朝の時西京にて井手三郎に致す信書一本を托せり。是日上海藤城の信及び肥後先哲遺蹟一部を送り来る。熊本山田珠一氏書を佐々克堂翁に乞ひ、予に転致する者なり。熊本牧相之氏の信到る。今夜上海の報あり、朝鮮の亡命人金玉均、我邦より上海に來り東和洋行に止宿中、三月二十八日午後三時其同行人洪鐘宇の銃殺する所と為る。李鴻章、袁世凱等の計らひにて誘殺せし者ならん。其手段甚だ悪むべし。

四月初三日 晴天。下午上海田鍋氏の信到る。金玉均東和洋行にて刺客に死せし事を詳報し来る。外に猪田及び芝罘白須直の書到る。白須は

水煙袋買送を依頼し来る。

四月初四日 雨天。終日在家。

四月初五日 陰天。午前山崎来る。照相樓閉店の事を商量し、自己身上の事を以て予に托せらる。予因て上海に致書し同氏の為に謀る所あり。井深、田鍋二氏に書を發す。五時吉利に至り松田氏を訪ひ、八時帰る。楊子荃在り、談論唱和、一時に至りて就寝。上海山内崑の信到る。

四月初六日 天雨。五時出て吉利に至り、十時帰る。

四月初七日 陰。春寒透衣、比数日前寒暑表有二十余之差。福原、甲田、景山諸生及び官星塔来訪。三沢信一の信到る。近日帰国すと云ふ。

四月八日 半晴。下午松田氏、緒方二三を伴ひ来る。本日着せりと云ふ。佐々友房氏大坂よりの信を携へ来る。三時共に出て松田氏に至り、牛を割て飲む。康等と洋街に散歩し又た吉利に帰り、十時緒方の寓晋記に至り宿す。緒方より朝鮮亡命人に対する佐々氏の意見を聞く。覚へず涙下る。東京に在る朴泳孝も刺客に逢て遁れ、李圭冠は既に殺されたりと云ふ。予終夜眠らず万感交集。

四月九日 朝晋記より帰り、佐々友房氏に与ふるの書を作り、氏が對韓政策の天理公道に背戻せるを極言す。外に山田珠一及び上海田鍋に一封を送る。五時出て松田氏を訪ひ、緒方、井上諸氏と福原林平の帰申を送り、佐々、田鍋諸氏への書状は上海猪田に托し書留にて發せしむ。松田、緒方両氏の処に至り留談、十時に至て帰る。

四月十日 晴天。下午出て緒方二三氏を訪ふ。松田、康両氏在焉。八時松、緒二氏と出て萬安楼に至り小酌。郭家巷に至り楊州の名花を賞す。予は留る。松田氏十時帰る。是日下午上海中桐某来り、予と松田を月華楼に招き飲む。

四月十一日 陰。朝緒方と郭家巷の花園を辞し、樂善堂に帰り中餐し、共に漢陽武昌に遊ばんとす。天雨らんとするを以て已む。転じて緒方の寓に至り松田氏を招き、出て月華楼に上り小飲。緒方氏にて晩食し帰る。是日家大人及び牧相之氏の信到る。牧相之、松倉善家兄弟に致書

し、其母堂の逝去を吊す。外に東肥合資会社に一封を送る。

四月十二日 晴。晩食後緒方を訪ひ、共に吉利に至り洗澡し、松田等と洋街に散歩し、緒方の処に至り宿す。

四月十三日 緒方の寓にて中食し、江を渡りて武昌織布局に至り、吉島を訪ひ中餐後、辞して出で漢陽に至り、大別山に登る。春色如海佳景蘇人。山を下り鉄政局を貫き漢水を渡り樂善堂に帰る。緒方留宿す。

四月十四日 晴天。是日東京鳥居赫雄より日本新聞を送り来る。外に書信一本あり。三時松田氏来る。共に出て緒方の寓に至り談じ、十時帰る。

四月十五日 晴。熱気大に加ふ。寒暖計八十六度。四時井上と出て山崎を訪ひ、洋街を散歩し、緒方の寓に至り小談、十時帰る。山内崑の信到る。

四月十六日 晴。終日在家。夜山崎来談。

四月十七日 晴。上海井深、猪田及び東京亀雄の信到る。七月迄の学資を要求し来る。鳥居赫雄に復するの書を作り投函す。外に齊藤員安に一封を送り、亀雄の事を托す。緒方の処に至り、九時帰る。

四月十八日 陰。十一時井上、李、羅三子と江を渡りて武昌府同仁医院に至り、輔仁義社の創立会に臨む。会する者楊子荃、王金堂、羅進夫、李、井、外一名なり。三時辞帰。中夜雷鳴大雨。

四月十九日 陰。終日在寓。是日上海猪田正吉、向野堅一、郡島忠次郎、白岩龍平等の信到る。

四月二十日 陰。下午緒方来談。五時緒方と出て吉利に至り洗澡し、晩食後緒方の寓に至り宿す。是日漢報館主姚芙初大罪あり遁走。政府各地方官に令し、巖掌の上直に斬首すべきを命せしと聞く。同人は予と関係あり。近頃の駭聞なり。

四月二十一日 雨。緒方の処に中食す。是日東京齊藤員安、鹿児島別府真吉の信到る。三時吉利に至り晩食し、七時帰る。山崎在焉。兩三日前より漢水暴流如瀑布、溺斃する者数十人、破船百余艘に至る。三十年來の重き所と云ふ。

四月二十二日 陰。冷氣甚し。又た綿衣を加ふ。

寒暑計六十度。荒井甲子之助来訪、昨日蕪湖より来着せし者。

四月二十三日 陰天。上海猪田正吉、高橋正二、向野堅一、白岩龍平、郡島忠次郎、山内崑諸氏に復するの書を作る。

四月二十四日 雨。下午緒方、山崎来り、終に宿す。

四月二十五日 晴。是日東京安原金次氏より五月より十月迄六ヶ月の手当百五十弗を田鍋氏転交にて送りし事を報ず。即ち田鍋へ一封を送り、内七十弗を漢口に送り、二十一弗を家巖に送り、余五十六ドル余は正金銀行に存寄せん事を托し、湖南地方漫遊の護照願を封入し、田氏に手数を嘱す。家大人に書信二通を送り、一は二十一元送致の事を報ず。猪田、山内、白岩、向野、高橋、郡島、阿川太郎等に寄するの信も、福原、甲田等の帰滬に托し送る。緒方、松田と福原等の寓に至り行を送らんとす。船に乗り後れたりと云ふ。松田氏にて洗澡、十時帰る。

四月二十六日 陰天。緒方来る。夜緒方の寓に至り宿す。

四月二十七日 晴。午前緒方と江を渡りて武昌に至り漢陽門を入り、東門孝忠門を出て馬に騎して洪山に至り宝通寺を一覽し、高塔に上る。春色如海、四望襟帯の下に在り。山を下り一旗亭に投じ吃茶し、徒歩して帰る。一路紅男緑女遊人如織。東嶽廟に至り一遊。忠孝門を入り漢陽門を出で、江を渡り龍王廟より上岸、緒方の寓に至る。夜吉利に至り談じ、十時帰る。雨。田鍋に発信。

四月二十八日 雨天。土曜日。終日在家。夜山崎来宿。

四月二十九日 晴。日曜日。楠内友次郎及び横浜貿易新聞社長小林梅太郎来着。上海藤崎秀、藤城二氏の信及び田鍋より匯豊の為替券を送り来り、委任状を裏面に書して再送を求む。因て田氏に復するの書及び為替券を同封し、工部局の書留郵便にて明日の便船にて上海に寄せんとす。之を松田氏に托す。是日吉島、松田両氏亦来る。五時松田氏と出て同氏宅に至り、九時帰

る。
四月三十日 雨天。晡時出て松田氏を訪ふ。十時山崎と帰る。
五月初一日 雨天。午前出て松田氏に至る。楠内、小林二子在焉。上海藤崎、大隈及び島崎好忠氏（湖北兵備及び輔仁社云々湖南遊の事等第九）に寄するの信を楠内に托す。外に天津中西、芝罘白須、北京中島雄諸氏に寄するの信を小林の北遊に托す。洋街荒井等の寓に至り小談。七時小林、楠内二氏を泰和輪船に送り別を叙して帰る。九時緒方を誘て帰る。
五月二日 晴。荒井来談。晚緒方、山崎と出て吉利に至り、山崎と帰る。
五月三日 晴天。晡時山崎と循礼門外に散歩す。
五月四日 晴。終日在家。上海白岩龍平、藤城龜彦及び英国品川久太郎氏の信到る。氏は四月一日英国を發し帰国すと云ふ。
五月五日 晴。午後緒方、松田、荒井、景山来訪。弟龜雄の信東京より到る。晚食後緒方と出て吉利に至る。夜雨。松田の処に宿す。
五月六日 晴。日曜日。昼食後松田氏より帰る。夜官、景山等来談。
五月七日 晴天。東京齊藤、鳥居等に寄するの書及び熊本合資会社員に致す書と守田愿の母堂死去を吊するの書を作り投郵す。齊藤には龜雄の事を依頼せり。熊本にて磁石紙等の買送を托す。是日緒方、松田二氏と謀り山崎に金四円を賤す。緒方と大智門を出で循礼門を入りて帰る。緒方宿す。官来談。
五月八日 陰天。晚武藤岩彦上海より来る。楠内友次郎、福原林、大川愛次郎等の書状来る。緒方と山崎を萃利輪船に送る。上海に帰る者なり。吉利に至り小談、帰る。雷雨。五月九日雨天。晚食後吉利に至り入浴。十時帰る。
五月十日 雨天。下午緒方、景山等来る。晚食後緒方と西橋口地方に散歩し帰る。夜緒方宿す。
五月十一日 陰。山崎羔三郎に発信し、同人に勧むるに一時上海の巡査と為るを以てす。五月十二日陰。十一時井上と江を渡りて武昌同仁医院に至り、輔仁社第二集会に列す。会する者、彭雲翹、劉驛卿、聶質亟、汪仲皋、張盛甫、陳樑臣、劉建菴、黃用成、劉德夫、茶蘭池、周恒

齊、楊子荃以下五六人。四時江を渡りて帰る。風濤清船を掀す。藤原由雄の信到る。
五月十三日 陰。下午緒方、景山等来る。五時出て吉利に至り閑談。九時緒方の寓に至り宿す。（この後半行分不明）
五月十四日 雨天。吉利に至り入浴し、十時帰る。上海田鍋安之助の信来着。
五月十五日 雨天。上海大川愛次郎、楠内友次郎、福原林平三氏に復書す。緒方氏来宿。
五月十六日 雨。午前津川大尉来訪。昨夜来着せりと云ふ。日本煙を携へ来り贈る。中食後緒方と出て星記客棧に至り、津川を訪ふ。同行桂大尉に面す。晚四人会飲す。寛談、九時に至り津川等と吉利に至り、松田を訪ひ、十時星記に帰り、緒方氏の処に宿す。
五月十七日 雨。午前曹を遣して上官氏を招き、津川等の住処及び語学の件を商量す。緒方と吉利に至り晩食し、夜又た津川の処に至り談ず。昨日上海田鍋氏より銀七十弗送来。外に福原林平、山崎等の信到る。白岩龍平の信上海より到る。姚姓の日本へ通れしを報ず。
五月十八日 晴。下午緒方、武藤来談。晚食後出て吉利に至り小談、帰る。
五月十九日 晴天。是日上海田鍋、白岩、熊本井手、片山、篠原、鹿兒島成田、別府諸氏に寄するの書を作り、緒方二三の帰国に托送す。片山には肉桂香一匣を贈る。外に津田静一に一封を致し、上海申報の暹羅論を贈る。下午吉利に至り、緒方、松田、武藤諸氏と小飲。松田と予は津川、桂等を訪ひ、又た吉利に帰り、七時諸氏と出て緒方二三の帰国を送り、予は松田の処に宿す。
五月二十日 雨天。朝食後吉利より帰る。是日上海山内崑及び家大人並に光彦の信到る。下午荒井甲子之助、林政文来り、北部旅行の件に付き詢問する所あり。
五月二十一日 晴。熊本安樂警部長及び光彦に発信す。外に緒方二三に上海に致書す。晚出て吉利に至り、八時松田と出て郭巷茶園に遊び留宿。
五月二十二日 晴。郭巷より景山等の寓に至り、林政文、荒井兩人旅行の準備を助け、十二時

林、荒井を送りて通済門十里の地に至り、二時景山の寓に帰る。林、荒井は陸路北京に赴く者なり。松田氏を訪ひ武藤と三人月華樓に至り小飲。五時予は松田と津川、桂等を訪ひ、九時帰る。山崎の信上海より到る。

五月二十三日 晴。上海柳原、武昌彭姓に致書す。下午松田氏に至る、皆在らず。夜終に吉利洋行に宿す。

五月二十四日 晴。朝食後吉利より帰る。下午武藤、松田両氏到る。四時二氏と出て吉利に到り洗澡す。津川、桂等到る。八時辞帰。途中津川の寓に至り小飲、快談。十二時半に至り帰る。

五月二十五日 晴。景山来る。下午景山と循礼門外に散歩す。城北の麦田万頃變じて湖沢となり、帆船其間を往来す。年に此の候より八九月迄如此と云ふ。晚桂氏來訪、快談十一時に至り帰る。氏は陸軍中尉にして此地に來遊せる者、質直の人物なり。

五月二十六日 陰天。土曜日。下午吉利に至る。前田鉄之助上海に帰るに会ふ。松田と出て之を送り、帰途景山等を訪ふ。桂生在焉。本日上海副領事山座円次郎より送來の銀拾貳円を、山崎よりの依托に照らし景山に一円、服部に四円、松田に二円、井上に五円を渡す。吉利洋行に帰り、九時津川等の寓を叩き、十一時帰る。是日前田に托し山座に金子領収書を送る。

五月二十七日 晴。午前津川、桂、松田、景山、入交等來訪。共に出て漢陽に至り鉄政局を一覽し、去て月湖の白牙台に遊ぶ。湖山の風色甚だ佳絶。湖中荷葉、田々画舫三五其間を徘徊す。宛然画中の景矣。茶を吃し清談時を移し、大別山に上り武漢の形勢を俯瞰し、下りて晴川閣に上り漢水を渡りて津川等の寓に至り、夜松田、吉島、井上、景山、中川、桂等と会飲、十時帰る。島崎好忠、山内崑氏等の信到る。

五月二十八日 陰天。下午吉利に至る。武藤在焉。夜雨。留住。

五月二十九日 晴。朝松田氏にて洗澡し、工部局に至り上海緒方二三の信及び家大人の信を受取りて帰る。夜出て津川、桂等を訪ひ、十時半帰る。是日井上食費三元を払ふ。

五月三十日 小雨。中食後吉利に至り、八時半帰

る。

五月三十一日 雨天。終日在家。下午景山到る。

六月初一日

六月初二日 晴天。五時出て吉利に至り、十時帰る。桂氏在焉。是日宇土武藤宗永なる者の信到る。弟光彦負債の件に付き照量し来る。

六月初三日 晴。午前出て津川、桂等を誘ひ、江を渡りて武昌織布局に吉島を訪ひ茶談。去て蛇山曾文正公の廟に展し、糧道街官書処に至り書を購ひ、五時江を渡り帰る。萬華樓酒館に上り、津川、桂、入交三氏と飲み、暮時吉利に至る。松田氏不在。津川等の寓に至り寛談。十一時に至り雨到るを以て轎に乗り帰る。上海楠孝吉、蕪湖横田某等在焉。本日着せりと云ふ。

六月初四日 雨天。下午井上の招きを以て德華樓に至り飲む。

六月初五日 陰天。下午研究所生徒向野堅一來る。白岩、田鍋、青木、猪田、山崎、大隈諸氏の信到る。柳原又熊の信亦到る。晚楠孝吉、横田、井上等を元和輪船に送り、帰途吉利に至り小談。八時津川、桂等を叩き、十一時半帰る。熊本緒方二三、上海勝木恒喜、山座副領事、速水一孔、東京鳥居赫雄等に発信す。

六月六日 晴。午前景山、向野到る。晩食後二人と出で道津川、桂に逢ふ。相携て洋街に散歩し、景山の寓に至り小談。津川の処に趣き寛談。十二時帰る。

六月七日 晴。上海猪田正吉、東京西村忠四郎に発信す。夜吉利に至る。津川、桂二氏在焉。帰途津川氏に至り談ず。

六月八日 雨。下午津川氏を福和輪船に送る。急に上海に帰る者なり。上海田鍋、白岩、山崎三氏への書状を托す。帰途吉利に至り小談。桂氏と共に帰る。桂本日より樂善堂に來寓。

六月九日 晴。終日在家。景山、向野來談。

六月十日 晴。下午景山等の寓に至り小談。吉利に到る。熊本緒方二三、東京米原繁蔵、上海田鍋安之助に信到る。田鍋より朝鮮東学党の変状を詳報し来る。是日日本より三千の兵を朝鮮に出す事を伝聞す。近頃の一快事、太平の惰眠を驚破するに足るなり。桂氏と暢談、一時就寝。

六月十一日 晴天。月曜日。東京鳥居赫雄、古城

貞吉、齊藤員安、上海山内崑、白須直の信到る。是日上海猪田、田鍋、山内、熊本津田静一諸氏に寄するの書を作り、景山長次郎の帰滬に托す。

六月十二日 晴。終日在家。寒暑表九十四度。

六月十三日 夜雷雨。晚桂氏と出外、洋街景山等の寓に至り小談。帰途吉利に至り小座。桂と轎に乗じて帰る。

六月十四日 雨天。

六月十五日 晴。晚桂、井上等と出づ。吉利に至り、九時帰る。

六月十六日 晴。土曜日。猪田正吉上海よりの信到る。

六月十七日 雨。下午桂と出で吉利に至り、松田を誘て月華楼に上り茶を啜り、晚轎に乗じて帰る。天津李鴻章より提督葉志超に命じ、塘沽の精兵を率ひ朝鮮に赴き東学党の難を処理せしむ。其兵数前後六千人（始めに二千を送り後に四千を送る）。

六月十八日 熊本緒方二三、香港白須直に発信。晚松田を誘ひ小談、帰る。

六月十九日 晴。終日在家。下午松田、武藤等来談。北京牧、岩崎、上海田鍋、景山の信到る。朝鮮京城東学党の為に陥られ、国王支那に逃れたりと云ふ。

六月二十日 晴。上海白岩、猪田、京都伊東良造の信到る。晚吉利に至り、九時月に歩して帰る。

六月二十一日 晴。上海白岩龍平、景山に復書す。

六月二十二日 晴。下午向野堅一の帰滬を送り、帰途桂氏の招きを以て洞庭春に上り洋饌を吃し帰る。田鍋安之助の信到る。

六月二十三日 上海山内崑、勝木恒喜の信到る。松田氏来る。楊子荃、劉輔之、黃理堂、金石泉等来談。金に貳拾円を渡す。

六月二十四日 晴。日曜日。午前吉利に至る。是日東京島崎好忠、鳥居赫雄、小倉前田彪、緒方等の信到る。

六月二十五日 晴。終日在家。

六月二十六日 晴。上海より曹姓来る。津川氏の信あり、急に帰国に決す。上海白岩龍平の信到

る。姚姓の望により漢報主管を予の名義に改めん事を照会し来る。晡時井上、桂、官、李諸氏と得華楼に上り飲む。宴中電報を伝へ来る。上海島崎氏の発する所、至急漢口を發し芝罘に至り井上氏に会せよ云々。朝鮮の形勢切迫せるが為なり。吉利洋行に至り小談。八時轎に乗じ帰る。

こうして宗方は、日清戦争勃発直前の清朝軍の動きを偵察する使命を帯びて山東芝罘へと出発するのであるが、既にまえがきに記したようにその部分—6月27日から12月いっぱいまで—の日記を今読むことが出来ないのは誠に残念である。しかし、『中日戦争』中に全部ではないが中国語に翻訳されて載っており、『対支』「宗方小太郎」中にも一部抜粋が載っているので、それらを頼りにその間の彼の動きを追うことは可能である。簡単にまとめると次のごとくである。

漢口から上海を経て7月6日に芝罘に到着、「威海衛軍港に密行し敵状を探知せんと欲し」（「宗方小太郎」からの引用、以下も同じ）、中国人を一人随行させようとしたが危険を察して従うものがなかったので、「独行に決し文服を脱して野服に改」め、すなわち一般中国人に扮して、病を押して8日に徒歩で領事館を出発、10日に威海衛に達し湾内の様子を視察、11日にかけて軍艦多数が碇泊する状況を確認して芝罘に戻った。19日に威海衛に派遣していた偵察員の情報で鎮遠以下14艘の軍艦がまもなく朝鮮に向かうことが分かり、宗方自身22日に再度威海衛に行つて港内の軍艦や砲台の様子を偵察し、更に28日には天津に着いて神尾少佐、堤大尉、石川伍一（宗方とは漢口楽善堂以前から親交があった）と当地で引き続き情報収集する任務を石川と宗方のいずれが担うかについて協議し、それを強く希望した石川が天津に残る事になり、宗方は31日に芝罘に戻った。まもなく石川が逮捕処刑されて、天津で顔を知られた石川を残したのは間違いで自分が残るべきだったと悔やむのは後のことである。日清戦争勃発後に芝罘に留まる日本人は宗方1人となったが、引き続き威海衛や旅順に人を派遣して情報を得ては上海東文三（黒井大尉）宛に報告し

た。次々に送った報告中の十二号と十四号（この号数が先に見た海軍省宛の報告号数の続きに当たるかは不明）が清国政府に没収される事になり、ますます宗方の身に危険が迫ったことから、東京からの指令で急ぎ上海に引き上げる事になった。8月29日芝罘から上海行きの船に乗ったが、領事館を出るときに既に中国人に知られてしまい「予事の破れたるを知るも進退兩難寧ろ進んで敗るるに如かずと決心し」て上船した。上海に着くまでの2昼夜間に前後6人の顔見知りの中国人が乗っていて「愈々一死を決し、命を天に任したり」。その6人中最も難関と思えた南京長江水師の把総蔡には、その部屋を訪ねて行って私が日本人であることを誰にもいわないでくれと頼んで承知させ、あとの5人は同室にいながら「予の顔を看破せず。実に天佑有る者に似たり」という状況であった。更に上海に入る手前の呉淞口で中国軍艦に侵入停止命令を出され、中国人官吏と西洋人が甲板に上がり「ムナカタ」という日本人がいまいかと尋ねたが、船主は日本人は載っていないと答えたので去っていったという。こうした連続的な危機から免れて31日に上海に上陸し、9月7日には洋装に換えてイギリス船に乗り、「呉淞を過ぐる時官府の物色するを恐れ頗る警戒」したが、何事もなく通過して11日に長崎に着いた。その後、至急広島大本営に赴くべしとの軍令部の電報があつて16日に広島に着き、「破格を以て特に謁見を賜ふの内命」があり、その際は「清国滞在中の支那服を着用すべし」との事で、急遽熊本に頼り込んで間に合わせの服を送らせることになった。10月4日大本営で「天皇陛下に拝謁」し「清国の形勢に就て下問さる。予一々縷陳二時間の久きに及んで帰」った。その後27年末までどのように過ごしたかについては、上記2つの資料中にほとんど触れていないので類推の域を出ないが、そのまま広島に留まって海軍囑託として中国に関わる知恵袋的役割を果たしていたのではないと思われる。

3. 明治28年1月～3月, 9月～12月 の日記

前年9月に広島に着いてからは、そこに留まっ

て海軍囑託としての活動に従事していたであろう事は上で述べたが、28年に入ってからの日記でもそのことが確認できる。「山東、江蘇攻略の意見書を草す」(1月4日)、「安原氏と共に台湾攻略の意見書を草す」(1月7日)、「海軍部に要する人物の選択を委嘱さ」れる(1月15日)などがそうした動きを示すものだが、他に「通訳官取締を命ぜら」れて(1月24日)、その選考に当たったり宿舎の配置を考えたりしている。更に1月23日に「対清遜言」を脱稿してその日のうちに海軍部に提出しているが、内容は今回の戦争を今後いかに展開させるべきかを論じ、また戦争終結に際して清国側に認めさせるべき条件をいくつか指摘しているもので、馮正宝氏が述べるように、この宗方の示した終結時に清国に認めさせるべきとした条件が、海軍の指導部を通じて下関条約の条文作成に際して一定の影響を与えたことは確かであろうと思われる(注)。

それまでの日記中にもその日に会った人の名前を必ず記し、受け取った手紙、出した手紙についても名前を書いているが、この時期においてもそうであり、上海であるいは熊本で顔を合わせていた人物が広島を訪ねてきているし、手紙を盛んにやり取りしていることがわかる。そして、訪ねてきた人のほとんどはこれから出征すべく宗方と別れを惜んでいるのであり、その数の多さは驚くべきものがある。彼らの中には漢口樂善堂の仲間がおり、上海日清貿易研究所の生徒だった者もあり、熊本の知人もいるのだが、いずれにしても宗方の周囲から日清戦争に通訳その他の形で関わるものが多数いたことを日記から知ることが出来る。なお、宗方本人には3月5日に聯合艦隊付の派遣が発令されて、準備費50円支度費15円を受け取り、それとは別に従来受け取っていた囑託としての手当て半年分240円も手にしている。囑託の手当ては27年よりも増額したのは、日清戦争勃発時の活動が評価されたからであろう。宇品港出発は3月8日で、15日に佐世保を出て一路澎湖島を目指して進んだ。軍艦7艘運船10艘他で、まずは「澎湖の南部倉島を占めて根拠となし、澎湖占領の後には本拠を此地に置き、馬鞍山以南の海面を制せんと」した(3月14日)。当初20

日を総攻撃の日と決めしたが、悪天候のため延期。天気がよければ明日攻撃という22日の夜、宗方は澎湖占領後に設置する「民政庁に関する意見の要点を記し、安原参謀に贈」った。彼が今回の艦隊による澎湖島攻撃で期待されている任務は、占領後に始まる宣撫工作にあったことをうかがわせるものである。

さらに、1月27日に「乙未会創立会」に参加し、とんで10月22日にもその関連会議に参加しているのは注目される（その実態については、後考を期す）。

（注）馮正宝『評伝宗方小太郎』、熊本出版文化会館、1997年。なお宗方の「対清邇言」は『中日戦争』中に中国語訳が載っているが、日本語原文は公刊されていない。そこで、ここには下関条約の内容と対比するために、歴史研究所々蔵の原文のその部分を載せる。

「一、清国政府をして再び朝鮮の独立に容喙せざるの誓文を入らしむる事

一、清国政府をして国民一般に向ひ公文を發して戦争の終局及び我が宣戦の主旨を知らしめ我国人に対し仇怨の念を抱かしめざる事を諭さしむへし

一、清国政府をして盛京省の沿海部、山東、江蘇の一部及台湾全島を永く我国に割譲せしむる事

一、清国政府をして償金 億万円を出さしむる事。右償金の完納迄は天津、牛莊の二港を質とし且つ我が軍隊を天津、大沽等の要地に留め其費用は清国政府の負担たるべき事

一、最惠国條款により通商条約を最高等の者に改訂する事

一、清国政府をして新たに湖南の岳州府を開かして互市場と為し之に我居留地を置き同省の内部に小汽船を往復せしむる事

一、内地布教を承認せしむる事

一、我国人にして便宜の爲め清国の衣冠を着け同国内に滞在若くは旅行等随意たるべき事

一、四川の重慶、湖北の宜昌、漢口、江西の九江、蕪湖に居留地を設くる事」

明治二十八年乙未正月

日誌

広島

元旦 午前大本營に至り賀を叙す。帰途大田敬孝氏と撮影す。下午井手等を訪ふ。五時自由亭に至り、陸海軍職員一同会飲す。七時帰る。井手等を訪ひ小談、帰る。山田珠一、家大人の信到る。

正月二日 陰。午前出て田鍋等を訪ひ、帰途第二師団司令部に至り伊集院少佐を訪ひ、鳥居氏従軍の事を依頼す。下午井手等を訪ひ、夜帰る。

正月三日 微雪。午前鳥居来訪。下午共に出て明月に至り井手等と前田彪を訪ふ。帰途劉食芳の書信の表装を托し帰る。晩井手等を訪ひ、十一時帰る。東京長岡護美公に発信。外に山田珠一、池田幸輔に致書す。

正月四日 微雪。午前九時出て長沼に至り、山東、江蘇攻略の意見書を草す。薄暮に至りて終はる。晩安原少佐に会食し、去りて吉川方に至り宇都宮大尉を訪ふ。田鍋、牟田両氏在り。会飲快談、十一時に至りて帰る。

正月五日 陰天。午前平川常義、金子新太郎来訪、牛を割て飲む。下午出て井手等を訪ひ、夜十一時帰る。永原、小濱為、齊藤員安諸氏の信至る。

正月六日 雪。朝、読売新聞匹田鋭吉来訪。午前出て井手等を訪ひ、共に出て中島真雄を訪ひ雑煮を食ふ。晩餐後帰る。井手等の処に小談。岡次郎来る。

正月七日 半晴。午前長沼に至り安原氏と共に台湾攻略の意見書を草し、正午終はる。下午井手等を訪ふ。晩鳥居赫雄の招きを以て井手、緒方、深水、白岩等と往て晩食す。八時帰る。

正月八日 陰天。下午井手等を訪ふ。夜田鍋等と会食す。十一時中島真雄来り、旅資の不足を告げ予に囑する所あり。

正月九日 陰。朝、成田鍊之助来り別を告ぐ。明日第二師団に隨て出征すと云ふ。午前井手等の処に至り、大連湾運輸通信部黒井海軍大尉に致すの信を認め、井手、深水に托す。下午上車出て堤中尉を訪ひ、別を叙す。帰途鳥居赫雄を訪

ふ。去て明月亭に至る。井手、緒方、深水諸氏と会食す。尾上、徳丸、中島真雄、鳥居赫雄諸氏来会、九時半帰る。佐々友房氏及び山田珠一、安原義雄等の信到る。中島真雄に十四元を交付す。

正月十日 晴天。早朝出て堤中尉を訪ひ佐々氏の書信を交付し、去て井手等を敲き、九時前上車宇品港に至り、井手三郎、深水十八（第一軍民政庁へ赴任、小倉丸にて）、田鍋安之助、尾上正連、成田鍊之助、中島真雄、鳥居赫雄（田鍋、成田は第二師団附）、（鳥居、中島は二師団附通信員）諸氏の出征を送る。三時帰る。松田氏を誘ふて山文船亭に至り、鰻飯を吃す。夜緒方氏を訪ひ、九時帰る。

正月十一日 半晴。午前松倉善家、藤森茂一郎、牧相愛及び内田、佐竹、井上諸生の第六師団に従征するを送る。午前松田氏来談。下午日本新聞社員古島一雄及び前田、緒方、山岸来談。家大人並に光彦、林田、奥村作□の信到る。夜光彦に復信す。八時出て徳丸を訪ふ、在らず。前田を敲く、又た不在。緒方の処に至り小談、帰る。

正月十二日 晴。午前池畑平次郎、報知新聞社石塚正治来談。午前出て前田、松田を訪ひ、夜八時帰る。緒方二三亦来会。帰途徳丸策三を天神町に訪ひ、十一時帰寓。船津辰一郎金州よりの信到る。

正月十三日 雪。佐々友房氏に復信す。画工園田逸龍来談。午前、日本新聞社古島一雄の招邀に赴く。徳丸策三亦た来会。長岡護美公家夫武田寧の信到る。京都荒尾精、佐賀西村忠四郎、熊本山田珠一、家大人、鳥井一男に発信す。山田には預け金中より拾円を家大人に送致せん事を依頼す。鳥井一男には刀剣の領収を報ぜり。

正月十四日 陰天。日本新聞社古島一雄の帰京に托し、鳥居赫雄留守宅池田末雄宛にて刀剣一本を送り、且つ池田に致書す。画師園田逸龍に致書し、中野熊五郎への添書を与ふ。天草守田愿等の信到る。東京佐々友房、安東第一司令部中西正樹、長崎鈴木行雄氏等の信到る。

正月十五日 晴。朝安原少佐を訪ふ。海軍部に要する人物の撰択を依頼さる。出て徳丸策三を訪

ひ、十一時徳丸及び石原市太郎の第六師団に赴任するを送る。熊本赤峰邦弥太に発信す。匹田鋭吉、古莊弘、津城謙助来訪。夜緒方を訪ふ。

正月十六日 晴。家大人の信到る。光彦に発信す。終日在家。

正月十七日 微雪。下午出て明月に至り、緒方、白岩と前田、松田を訪ひ会食して帰る。正月十八日陰、寒気稍□。午前平川常義来訪。下午出て明月に至り散髪す。佐々友房氏の信到る。外に弟光彦の信来る。夜出て松田を訪ひ、十一時帰る。

正月十九日 晴。終日在家。午前平川常義来り、本日より馬関に赴くを告ぐ。緒方、白岩来り中餐す。荒尾精、東京よりの信到る。夜出て明月に至り、十時帰る。

正月二十日 晴天。終日在家。松田満雄氏来談。心気不例、晩食後就寝。第二師団本日を以て山東省栄城湾に上陸せりとの報あり。

正月二十一日 陰。家大人及び山田珠一の信到る。山田友三来り、中島真雄へ貸与せし金貳拾円を返却す。古莊頼来談、近日大聯湾に赴くと云ふ。緒方、白岩両子に借る所の金拾四円を返却す。

正月二十二日 晴。白岩、緒方、美作為次郎等前後来談。長崎鈴木行雄、熊本赤峰、家弟、平川等の信到る。

正月二十三日 雪。松田氏来談。下午出て勝木等を訪ひ、小談帰る。対清邇言脱稿直に海軍部に提出す。高橋藤兵衛を賞する事に付き、海軍の係員に上申する所あり。夜寺嶋、錦織二氏と散歩。帰途明月に至り、十一時帰る。井手三郎、深水十八、成田鍊之助大連湾よりの信到る。

正月二十四日 雪。午前出て明月に至る。山岸等の第一軍に赴くを送る。大連湾柳樹屯兵站部山内崑、小濱為五郎及び第一軍民政廳井手、深木に寄するの信を托す。下午帰る。本営より召喚に応じ出頭す。通訳官取締を命ぜらる。五時帰る。鳥居赫雄大連湾よりの信及び前田彪其母堂の逝去を報ずるの信到る。夜松村龍起、望月龍太郎、木村信二、菊地九郎来談。十時帰る。是日有栖川総長宮殿下の御薨去を發表す。悲泣何堪、嗚呼。古莊頼来談。

正月二十五日 晴天。午前篠原由誠等来談。午前緒方、岡来る。下午山澤幾太郎来談。熊本県知事松平氏の招邀に堀川町静心館に赴き、晚餐後帰る。緒方の処に至り小談、帰る。鈴木行雄の信到る。

正月二十六日 晴天、夜雨。是日陰暦元日たり。午前緒方と出て停車場に至り、松平知事の上京を送る。帰途明月亭に至り小談、帰る。本営よりの召喚により出頭す。下午神保客棧に至り、通訳官寄宿舎の布置を為す。五時山口武洪氏の招邀に赴く。緒方、平山と偕にす。古荘韜在り。健啖、九時に至りて帰る。鈴木行雄に発信す。

正月二十七日 雨。午前中野より神保客棧に移寓す。東京日本新聞社古島一雄、国民新聞社阿部充家に発信す。元山津横田三郎の信到る。夜水月楼の乙未会創立会に臨席す、会者三十人、多半は庸人なり。

正月二十八日 晴天。頭痛。朝山浦久来訪。下午古荘韜、緒方二三前後来談。三時明月に至り白岩、緒方等と会食す。夜長沼に安原少佐を訪ひ小談、帰る。

正月二十九日 微雪。大連湾兵站部山内崑、二軍司令部荒賀直順、澤村繁太郎、民政庁片山敏彦、砲兵少佐根津一等へ寄するの書信を作り、古荘韜の金州半島に赴くに托し紹介を為す。午前山東者栄城県二師団司令部附田鍋安之助の信到る。我軍上陸の景況を報じ来る。下午日本新聞社中山安太、古島一雄の返書を携へ来る。夜宇田貞来談。

正月三十日 晴天。昨夜之雪深寸余。午前緒方二三、白岩龍平来る。共に中餐す。清国の媾和使張蔭桓、邵友濂昨夜神戸へ来着せりと云ふ。夜明月に至り緒方を訪ひ、十時半帰る。宇土篠原由誠の信到る。

正月三十一日 晴。朝中西正樹岫巖州より、小濱為五郎大連湾よりの信到る。是日清国の講話使張蔭桓、邵友濂、伍廷芳、黄承乙以下四十人來着す。下午津野一雄の信到る。国民新聞社阿部充家の信到る。緒方等と松田満雄を訪ふ。本日媾和使と共に神戸より帰来せる者なり。夜緒方、白岩、岡等と山文船室に至り会食す。

二月一日 風雨。下午晴。横田安止、野田寛の添書を携え来る。日本新聞社仙田重邦、山澤幾太郎、松倉親敬等来談。夜緒方、岡、錦織、中野来談。

二月二日 雪天。心気不舒。午前日本新聞社中山安太、及び野中林吉、松田満雄、松倉親敬、永田幸太郎等来談。永田は甲申分袂後相見ざる十一年、今は勢州津警察所長たり。五時松田氏と山澤師団長宅に赴き、兎を食ふ。九時帰る。清国媾和使全権不完備の為本日我談判委員により拒絶したり。

二月三日 晴天。仙田重邦、横田安止、緒方二三、控訴院判事山口武洪等来談。下午大本営に出頭す。五時帰る。是日より新通訳官三名入会。大田敬孝来談。

二月四日 晴天。午前大田敬孝と共に通訳官高野兄弟、猿渡仙太郎の三名の試験を為す。第二師団管理部鳥居赫雄に山東に発信す。外山浦太郎に致書す。前田彪、松田満雄来談。下午本営に出勤す。是日通訳官松本亀太郎帰来入舎す。夜安原少佐、小澤大尉を長沼に訪ひ、十時帰る。大連湾小濱為五郎、御幡雅文、長崎鈴木行雄の信到る。

二月五日 晴。午前宇田貞、森安治、横田安止、河野廉、仙田重邦等来談。下午緒方二三、前田彪等来談。威海衛の東西兩岸の砲台尽く我有に帰し、只だ劉公島及び北洋艦船のみ僅かに残喘を保ち居ると云ふ。夜佐々友房氏の信到る。長岡公華族会館を代表し占領地御巡回に付き通訳生一名周旋を依頼し来る。出て山口判事を訪ひ、古荘嘉門翁に面し談話。九時に至りて帰る。

二月六日 晴。朝横田安止来談。晌午大本営に出勤す。五時帰る。小野常三郎の信到る。尾本寿太郎去る四日大連湾より帰来、赤痢の為め陸軍予備病院に入院せる由報知せり。直に発信之に答ふ。小澤大尉より中島雄氏来談中に付き招状を送る。福岡津城謙助に発信、鐘崎三郎を吊するの七絶一首を送る。安原少佐を訪ひ小談。去て明月に緒方等を訪ひ、十時帰る。

二月七日 晴天。大本営に出勤す。五時帰る。白岩、緒方、森、赤峰等来談。夜緒方等を明月に

訪ふ。十一時白岩、古莊弘と山文船亭に至り飲む。十一時半帰る。古莊嘉門翁の信到る。

二月八日 晴天。朝中山某来談。九時大本営に出頭す。五時帰る。夜中山及び宇田貞、赤峰、森、古莊嘉門翁来談。

二月九日 晴天。午前緒方、白岩、中野を招き猪肉を食ふ。竹田津、岩永来訪。下午出て尾本寿太郎の病を第三分院に訪ひ、緒方等の寓に帰る。竹田津、岩永両生の試検を為す。夜帰る。前田彪来談。東京佐々友房氏の電報到る。

二月十日 晴。佐々友房氏に復電す。佐々友房、津野一雄、長嶋萬里、光彦諸氏に発信。光彦に日清會話二冊を送る。下午洋服を注文す。夜前田来る。出て緒方等を訪ひ、十時帰る。

二月十一日 晴。鈴木行雄並に家大人の信到る。下午前田を訪ひ、吹山薬湯を吃ふ。緒方の処に至り、十時帰る。古島一雄の電報、佐々友房の信到る。光彦に発信、其の病状を慰問す。

二月十二日 晴天。朝古島一雄に復書す。吉川に至り大生中佐を訪ひ、護美公御渡清の事を照会し、去て横井忠直氏を訪ひ小談。山勇に岩永生を訪ひ、副官部よりの旨を伝へ、郵便局に至り家大人に金拾円を郵送す。夜佐々友房氏に復書し、護美公戦地へ御渡航に付き大本営より許可の顛末を報ず。又た日本新聞社古島一雄に致書し、記者従軍の許可せられざるを報ず。吉川に梶川大尉を訪ひ快談、十時に至りて帰る。是日午後古莊韜を訪ふ。此朝佐々氏に致書す。

二月十三日 晴天。西村忠四郎に発信す。林田道利の信到る、直に之に復す。白岩、中野を招て晚餐す。夜鈴木副官を訪ふ。七時帰る。宇田、森、山口武洪、古莊嘉門翁来談。二月十四日 晴。長崎郵船会社竹野虎雄に致書す。午前上田勤来訪。下午緒方、前田等を訪ふ、在らず。夜宇田貞来る。共に晚餐す。徳富猪一郎来談。前田、白岩亦来る。十一時に至りて帰る。

二月十五日 雨天。午前中山安太、上田勤、赤峰等来訪。夜緒方等を訪、十時半帰る。

二月十六日 晴。朝小澤大尉を訪ひ、転じて安原少佐を敲き、九時帰る。家大人及び山田珠一に発信。山田氏には田鍋安之助氏の倉預り証を托す。長崎鈴木行雄に発信す。上田勤来り別を告

ぐ。山田珠一来る、今回長岡公占領地巡回に付き随行の為なり。赤峰国弥太来り別を告ぐ。山田と出て緒方、前田を訪ふ、在らず。去て古莊嘉門翁を山口武洪氏の邸に訪ひ、四時山田の寓に帰り小飲す。緒方、前田来訪。八時山田東京に赴く。夜緒方、前田、水谷彬来談。家大人の信及び佐々氏の電報到る。

二月十七日 晴天。午前木村氏と共に尾本寿太郎の病を訪ふ。下午大本営に出頭す。二時帰る。木村氏と緒方、白岩を誘ひ西公園に至り小鳥を食ふ。五時帰る。前田を訪ひ、去て日本新聞社古島一雄を川友に訪ひ小談。帰途緒方を訪ひ、十時半帰る。家大人並に尾本涼海氏に発信す。熊本合志林蔵の信到る。

二月十八日 雨天。午前郡嶋縫次郎、寺田作之助両生を試検す。長崎鈴木行雄、佐賀西村忠四郎、宇土篠原由誠の信到る。下午共に永田作之助、岩永六一両生来談。二時山澤幾太郎、古島一雄来る。共に晚餐す。夜宇田貞、森安治、平山岩彦、梶川重太郎来談。十時帰る。

二月十九日 晴天。午前松倉親敬、平山岩彦来談。長崎鈴木行雄、東京藪伍一の信到る。山田珠一東京より電報到る。護美公随行の都合付きたりと云ふ。下午古島一雄来る。鳥居赫雄第二師団兵站部附を辱しとせず、脱走して第六師団に投ぜし事に付き、予に停調を依嘱す。即ち書を第二師団司令部附田鍋に寄せ、津川少佐と共に其後を善くせん事を依嘱す。緒方二三、野中林吉、塙薫蔵、郡嶋縫次郎等来談。五時出て緒方の寓に至り、大山等と会食す。九時帰る。古莊嘉門翁、山田武洪来談、十一時帰る。甲斐靖、長嶋萬里の信到る。

二月二十日 雨天。下午米田侍従を訪ひ、去て古島一雄を川友に敲き、帰途緒方に抵り小談。夜長沼に至り安原少佐を訪ふ。小澤大尉に抵り、十一時帰る。永嶺尚次に発信。徳田廣作の信到る。

二月二十一日 大雪繽紛。午前九時大本営に出頭し、角田海軍大佐、安原海軍少佐と共に瑞川寺に至り、威海衛の捕虜蔡廷幹を訪ひ、黄海、威海の海戦に就て敵軍の状況を尋問す。蔡は広東人、年齒三十五、北洋艦隊水雷艇福龍号の管帯

にして、氣骨過人。黄海の役西京丸に向て二発の水雷を放ちしは即ち此の蔡なり。曾て米国に滞在する九年、能く事情に通ず。下午一時帰る。松田、緒方来談。家大人の信到る。夜平塚町長沼支店に田中海軍少佐を訪ふ。河野主一郎氏在り。田中氏は今後澎湖島占領後民政庁長官たらんとする者なり。九時帰る。途中宇田を訪ひ小談、帰る。

二月二十二日 晴。午前長岡子爵を大手町五丁目大原旅館に訪ふ。山田珠一在り。子爵は今回華族総代として軍隊慰問の爲め新占領地に赴かるる者なり。中餐して帰る。夜出征用の諸雑品を購う。宇田貞、野田正、白岩龍平、塙薫蔵等来談。

二月二十三日 陰天。夜雨。朝野田正来談。古嶋一雄亦来る。下午山田珠一を訪ふ。共に出て緒方等を敲き、牛肉の饗を受く。十時上車帰る。佐々友房氏の信到る。

二月二十四日 晴天。朝古莊韜来訪。正午山澤幾太郎来談。下午出て出征用の雑品を購ふ。五時半出、大手町五丁目大原方に至り、長岡護美公の招邀に赴く。来会する者水戸、徳川篤敬侯爵（烈公の孫也）、醍醐侯爵、外米田侍従、北里医学博士、徳富猪一郎、水戸侯家令川邊（水戸の老臣にして正党の遺類なり）及び予を合せて主賓七人なり。快談十一時に至りて帰る。家大人に発信。林田道利の信到る。中西正樹岫巖よりの信到る。

二月二十五日 晴天。午前古莊韜、徳富猪一郎来る。共に会食す。徳富其の自著の書籍二冊を携へ来り贈る。中村治太郎、松田満雄、古嶋一雄等来談。鈴木行雄、徳田廣作の信到る。夜塙、郡嶋縫次郎、宇田貞、小澤徳平、山田珠一、横田安止、伊集院兼良、平岩道知、三澤信一等来談。鈴木行雄に復信。

二月二十六日 晴天。午前関常吉、中村治太郎、古嶋一雄、古莊嘉門諸氏来談。下午亀井英三郎の信到る。白岩龍平来談。二時山田珠一を訪ふ、在らず。去て古莊嘉門氏を訪ふ、亦た在らず。緒方二三に抵る。六時立町岡本洋食店に至り、山澤幾太郎氏の招飲に应ず。八時緒方の処に至り、十一時帰る。

二月二十七日 晴天。午前平山岩彦、古嶋一雄、松本亀太郎、郡嶋縫次郎来談。下午山田珠一を訪ひ、長岡子爵を敲き談ず。五時緒方、白岩と山田の処に会食す。夜護美公及び醍醐侯と談ず。井手三郎、深水十八、井深仲脚岫巖よりの信到る。

二月二十八日 雨天。午前古莊韜来訪。共に郊外を散歩し山文船亭に至り鰻飯を吃し、徳富猪一郎を訪ひ、四時半帰る。小濱為五郎大連湾よりの信到る。洋服及び長靴代を支払ふ。宇田貞来談。共に晩食す。夜出て緒方を訪ひ、去て前田彪を敲き、十時帰る。

三月初一日 陰天。午前松本、赤峰、古島来談。下午鈴木行雄の電信到る。上海の荷物着せしを以て送致すべきや否を問ひ来る。余出征の期日切迫せるを以て復電して送致する無からしむ。第二師団威海衛司令部鳥居赫雄、岡田兼次郎の信到る。晩外山八代吉来訪、従軍を乞ふ。即ち書を作りて安原少佐に紹介す。岡次郎来り、告示文の添削を乞ふ。夜緒方二三来る。共に出て山田珠一を訪ふ、在らず。山中に至り緒方、白岩と談じ、十時帰る。

三月初二日 陰天。午前緒方来り、明日午後より占領地に出張を命ぜらしを告ぐ。古嶋一雄来談。下午二時大本營に至り、角田大佐、木村大尉両氏と瑞川寺に至り、捕虜蔡廷幹を見る。角田大佐より酒肴を贈る。黄海、威海の戦時を談じ、五時半に至りて帰る。帰途太田敬孝を訪ひ、晩餐して帰る。山田珠一に抵る。護美公と談じ、十一時帰寓。

三月初三日 晴天。午前山中に至り、緒方二三の盛京省占領場に赴くを送る。下午外山八代吉、郡嶋縫次郎等来談。夜古莊韜来る。八時共に出て山田珠一を訪ふ。護美公亦来談。十時半古莊、山田と市中を散歩し、途中麵舗に至り小飲、帰る。別府真吉氏の第二軍に在るに発信す。

三月初四日 晴天。午前浅山知定氏来る。肉を割て飲む。岡次郎、古嶋一雄、永田虎之助、外山八代吉、田中善之助、松井亀太郎、岩永六一、山澤幾太郎、三澤信一等来談。田中は戦地より帰り玫瑰瓶を携へ来り贈る。長崎鈴木行雄の信

到る。晩前田、松田を訪ひ、松田と共に山田珠一を敲き、十時帰る。

三月五日 晴天。朝佐々友房、齊藤員安、亀井英三郎、勝木、徳田、鈴木行雄諸氏に発信、出発を報ず。朝平山岩彦、古莊韜、藪伍一、古島一雄外諸氏来談。下午第一軍司令部中西正樹、弟光彦、亀雄等に発信、南征を報ず。本日聯合艦隊附として海外へ派遣を命ぜらる。晩古莊嘉門翁、古莊韜、白岩龍平諸氏来訪、共に出て山文船亭に至り会飲す。浅山知定、山田珠一、平山岩、松村龍、藪伍、平井格次、外二人来会す。九時半散帰す。

三月六日 晴天。午前小澤徳平、森安治、外山八代吉来談。十時本営に出頭し、準備費五十円、支度費十五円、五日間の日当二円五十銭を管理を受取り、且つ本月より俸給を私宅にて受領する手数を為す。但だ増俸は管理部に貯積する事とせり。参謀部より台湾図、台湾誌外二類を受取る。十二時山田珠一、白岩龍平来る。共に中餐す。前田、松田亦来る。諸氏と出て字品に至り、混成支隊際附通訳官諸氏及び長岡護美公、徳川篤敬侯、醍醐侯並に随行員山田珠一列の軍隊慰問の爲め新占領地に赴かるゝを送る。四時上車帰る。晩餐後春和園に至り、聯合艦隊参謀長出羽重遠氏を訪ひ小談、帰る。中野に至り、寺崎、宇田、北村等を訪ひ、十時帰る。鈴木行雄に発信す。

三月七日 晴天午前。古城貞吉朝鮮帰来に訪。古莊嘉門翁、古嶋一雄等前後来談。下午家大人に発信、出発を報ず。夜宇田貞来る。肉を割て飲む。白岩の処に至り小談。

三月八日 陰天。午前山澤幾太郎氏を訪ひ、辞別す。大本営に出頭し、来る五月より十月迄の手当として金貳百四拾円を領収す。帰途三井銀行に托し、熊本第九国立銀行へ宛て為替を取組み、熊本九州日々新聞社宇野七郎氏に受取方を依頼し、新聞社に保存方を囑托す。下午書留郵便に附し送金、手形を宇野氏に郵寄す。白岩氏を誘ひ来り中食す。前田彪、野中林吉来談。晩宗方大亮

三月八日 日乗

三月八日 雨。晩大内義瑛、平石等来訪。夜寺

嶋、大田等の招邀に赴く。帰りて山口武洪氏を訪ひ荷物を預り、小澤大尉より葡萄酒二瓶贈り来る。梶川、宇都宮両大尉書を寄せて別を告ぐ。九時天神町山中方に至り、白岩、古莊、平山、野中、三澤以下の招邀に応ず。予が為に行を送るなり。十一時帰る。

三月九日 微雨。朝宇都宮大尉、古莊嘉門、三澤、白岩、古莊弘、平山、平田久、津山知定、寺嶋、北村、錦織、中野以下知人來りて行を送る。十時結束して長沼に至り、安原少佐を訪ひ、十時半午餐を吃し、上車字品に向ふ。下午一時伊東司令長官一行と共に小汽船に上る。楽隊楽を奏す。西郷、樺山諸氏出征を送る者棧橋に充つ。一時半開船。三時半呉軍港に着す。直に旗艦松島号に上る。日本新聞社通信員古嶋一雄先在焉。予は准士官室に居住することとなり。呉港民松島艦を歓迎す。

三月十日 晴。呉港碇泊。我戦利軍艦清遠、広丙、平遠の三隻碇泊す。

三月十一日 晴。下午松島艦呉港を發す。風順不波兩岸風光如画図。晩洗澡、心気如拭。夜臥鈎床。

三月十二日 雨。天明過馬関。昨日有詩歌各一首。回虎擲龍掣功未全。前途漠々又如煙。春光一掬芸洲曉。笑上図南万里船。歌曰く、御軍を載せたる船の楫守りて心して行けわたつみの神。玄海之灘穩波不驚春雨冥濛。下午六時半船達肥之佐世保軍港、楽声亮々。入湾内現所泊之兵艦日巖嶋、日高千穂、日秋津洲、日浪速、吉野、橋立、加之松嶋。兵艦之數総隻運送船。

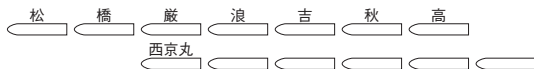
三月十三日 微雨。午前起床。八時古嶋一雄氏と上岸、佐世保港の播磨屋に投宿す。昨夕有詩、海濤千里征途長、夜泊艤艫水一方、恰似澎郎磯畔景、一逢春雨憶潯陽。客舍偶成、駐軍佐世保之□、暫与青山締□縁。竹□松村春雨暖、明朝好駕南征船。港内碇泊の運船は小倉、西京丸、千代丸、金州、門司、神戸、豊橋、鹿兒島、新発田の隻にして、戦利軍艦操江号亦在此。水雷艇三隻を見る。広島白岩、三沢列及び寺嶋、太田、宇田等に発信す。繼で長崎鈴木、朝鮮横田三郎、第一軍民政庁井手、大連湾小濱、御幡、東京佐々友房、長周日報社山根虎之

助等に発信。並に山澤幾太郎に写真を郵送す。五時古莊韜，花田某来る。共に晩酌す。八時古莊，花田は小倉丸に帰る。夜雨瀟々。深更就寝。是日下午佐世保有志者宴を設けて聯合艦隊中松嶋，巖嶋を歓迎す。

三月十四日 雨天。早朝播磨屋を發し，古島一雄と松島艦に帰る。時に七時なり。是日艦隊出口の予定なりしも天候の不可なるが為に明日に延期せり。下午艦隊航海長井上少佐に面す。

今回作戦方略の大要如左。

我艦隊は本隊と第一遊撃の二隊を以て成り，陸軍混成枝隊之に附す。軍艦には松嶋，橋立，巖嶋，浪速，秋津洲，吉野，高千穂，運船には近江丸（水雷母艦），西京丸，金州丸，鹿児島丸，新發田丸，小倉丸，豊橋丸，神戸，以下二隻にて合計十隻なり。内海軍に属する者五隻，陸軍に属する者五隻なり（水船，石炭船此中に在り）。此他水雷艇及び佐世保臨時水雷敷設隊，工作部等之に属す。第一着に澎湖の南部倉嶋を占めて根拠となし，澎湖占領の後は本拠を此地に置き，馬鞍山以南の海面を制せんとす。沖縄の中城，大島の久慈に水溜場を置き，沖縄の中城に石炭貯蔵所を置く。澎湖占領後は民政庁を置き，且つ蒸溜水器械を構置せんとす。進軍隊形は左の如し。



速力は八節。半速力六節。微速力四節。十九日倉嶋着の上第一遊撃吉野，秋津洲，高千穂，先づ澎湖島を偵察し，二十日総攻撃を為すべし。上陸点に兵備有りて抵抗を為さば，遊撃隊之を砲撃す。此間本隊は沖合に漂泊すべし。

是日古莊韜，関常吉，中村雄蔵，永田虎之助來訪。関に三沢より托されし金參拾塊錢を交給す。有志者よりの寄贈品の分配有り。予亦た罐詰二個，襦袢一，真綿，紙製褲，砍肩兒等の諸品を領す。

三月十五日 晴天。午前九時起錨，九時二十分進行を始む。楽声嚙啞たり。同行の安原少佐是日より浪速艦に移る。下午風涛頗烈，不用晚餐就寝。

三月十六日 雨天。船体動揺固□心気悶絶，勉強

起坐。偽粧不暈船之状殊可笑也。

三月十七日 雨天。是日心気稍復旧，朝來用食，入夜最好見驚濤駭愕如坦途，船体動揺最烈，器皿什具乱覆碎破狼藉不可状。

三月十八日 雨天。船八重山西方の海面を過ぐ。左舷望一島不審其名。朝來天候和暖与昨日大有差異，知我行之愈南也。午前過八重山与那国兩島之間，軍艦運船參差為兩列井然乱れず，驚濤の間を截進す。壯觀莫名。午前十時過ぎ雨霽る。下午始て日光を見る。風波頗る平穩。是日より幾那丸菓三粒を毎日一度食後三十分に服用する事となり，軍医部より配付し来る。熱地に入るを以て熱症を予防するが為なり。船過台湾之東有詩。艤艫破海進三軍。豪氣先吞百越雲。台北山川那処是。驚濤千里夕陽曛。九時寝に就く。

三月十九日 晴。午前六時起床。甲板に上る。西方台湾の峰巒透迤として南北に連亘するを望む。相距る約二十里，九時第一遊撃隊本隊を超越して行く。偵察の任務を帯ぶが為なり。恒春地方と燈台附近を探查する者に似たり。五時十五分前艦の方向北々西に転ずる頃，第一遊撃吉野，浪速，秋津洲，高千穂，偵察を終へて帰來，艦列に復す。信号して曰く，燈台附近に「ジャク」三隻見ゆ。篝火数所あり。外に異状無しと。天又雨。右方濃霧の間遙に乱山を望見す。

三月二十日 積陰。北風悪浪盪船眩暈頻催。午前七時吉野，浪速二艦澎湖附近偵察の為め本隊を超越して去る。晌午前方向島嶼の点々たるを望む。下午二時十五分倉島に至り碇泊す。兵艦運船十有三隻海面を蔽ふて泊す，壯觀不可状。吉野，浪速偵察地より未だ帰らず。倉島低ふして長人屋八九十戸あり。民船十余隻此に泊するを見る。下午四時二十五分吉野，浪速，澎湖の偵察を終へて帰來。旗号を以て偵察の状況を報告す。運船千代丸後れて到らず。之を待て夜に入しも終に消息なし。佐世保にて浪速に転乗せし安原少佐本夕帰艦せり。航海中船体の動揺の為め鹿児島丸のみにて人夫六人，兵士三人死せりと云ふ。其他の船にも多少の死者ありしなるべし。

三月二十一日 陰天。早起衣裝を改め鬘嗽理髮、出艦を待つ。蓋し今日を以て水陸の全軍澎湖島を攻撃せんとすればなり。九時第一遊撃、錨を抜て先発す。吉野号座礁不動。松嶋、巖嶋、橋立三艦より野砲各一門つつを上げ、陸軍兵と合して運動する事となり。砲台占領の後には海軍砲員其備砲を利用し敵兵を砲撃すべきの訓令あり。午前十時半仏艦イスリー、セバーン二隻澎湖より来り。下午仏艦長我松嶋を来訪す。我艦長殿下亦往て之に答へらる。下午五時半千代丸入来。衆皆手を額にして相慶す。此の運船は十九日の午前九時相失したる者、無事にして来着せしは幸なり。是日全艦隊澎湖島攻撃の予定なりしも、吉野座礁の爲め明日に延期するの已むを得ざるに至れり。六時四十分吉野号始て險を出づ。四ヶ処の破損を生じ、二ヶ所は大破損にて航海自由ならずと云ふ。千里南征未だ一砲を放たずして此厄あり。痛恨の至りに堪へず。該艦將士の心事誠に設想に堪へず。

三月二十二日 晴。北風甚暴、怒濤陸兵の上岸に便ならざるを以て敢て出艦せず。風浪の沈靜するを待つ。敵と相距る僅かに一葦水(十二哩^{マイル})。且だ風濤の爲の故に曠日弥久憾已む可からず。

明日天気穏静なれば命令追撃の筈なり。満艦の貔貅天を望て叱咤し、風伯の狂暴を恨まざるなし。公務の余暇兵士所在に屯集し、擊劍を爲すもの、輪投げを爲すもの、黄海、威海の戦事を談ずるもの、碁を囲むもの、遊興に余念なく殆んど眼前敵なき者の如し。艦中の砲員を上陸せしむるの訓示有るや、此撰に当るものは欣抃踴躍眉飛色舞ふ。戦場に赴くを見る事故郷に帰るが如く、幾微の畏懼を抱く者なし。松島の艇砲を上陸せしむる爲め其の組立てを爲すに当り、砲車の尾輪見へざるより一兵士掌砲長に向ひ輪の所在を問ふ。砲長曰く、彼の輪は砲を退回する時に用ゆる者なり。明日の事只だ進撃あるのみ、退却の用意は不必要なりと。陸戦隊の撰に当りし者に向ひ、其戦友等は励まして曰く、一尺たりとも退く勿れ、汝等斃るれば我輩之に継がんと。嗚呼此の兵士等、学問道徳素養有るに非ず。何の資る所有りて此の壮烈雄大の

元氣を抱持する乎、予輩實に佩服に堪へず。平生士君子を以て自ら持する者、或は赧然たる無き能はざるべし。又曰く、今一回黄海の如き快戦を爲さば、敗死すと雖も遺恨無しと。神州の勃然として興起する所以の淵源、それ在此一兵士の言軽聴す可からず。

夜澎湖占領後民政庁に関する意見の要点を記し安原参謀に贈る。

三月二十三日 天

澎湖島への総攻撃が始まる3月23日からの日記は小型の手帳に鉛筆書きしたもので、ふだんの日記がB4版の白紙或いは罫線の入った用紙に毛筆で書いているのとは趣を異にしている。といっても、ふだんでもとくに旅先での観察記録は別にメモを取っておき、それを見ながらまとめてB4版に写しなおすという方法をとっていたようであるから、この時もまず手帳に書いていづれ従来のスタイルに書き直すつもりだったのかもしれない。しかし忙しいためかそうはしないで手帳のまま、同年5月7日までの分が「澎湖島従軍日記」、翌5月8日から9月1日までの分が別の手帳に「台湾従軍日記」と題して残っていて、いずれも国会図書館憲政資料室に保管されているのである。これらは神谷正男編『宗方小太郎文書』続(注)に収められているので、今はそれを利用してその概略を紹介する。

「澎湖島従軍日記」によると、3月23日の総攻撃でほぼ相手を制圧し、翌24日までに戦闘は終わり、宗方も伊東司令長官のお供をして24日朝には上陸した。26日の日記には「予輩の上陸するや土民総代来り保護を哀求す。語言通ぜざるを以て仁義の師たるを書して与ふ」と書いている。宗方が日記に繰り返し記しているのは、戦死者に比べて圧倒的に多い病死者についてである。この事実は既に明らかになっていることではあるが、武器の絶対的な優勢をほこる戦闘ゆえに戦死者が少なく、それに比して異地での健康管理に無防備ゆえにコレラによる死亡が目立ったという事に改めて気づかされるのである。4月1日には「民政庁へ建議書を作」り、4日には民家に「我軍之告示」を貼らせた。内容は「大日本国皇帝倡義討賊

不害順民、従今三十六島永為日本属邦云々」であった。この間下関での講和会議の情報を時折聞いていて、仮条約が17日に結ばれたことは25日の日記に記している。以後5月1日に長崎經由佐世保着、4日には大本營が置かれた京都に着き、6日に「樺山氏一行と再び台湾受取に赴くべきの内命あり」、参謀部の依頼で「台湾人民に諭すの文を作」っている。

次に「台湾従軍日記」を見ると、出発前の5月13日に「天皇陛下台湾人民に諭し玉ふの詔勅文を漢訳」し「実に無上の榮也」と感じている。出発したのは21日で、福島安正、安原等に漢口楽善堂の仲間中西正樹を加えたメンバーで先発隊として宇品から長崎經由25日に淡水港に入った。しかし「陸上の清兵一斉射撃を為す三回」により、上陸を中止した。26日になると、巡撫唐景崧が厦門に脱出したので「台湾主権者去るを以て台湾は本日十二時を以て十二発の祝砲を放ち、青色の白旗を樹て独立共和国の発表を為せり。是を以て内部の人心恟々頗る我軍に抵抗の状あり」、以後の日記には時折日本軍との銃撃戦が起こったことが記されている。その後樺山総督が6月6日に上陸すると、「総督及知事の告示文を作」り、「台湾人民軍事犯処分令を訳す」など、台湾統治最初期に必要な人心を安定させる任務についていることが分かる。台湾を離れて日本に向かうのは8月22日のことで、30日には京都に着き、31日に荒尾と会って「諸事を商量し」た。

ところで、この時期の日記に登場する人名を見て驚くのは、上海や熊本で会っている人物が多数台湾にも現れて宗方に会っていることである。日清戦争に何らかの形で参加し、台湾での植民政策にも関与しようとしている彼らの行動をもっと綿密に分析する必要を感じるものである。

(注) 原書房、昭和52(1976)年刊。

以下は、9月から12月までの動きである。9月2、3日と続けて海軍省に出頭し、4週間の帰省を申請して許されている。9日東京を發ち翌日京都有着、そこでの5日間の滞在中荒尾本人と会うだけでなく荒尾の書生3人が2度訪ねてきて「予の対清意見を敲く」事があった。20日宇土に帰り、

10月半ばまで宇土熊本間を往復し、その間に熊本で出征人慰勞会に出席、宇土でも「有志の歡迎会に臨」んだが、宇土の場合は「会する者五百余人」、花火爆竹を鳴らし生徒も五百余参加するという熱のこもったもので、「破格の扱いで天皇の謁見を受けた」郷里の英雄を町を挙げて歓待した感がある(10月13日)。10月18日に上京してからは、足繁く海軍省に出頭しており、11月13日には「清国出張に付ての訓令あり」旅費支度費を受領し、翌日には12月から3月までの手当234円を受け取り「一か年一千金の割にして一ヶ月八十三円三十銭余に当る」と記している。またしても手当てが増額された事になる。11月17日に東京を離れ、京都で荒尾、根津に会ったあと、熊本、宇土に行き、12月1日に熊本で内田行子(のちに由起子と呼び習わしたようである)と結婚式を挙げ、当地の旅館に2泊したあと行子を実家に預けて、6日長崎から上海に發った。その日の日記に「是日午後二時より喫煙を廢す」と書いている。結婚を期にしたものか、それとも別の決意によるものかは不明であるが、決断実行の人だったのである。

12月8日上海に着くと、翌日には陳列所に出かけて金嶋、那部に会い、19日には「邦服を脱し、髪を剃り、髭を断ち、清服を着」た。中国での活動開始に当たって必要ないつものながらの儀式であった。24日海軍本部への第一号の報告を作った。26年にはじめ27年に続いた報告とは別に、ここに改めて通し番号をつけての報告作成を開始し、以後作るたびに日記に番号を記している。

日誌

明治二十八年九月一日～十二月末日迄

西京。東京。熊本。東京。熊本。上海。

九月一日 陰。京都滞在。午前田鍋安之助、白岩龍平来訪。下午二時大川愛次郎と田、白二氏に分れ停車場に至り、二時五十分上車東上。高道梅雄亦来り投ず。

九月二日 晴。午前九時新橋に達す。上車神田連雀町十八番地佐々木方に投宿す。下午海軍省に出頭、河原二局長、伊集院一局長、黒井、井

原，出羽等に面し，三時帰る。夜鳥居，齊藤，亀井英三郎，木下某等来訪，十一時帰る。熊谷直亮の信到る。

九月三日 晴。午前九時海軍省に出頭，四週間の帰省を乞ふ，許さる。下午二時帰る。熊谷，高橋謙，井手三郎等に発信。高橋，井手には海軍の為に支那に到り尽力せん事を勧む。晡時金嶋，平野六郎等前後來談。夜亀井英三郎。鳥居，齊藤，川野敬太郎等を招て芝浦見晴らに遊び，月を賞して飲む。十一時帰る。齊藤員安来り宿す。

九月四日 晴。朝齊藤と出て熊谷直亮を根津神泉亭に訪ふ，在らず。去て鳥居を敲き中餐し，古莊嘉門翁留守宅並に川野敬太郎を訪ふ。三時川野，齊藤と出て佐々氏の留守宅を訪問，五時帰る。晩三沢信一，鳥居，古嶋一雄来訪。三沢宿す。沢村繁太郎の信台湾より至る。

九月五日 晴。鳥居，青木喬，高道梅雄等来談。午前鳥居と根津一氏を銀座に訪ひ寛談。時を移し下午麹町の肥後倶楽部に至り齊藤，亀井，鳥居，池田，川野等と会し小飲。夜に入りて帰る。

九月六日 晴。午前八時三沢信一来訪。共に出て川上中将を訪ひ，台湾通商特許の件に付き商量する所あり。晌午辞帰。荒尾精，田鍋安之助，白岩龍平三氏に発信し，川上氏と談話の要領を報じ処する所あらしむ。是日台湾沢村，井深，前田三氏並に佐々友房，宮嶋大八諸氏に発信。頓野廣太郎氏来訪。熊谷来談。井手三郎の信熊本より到る。台湾総督府通訳官一同に発信す。夜三沢信一，金嶋文四郎来談。

九月七日 晴天。早朝北御門松二郎来訪。宮嶋大八氏の信到る。下午宮嶋大八，中川義弥前後來訪，飲而晩に至り宮嶋辞帰。夜雨。去年今夜予田鍋の寓を出て磯長の処に至り，十二時を以て潜に英船アンゼルス号に上り，辛ふして日本に脱帰するを得たり。鳥居来談，九時帰る。

九月八日 風雨。朝齊藤員安の信到る。午前山田珠一に発信。金二十五円を京朝迄送致し置かん事を托す。下午齊藤員安来る。共に出て亀井英三郎を誘ひ岐部中将を赤坂氷川町二十八番地に訪ふ。大島新亦来会。二氏盛京の各地に転戦し

新たに帰来せし者なり。七時齊藤，亀井と帰る。中川義弥来り宿す。

九月九日 晴天。台湾台南県附出田，山□，廣田等に書籍を買送す。其の依囑に応ずるなり。並に佐野，出田列に発信之を報ず。根津一，齊藤員安，外諸氏に発信，帰県を報ず。午前隠岐嘉雄，青木喬，北御門松来訪，中食後去る。熊谷直亮来訪。之に孔方兄を分与す。晩齊藤，河野，鳥居，古嶋列来訪小飲。八時半出发新橋に至り，九時五十分の汽車に上り京朝に向ふ。以上の諸氏及び青木，三澤，工藤，姫田，平野，林政文，亀井列来り送る。

九月十日 晴天。下午三時京都に達す。三条小川方に投宿す。晩食後上車，荒尾精を若王寺に訪ふ。小飲後田鍋安之助，白岩龍平を敲き終に宿す。

九月十一日 小雨。午前帰寓。家大人並に井手三郎に発信す。下午荒尾養成中の書生三人来訪。夜田鍋，白岩，金嶋三人来訪。鴨涯襟を開て談笑，夜更に至る。

九月十二日 陰，小雨。下午白岩，田鍋来談。鶏を割て飲む。澤村友義来談。井手三郎，高橋謙の信到る。快談十時に至り田鍋，白岩帰る。山田珠一氏より電報為替二十五円を送り来る。

九月十三日 晴天。午前八時田鍋，白岩，伊東来る。共に下加茂に遊ぶ。鴨水源を此に発す。林泉清幽社殿森嚴，又た去て上加茂神社に至る。老松天に参はり，泉声深々別に乾坤を開けり。社畔の堺屋に投じ鴨水の鮮を割き飲む。盤桓半日下午三時出て大徳寺に至る。織田右府之菩提所なり。境地濶大邃幽比なく，青松万株道を挟み翠苔地に満つ。賞遊時を移し，転じて平野神社を一拝し，北野菅公の祠に謁す。堂宇莊嚴，梅樹庭に満つ。神霊の在す所覚へず人をして襟を正さしむ。薄暮途にして田鍋，白岩等に別れ上車帰京。夜白岩，田鍋を訪ひ終に宿す。佐々友房氏熊本よりの信到る。

九月十四日 晴。田鍋の処に中食し，共に出て荒尾精を訪ひ小談。出て若王子の延年台に遊び，転じて南禅寺，知恩院を一覧し帰る。晩田鍋，白岩，金嶋三子と小飲。荒尾氏の書生三人来り予の対清意見を敲く。十一時帰る。山田珠一氏

よりの電報為替二十五円を郵便局より受取る。

九月十五日 晴。秋気肌を侵す。下午田鍋、白岩、荒尾、金嶋、那部諸氏来り、別を叙す。三時半寓を出て上車停車場に至り、四時二十分の車に乗ず。田鍋、白岩、金嶋、那部諸氏来り送る。

九月十六日 晴。午前九時広島に達し、大手町三丁目中野萬兵衛方に投ず。想起す、去年今日予上海より此地に来り、田鍋、井手諸友と天神町の客棧に投ず。恰も平壤陥落の日に当り、千門の旭旗氣象万千歎声如湧。今日偶々此地に来り、追想往事感慨四集。知らず、明年此日定て如何。高橋謙に打電し門司古賀文に会合せん事を約す。下午小雨。山口武洪氏を訪ひ、五時帰る。在台湾中西正樹及び佐賀西村忠四郎に発信す。

九月十七日 晴天。中餐後広島の旅寓を發し、宇品に至り商船会社の汽船太田川丸に投ず。四時開船。

九月十八日 陰。午前五時門司に達す。古賀文客棧に投ず。八時九州鉄道に乗じ四時十分池田駅に着す。古城貞吉に遡ゴウす。上車東唐人町東肥合資会社に至る。井手、緒方、藤森三氏予を迎ふるが為め春日停車場に赴けりと云ふ。少焉、井手、緒方帰来。置酒清談興味殊に深し。矢嶋篤政、吉田教蔵、古川権九郎、佐々友房諸氏来訪さる。古川は明日巡查を引率し台湾に赴くと云ふ。

九月十九日 陰。早朝井手、緒方と出て池田駅に至り、古川の台湾行を送る。旧知諸君に面す。帰途津田静一氏を訪ふ。紫藤寛治氏在焉。少談辞帰。佐々氏を研屋支店を訪ふ、在らず。晚井手、緒方と酒樓に至り小飲。夜深水亀齡、村井同吉来訪。

九月二十日 晴。午前十一時宇土に帰る。家大人に謁す。両姉叔母と小宴を開く。安原金次、上海速水一孔、篠原義雄の信来り居れり。安原少佐に覆信す。夜米原繁蔵、矢嶋篤宜、篠原由誠列来訪。

九月二十一日 小雨。午前郷里を廻訪す。林田晴義氏来訪。東京海軍省小笠原、白須、寺嶋、太田、北村、関口等に発信。外に高橋謙に発信

す。夜八時二十一分乗汽車至熊本。九月二十二日晴。午前松田満雄来訪。

九月二十三日 晴。朝佐々翁の信到る。直に出て之を訪ふ。静養軒の閑室に至り談ず。中餐後辞し帰る。途中井手、緒方両氏に会し相携て鎮西館に至り、浅山知定、山田珠一諸氏を敲く。夜沼一郎、田邊辰雄来訪。内藤儀十郎氏来訪。

九月二十四日 雨。午前井手と出て済々巒に至り、岡本源次、志水元吾、池部源太郎等を訪ふ。小談後井氏と広町に至り鰻飯を吃す。下午葉室湛純を九州学院に敲く。二時帰る。

九月二十五日 雨天。晡時井手と出て葉室の寓に至り岡本、永原等と会談し、十時帰る。

九月二十六日 雨天。豊前高橋謙の信到る。夜井手氏と旧壮年会の小集に赴く。通町の鶏飯屋に会す。来会する者浅山、志水、右田喜七、秋山儀、永原虎、葉室、松田満、山田珠、井手及び予なり。快談十時に至りて帰る。

九月二十七日 雨。白岩龍平、高橋謙の信到る。夕陽緒方、井手と出て洋饌を食ふ。夜両氏と佐々氏を訪ふ、在らず。内藤儀十郎氏に抵る、亦た在らず。浅山氏を訪ひ談話、移時而帰る。

九月二十八日 雨。東京安原少佐、営口木下賢良、豊前高橋謙に発信す。

九月二十九日 微雨。午前十時鎮西館の出征人慰勞会に臨む。佐々、木村、内藤、岡本、志水、山田、秋山諸氏以下済々校、九州学院、同窓会、旧壮年会員会する者無慮七八百人。主賓の演説等あり、予も亦た清国に於ける履歴を演説す。四時散ず。佐々氏に抵り、小談帰る。七時春日停車場に深水十八の帰るを迎へ、緒方と同伴宇土に帰る。徳田、白須、西村忠四郎、高橋謙、安原少佐の信到る。

九月三十日 晩雷雨。朝林田清太郎を訪ひ、細川子爵の邸に伺候し、旧主人に謁す。伊藤、宗像、太田等の諸氏と小談。親戚を迎訪して帰る。鹿児島別府真吉氏の信到る。東京安原少佐、佐伯列官に発信し、帰京延期を追願す。弟亀雄の信到る、直に之に復す。夜太田重友、玉崎央次等前後来談。

十月一日 微雨。一番汽車にて熊本に帰る。午前十一時井手氏と汽車にて羽犬塚に至り下車。腕

車を駆りて船小屋鉾泉場に到り旅館丸瀬方に投ず。

十月二日 晴。是日より毎朝五時半入浴、矢部川の長堤を歩し、津崎村八幡祠に散歩す。

十月三日 晴。河北純三郎と向野堅一來る。

十月四日 晴。京都白岩、田鍋に発信。去年此日予広島大本營に於て天皇陛下に拝謁す。十月五日高橋謙の信到る。

十月六日 晴。毎日井手氏と詩を賦し歌を詠じ、閑適甚し。

十月七日 晴。下午緒方二三氏来る。

十月八日 晴。午前十時船小屋丸せ方を発し、井手、緒方二氏と羽犬塚より上車熊本に帰る。夜尾越、米原、松倉列來訪。

十月九日 晴。朝井手氏と出て佐々翁を訪ひ小談、帰る。是日緒方二三氏当地を發し清国に赴く。杭州載愷君に添書す。白岩龍平、安原少佐の信到る。海軍副官部より履歷書経歴書差出すべしとの事に付き、直に写送す。台湾佐野直喜の信到る。夜井手、藤森、松田、深水諸氏と松平知事の招邀に赴く。佐々翁、木村翁亦來会。九時辞歸。佐々氏の寓に抵く、小談帰る。

十月十日 晴。台湾前田、井深、中西、沢村、山内、中嶋列に発信す。外に佐野直喜に送書し、山本生の事を托す。御船片山哲哉翁より鮎魚醬一壺を贈り来る。

十月十一日 晴。午後熊本より宇土に帰る。夜矢嶋、宮原来訪。田鍋安之助京都よりの信到る。

十月十二日 晴。安原海軍少佐の信到る。夜矢嶋、宮原、米原、玉嶋、浅井と宇土郊外に散歩。鶴城学館に至り談話。時を移して帰る。

十月十三日 晴。朝上羽矢直來訪。午前十時宇土町有志の歓迎会に臨む。殊に予の為に開かれたるものなり。川野邦江氏委員長となり、岡村善三郎、村田権蔵、林田清太郎、外八委員となり、会する者五百余人。委員長以下祝文、演説あり。予亦た一言之に答ふ。煙火二発を打揚げ爆竹数万を放つ。女学校生徒の唱歌あり。尋常学校、鶴城学館生徒五百余人來会。細川公の幼君亦來臨せられ金三千疋を賜はる。又た有志一同より、破格拜天顏光荣万古伝、歡迎宗方小太郎君の二流大旗を贈らる。式終りて冷酒の饗あ

り。下午五丁目寺院の第二次会に臨む。散会后林田、上羽、上羽亀、川野廉、米原、井門、玉崎、堤尚彦、太田、尾越、外諸氏と浅井寅喜宅に会し、新を談じ旧を話し、九時散会す。沼市郎外両三名來訪。護城綱雄、松田満雄の信到る。沼氏留宿。

十月十四日 午後雨。二番汽車にて米原と共に熊本に出つ。午前河北純三郎來訪。晌午井手、護城、山田珠一、秋山儀を誘ひ鶏を割て飲む。下午上車帰る。今村平蔵の為に台湾木下新三郎、伊集院兼良、古莊韜三子への添書を作り、同人身上の事を托す。松田満雄來り宿す。葉室來談。

十月十五日 陰。二番汽車にて上京の途に上る。井手、松田同行たり。午後五時門司に達し、石田屋に投ず。夜八時汽船大龍丸に乗じ上等室を占む。八時半開船。

十月十六日 晴。午前十時尾の道に着し濱吉客棧に小憩。午後一時二十分山陽鉄道より出發、八時神戸に達し、九時四十分官鉄に換（この後一行分不明）方に投ず。

十月十七日 晴。午後一時半梅田停車場にて上車東京に向ふ。

十月十八日 陰。午前十時新橋に着す。富士見町一丁目松葉亭に投宿す。下午一時井手氏と海軍省に出頭し、河原第二局長に面す。晚島田数雄、鳥居赫雄、田鍋安之助、三沢信一來訪。

十月十九日 晴。午前井手、松田二氏と島田数雄を訪ひ、去て根津一氏を金六町に敲き、下午二時帰る。夜島田、鳥居來訪。小飲快談、深更に至る。

十月二十日 晴。日曜日。朝工藤常三郎、小濱為五郎、田鍋安之助、平野六郎、上原嘉蔵等來訪、肉を割て飲む。晚靖国神社に散歩す。白岩龍平京朝よりの信到る。

十月二十一日 晴。十時半井手氏と海軍省に出頭す。午時芝桜川町風柳館に至り、田鍋安之助、高原鉄太郎諸氏に面す。高原病を得て此に留養する者なり。陸軍大尉佐久間浩來談。北御門松二、青木喬、三澤諸氏亦会す。五時帰る。井手と鳥居赫雄を牛込矢來町の寓居に敲く。堤敬太郎來会。九時半帰る。齊藤員安、平岩、齊藤

久，山田良政等来訪せりと云ふ。
十月二十二日 雨天。午前井手氏と海軍省に出頭す。下午四時桜川町風柳館に至る。晚乙未会改革の会議を為す。会する者井手，田鍋，小濱，長谷川，平野，三沢，青木，川村，北御門，渡邊，中西重，高橋正，隠岐，甲斐，外数名なり。終りて高原鉄太郎等と談じ，十時帰る。
十月二十三日 雨。営口金子新太郎に発信。家大人に金二十円を郵送す。午前島田数雄，狩野直喜を訪ひ，（この後1行分不明）富士見楼より使を□せ予を招く，即ち赴く。田鍋氏在焉。酒を酌んで閑談。十時に至り田鍋を誘て帰る。鳥居赫雄，島田数雄在焉。
十月二十四日 雨。弟亀雄来る。午前小濱為五郎来談。下午海軍省に出頭す。四時帰る。夜亀井英三郎来訪。山田珠一亦来る，今日来着せりと云ふ。家大人の信到る。
十月二十五日 晴天。朝安藤久三郎来訪。高原鉄太郎の信到る。矢野俊彦，平野六郎，甲斐靖，渡辺正雄，中西重太郎，吉崎俊明，小濱為五郎等来訪。下午三時小濱，北御門と上車，日暮里妙隆寺に至り齊藤員安を訪ふ。服部正魁亦来る。飲談八時に至り，小濱等と共に帰る。佐々友房氏の信熊本より到る。
十月二十六日 晴天。朝山田珠一來訪。共に出て長岡護美公を浜町に候す，不在。田鍋等と共に帰る。下午中川義弥来り別を告ぐ。今夕台湾に赴く者なり。齊藤員安，狩野直喜，島田数雄等来訪。齊藤宿す。林立夫，吉見某来訪。
十月二十七日 陰。午前鳥居，小濱，別府三氏前後来談。下午佐々氏留守宅を訪問す。齊藤，井手，松田，鳥居と岐部熊雄を氷川町に訪ふ，在らず。帰途宮嶋大八を敲く，亦た在らず。遂に亀井英三郎に抵る，在らず帰る。
十月二十八日 晴。午前井手と海軍省に出頭す。下午二時井子と小濱為五郎，別府氏等を愛岩下町一丁目二番齊藤方に訪ふ。晩食後辞す。途中白須貞を敲き小談。前原一誠氏の菊画を請ふて帰る。林立夫の信到る。
十月二十九日 晴。午前佐久間浩を今川小路に訪ふ，在らず。下午二時井手と田鍋，高原諸氏を芝桜川町の寓居に敲く。晩餐の饗を受く。高橋

謙来る。本日来着せりと云ふ。別府氏の信到る。
十月三十日 雨天。午前根津一氏来り別を告ぐ。明日より京都に移寓すと云ふ。井氏と海軍省に出頭す。夜上車，雨を衝て田鍋を訪ひ，高原等と談じ終に宿す。
十月三十一日 晴。朝田鍋氏と三田松坂町八番に出羽重遠を訪ひ，江商合資会社の為に台湾への添書を依頼す。田鍋の処にて佐久間，鳥居等と談じ，下午五時宮嶋大八の招邀に赴く。井手，松田来会。閑談十時に至り帰る。白岩龍平神戸より信到る。新開港場祝宴の為め清国に赴くと云ふ。山田珠一より佐々翁の電報を転交し来る。本日熊本を發せりと云ふ。平野，甲斐等本日上程台湾に赴任す。
十一月初一日 晴天。午前廣瀬貞治来訪。井手と海軍省に出頭。沢村繁太郎来る，昨日台湾より帰来せりと云ふ。下午二時帰る。宮嶋大八来り居れり。家大人の信及び白岩龍平，小濱為五郎の信到る。白岩龍平に長崎に発信す。夜山田珠一來り訪ふ。
十一月初二日 晴天。午前井手と小濱為五郎を訪ふ。中食後辞帰。晩岐部熊雄，尾上正連，齊藤員安，鳥居赫雄等来談。台湾瀧川少佐，黒井大尉に寄するの信を小濱為に托す。明日より台湾に赴任するものなり。齊藤宿す。
十一月三日 雨天。朝北村久太郎来訪。晩青木喬来り別を告ぐ。明日より台湾に赴任すと云ふ。
十一月四日 雨天。午前井手氏と海軍省に出頭す。安原少佐と協議する所あり。下午二時帰る。十一月より十二月迄の手当金八十円を受取る。晩食後井，松二子と佐々友房氏を四谷箆笥町の寓に訪ふ，在らず。待之多時終に帰らず。八時帰る。沢村，鳥居に発信す。高原鉄太郎の信到る。
十一月五日 晴天。午前狩野直喜，高橋謙二氏来訪。晌午佐々翁及び山田珠一來談。四時井手，松田，高橋三氏と岐部熊雄を四谷に訪ふ。鳥居赫雄来会。十時月を踏で帰る。
十一月六日 晴天。早朝井手，松田二氏と佐々氏を四谷に訪ふ。小談帰る。午前宮嶋大八，山田珠一，澤村繁太郎，白須貞，安藤久五郎等来

訪。山田は本日収監中の安達謙蔵、国友重章、外同県人慰問の爲め広島に向ふ。沢村、白須を留て中食す。

近衛師団長北白川能久親王殿下、十月二十八日台湾台南の陣中に薨じ玉ふ。昨五日を以て喪を發せらる。想起す、本年六月予近衛師団と共に台湾の三貂湾より上陸し、沿道の敵兵を攘ひ、大雨三貂大嶺を越へ基隆攻撃の日に至る迄、師団司令部に随從して常に殿下に□足す。音容在耳目之間、追念当日不堪病悼悲哀之至、嗟々。

夜田野橋治来訪問興亜之大計、書生中の有寄骨者也。橋本齋次郎、田鍋安之助亦来る。快談移時、田鍋留宿。

十一月七日 晴天。朝井手と海軍省に出頭す。夜亀井英三郎を訪ふ、在らず。帰途書房に就き雑書二三を得て帰る。

十一月八日 晴。午前中村某来り、長岡公の命にて来る十八日夜後倶楽部に招邀の事を伝ふ。高橋謙来訪。井手、高橋と出で芝に至り、高原を誘ひ上車泉岳寺に至り義士の墳に展じ、帰途井深彦三郎の留守宅を一訪し、高原の処に帰り、高橋、田鍋等と会食し、八時高橋の寓東奥館に至り少談、九時帰る。服部、鳥居二氏在り。

十一月九日 晴天。猪田正吉の祭の詩文各一篇を作る。正吉は我党の後進にして乙未征清の後、服装を変じて適地に入り終に敵手に斃し者なり。高橋謙、尾上正連の爲に台湾古莊嘉門氏に発信す。午前佐々翁来訪。下午田鍋、宮嶋二氏来訪。夜田野橋治、市原源次郎二生来訪。夜九時五十分松田満雄氏台湾行の事決定し、出発帰島の途に上る。行て之を新橋に送る。風柳館に至り猪田生を祭の詩文を三澤信一に托し、久留米に転送せしむ。高橋謙亦た此夕を以て起程台湾に向ふ（寓居九月十八日より本日までの計算を終る）。

十一月十日 晴天。午前九時井手氏と出で宮嶋大八氏宅にて田鍋と会し、赤坂水川町に勝安芳翁を訪ふ。翁今年七十三、旧幕の老臣にして聖朝の柱石なり。老病を以て床上に在り、其維新前後の経歴より当世の得失人物の高下を評論せらる。奇警敏達事多く人の意表に出つ。予二十六

年来朝野の名士を見る多し。而して学識兼優、老て益す壯なる者此翁を推して第一とす。只だ徳に於ては我之を知らざるなり。中餐を饗せらる。下午一時辞し帰る。井手と直に肥後倶楽部に至る。長岡公以下米田侍従、木下廣次、濱田玄達、亀井英三郎、竹田寧諸氏臨席。安場翁及び佐々氏は病を以て来会せず。此会蓋し予等の清国行を饒せらるる者に係はる。下午五時（この後半行分不明）を告ぐ。明日より台湾に赴任する者なり。亀井亦来る。七時出で橋本中尉を平川町に訪ひ寛談、時を移して帰る。田鍋、宮嶋来訪。

十一月十一日 晴天。午前堤敬太郎来る。共に会食す。刀剣商飯田町中坂の肥後屋主人来り、銀装刀を売る。高田友行の作なり。代価二十円値賤にして品高し。予大に之を愛す。下午井手と出で芝に至り、尾上、隈本二子を訪ふ、在らず。去て別府真吉氏を敲く、在らず。刺を留めて帰る。氏と本夜起程台湾に赴く者なり。夜山田珠一來訪。本日広島より帰来せし者なり。是日前近衛師団長北白川大将宮殿下の国葬あり。

十一月十二日 陰天。朝阿部充家来訪。九時半海軍省に出頭す。中食後帰る。佐々治、別府真吉両氏の信到る。夜井手氏と鳥居赫雄を訪ふ、在らず。堤敬太郎宅に到る。鳥居来会談話、十時に至り帰る。

十一月十三日 雨天。九時井子と海軍省に出頭す。旅費九十円、支度費八十円受取る。伊東軍令部長より清国出張に付ての訓令あり。沢村、齊藤の信到る。午後三時帰る。

十一月十四日 陰天、風大。朝井手函招に赴き高見翁の病を問ふ。午前宮嶋来、共に中食す。下午海軍省に出頭し、十二月一日より二十九年三月末迄の手当金二百三十四円を受取る。一ヶ年一千金の割にして一ヶ月八十三円三十銭余に当る。十一月分の俸給以下は白須貞に受取方を依頼し郷里に転送せん事を托す。三時半帰る。四時半神楽坂上温泉に至り亀井英三郎、山田珠一、齊藤、鳥居、堤、狩野、林一蔵、池田末諸氏の招邀に赴く。予の爲に祖道するなり。八時散帰す。

十一月十五日 晴天。午前佐々友房、橋本齋次

郎、阿部充家、岐部熊雄、大嶋新、沢村、林立夫等諸氏に発信告别す。田鍋来訪。下午二時井手帰来。晚井手と宮嶋大八を訪ふ、在らず帰る。夜円先生、片山哲哉の添書を携へ来り訪ふ。本田清人亦た亀井英三郎の添書を持し来り訪ふ。夜鳥居赫雄来り、予等の清国行を送るの七古一篇を贈る。予直に其韻に和す。

十一月十六日 晴天。早朝佐々友房氏を訪ひ告别す。午前海軍省に出頭し、第二局員に辞別す。去て長岡公を訪ふ、在らず。佐々氏を国民協会事務所に訪ふ。同氏の案内にて伊勢勤に至り小飲。柏田盛文来会。二時帰る。前田彪、堀川望、楠内栄等来訪。前田、堀川は病に罹り、台湾より帰来せし者なり。楠内は故楠内友次郎の家弟なり。五時芝に至り田鍋安之助、三沢信一を訪ひ告别す。佃信夫在り。高原鉄太郎より上海にて織物買送の依頼を受け金百円を預る。七時帰る。澤村繁太郎来訪。齊藤員安来り宿す。

十一月十七日 晴天。早朝品川子爵を訪ふ。去て物品数点を購ふ。午前鳥居、堤、楠内栄其他二三子来訪。午後前田彪、山田珠一、高原鉄太郎、堀川、田鍋安之助、佐々友房諸氏前後来訪。晚諸氏を留めて会食す。夜狩野、池田、林、亀井、齊藤諸氏来会。九時五十分新橋にて上車。以上の諸氏及び三沢、向野、廣瀬貞治、宮嶋、小笠原貞太郎来り送る。佐々友房氏より送別の詩一首及び写真一葉を贈り来る。

十一月十八日 晴天。詰朝浜松を過ぐ。一路江山秋色充分、転だ旅情を慰む。下午三時半京都に達す。下京津小路通北小路平井氏に投宿す。宮嶋大八、安原少佐に発信す。安原は前田彪の身上を依頼す。夜佐々木、菊地両生及び清童姜恒甲来談。

十一月十九日 晴。下午井手と若王子に至り、荒尾精、根津乾を訪ひ小談、帰る。夜中嶋裁之及び佐々木、菊地両生来談。

十一月二十日 晴天。下午井手、中嶋、姜三氏と荒尾精を若王子に訪ふ。田鍋在焉。今朝来着せりと云ふ。晡時荒尾の処に飲む。根津一來会。晚根津の誘にて南禅寺町の旅亭に会食す。荒尾亦来る。快談十時に至りて散ず。是日紅葉を若王子に観る。東京佐々友房、広島中嶋真雄に発

信す。

十一月二十一日 雨。午前佐々木徳成、秋吉、田鍋、中嶋裁之、姜恒甲以下十数人来る。午時共に会食す。下午二時五十分京都七条より上車。以上の諸氏来り送る。四時半大坂に達す。中の島岡田方に投宿す。

十一月二十二日 晴。午前井手子と上車、荒尾精を天神橋辺劍客牧山震太郎方に訪ふ。主人名刀を蔵する極て多し。談話午時に至て帰る。下午二時行李を戒む沢本良臣、三谷末次郎来訪。岡田方を出て安治川岸に至り汽船宮川丸の上等室に乗ず。門司に抵る、四円五銭なり。三時開船。

十一月二十三日 晴。船山陽、四国の海峡を過ぐ。兩岸の秋色名状す可からず。尾道にて佐伯海軍大将来り乗ず、互に奇遇を叙す。十二時船呉軍港に着す。佐伯氏上陸す。一時広島に達す。上陸兵站司令部に至り永田陸軍中佐を訪ふ。氏は宇品兵站部の司令官たり。松田満雄、古莊弘二子此地に在るを聞き覓むれども終に相見るを得ず。二子は本日出口の海城丸にて台湾に赴任するものなり。船宇品を発し未だ厳島に至らざるに、器機損（この後半行分不明）夜十一時に至りて始て開く。

十一月二十四日 晴。午前十一時門司に達す。直に上陸停車場に至り、十二時の汽車に投ず。午後八時半春日駅に達す。東肥合資会社に帰る。平山氏在焉。長崎鈴木行雄に発信す。

十一月二十五日 晴天。午後井手と鎮西館に至り、中津静一郎、右田喜七氏等に面し、去て葉室湛純を九州学院に敲き、晚同氏の寓所に至り晚食す。六時内藤儀十郎氏を敲く、在らず。上車帰寓。内藤氏及び奥村在焉。藤森茂一郎来る。

十一月二十六日 晴。終日在寓。下午深水十八子上海より帰来。晚宇土に帰る。林田道利来訪。

十一月二十七日 終日在家。宮原義雄来訪。夜熊本に帰る。井手在焉。

十一月二十八日 晴。午前鎮西館に至る。秋山等に面す。下午井芹経平、藤本友世、米原繁蔵来訪。晚以上諸氏を誘て鰻飯を食ふ。夜諸生数人來訪。

十一月二十九日 陰。下午佐々干城氏来訪。家大人、奥村又来らる。下午四時鎮西館に至り、同館の寄附金七十円の中三十円を納む。五時同志と会飲す。右田喜七、本田某、米原、浅山知定、葉室、毛利篤、森亦八、高木正雄等来会。快談九時に至り散ず。佐々干城氏来訪。

十一月三十日 晴。早朝井手と新屋敷町に至り、木村弦雄翁を訪ひ小談帰る。是日台湾松本、山内、草場、井深、古莊韜、佐野への添書を作る。諸生の囑に應ずるなり。

十二月一日 晴。午前内藤儀十郎氏と共に上車、託摩郡大江村に至り内田友行氏を訪ふ。酒饌を饗せらる。下午六時上林町五松庵に至り内田氏の女行子と結婚の礼を挙ぐ。十一時内藤儀十郎氏の帯道にて行女と供に丸小旅館に至り宿す。

十二月二日 陰。旅館滞在。下午深水、井手来訪。夜井手と岡本、葉室等を訪ひ小談、旅館に帰る。

十二月三日 雨。午前八府内田氏に至り別を告ぐ。十時内田氏の母公来館。予の行を送り、行子を携へ帰らる。十二時合資会社に帰り、井手と藤森、深水等と小飲す。下午二時汽車にて帰郷。夜細川公、米原、林田清太郎、玉崎、浅井、川野邦江氏等を廻訪し別を告ぐ。十時宮原義雄、矢嶋篤宜来談、十一時半帰る。佐々友房氏に発信、完婚の事を報ず。

十二月四日 雨天。午前八時結束、別を家大人に告げ上車三角港に向ふ。林田晴義翁、宮原義雄来り別を告ぐ。城の浦より新道を取り住吉海浜に出つ。是日煙雨迷濛光景凄然離情殊に切なり。右方の海中夫婦石あり。歌一首を得たり。志ら奴火の宇土の沖なるめをと石波の枕に千代契るかも。十二時前三角に達し油屋に投宿す。下午安富喬氏来訪。酒饌を設けて予の行を饒す。夜十時汽船常盤丸入口。井手三郎在焉。油屋を出て之に搭ず。十一時開船。

十二月五日 陰。午前五時船長崎に着す。直に上岸、本博多町土佐屋に投宿す。朝食後出て郵船会社に至り、竹野虎雄を訪ひ荷物を受取る。午前鈴木行雄来談。晚広島中嶋真雄に発信す。秋山儀、中津静一郎、右田喜七、永原、津野列に発信。

十二月六日 晴。台湾瀧川少佐に発信。午前鈴木行雄来談。海軍司令部に発信、長崎発を報ず。下午六時井手氏と神戸丸に搭じ中等室を占む。上海に至る十二円半也。八時二十筆を泚して之を記せざるべからず。

十二月七日 陰。

十二月八日 雨行。黎明浙東の諸島を望む。午後零時二十分吳淞口に達す。中食後小汽船に移乗し、三時上海に着す。高道竹雄氏来り迎ふ。熊本屋に投宿す。荒井、古谷等来訪。

十二月九日 陰。下午領事館に至り珍田領事に面す。去て陳列所に至り金島、那部等を訪ふ。夜荒井来談。

十二月十日 陰。午前永原来訪。下午正金銀行に至り金二百五十円と外に百円を受取る。晚有働格四郎宜昌より帰り来り投ず。

十二月十一日 晴。家大人、内田友行、内藤儀十郎、高原鉄太郎、佐々木高行諸氏並に妻行に寄するの信を作り之を發す。明朝の神戸丸より郵寄する者なり。佐々木氏には黒儒子四本白縞緬一疋並に残金二十九円を送還す。金嶋文四郎予が為に周旋する所あり。(この後1行分不明)

十二月十二日 晴天。夜井手と領事館に至り速水一孔、檜原陳政に面す。

十二月十三日 陰。曹中徳に托し清服其他旅行用物件を購ふ。

十二月十四日 積陰。午前八時井手を送りて相模丸に至る。九時開船、芝罘に赴く者なり。横田三郎に寄するの信を托す。下午三時荒井甲子之助、梅津某の招邀に赴く。夜帰る。

十二月十五日 晴。是日佐々友房、鳥居赫雄、齊藤、亀井、狩野、堤列、漢口白岩龍平、熊本内田友行氏及び行に寄するの信を認む。以上の諸子には各写真を封送す。晚金嶋、荒井を留めて飲む。

十二月十六日 晴午前吉崎来訪。下午長門丸入口。深水十八の信到る。中西、原城等帰京せりと云ふ。松平知事、安楽書記官に対する書状を認む。夜金嶋来談。

十二月十七日 晴天。晚白岩龍平来訪。本日漢口より帰来せりと云ふ。

十二月十八日 晴。是日午前長門丸出口。有働格

四郎帰朝す。之に松平、安楽、内田諸氏に致すの信及び行に贈るの「ケントン」並に書状（第二号）を托す。佐々、鳥居、深水三氏宛ての信は郵便に附したり。午時白岩、荒井来訪。晚三輪高三郎天津芝罘より帰来、井手三郎の信及び昨年開戦後芝罘領事館に預け置きたる行李を送り来る。夜白岩来談。

十二月十九日 晴天。此朝邦服を脱し、髪を剃り髻を断ち清服を着す。白岩来訪。晚白岩、金嶋来話。八時白子と散歩。

十二月二十日 陰。午前白岩と英界に散歩。白香山詩集、霞客遊記等の書を購入。午時帰る。夜八時三馬路横街に至り蘇州王氏に会す。是日午後沈文藻来談。

十二月二十一日 晴天。午前白岩と佐藤に至り写真す。下午白岩来訪。七時半出て三馬路に至り王氏の約に赴く。九時帰る。

十二月二十二日 晴天。夜三澤信一突然来訪、本日津川謙充列四人と来着せりと云ふ。夜矢嶋、白岩、三澤二人と飲む。是日郵船来る、無家信。

十二月二十三日 晴。午前実相寺貞彦、白岩龍平来訪。下午出て津川列を東和洋行に訪ふ、小談。白岩の宿に至る。四時帰る。夜東和に至り、津川、三沢列一行の四川行を送る。

十二月二十四日 半晴。本部へ報告を作る（第一号）。晚郵便局に至り河原氏宛の報告を附郵す。夜内田友行氏の返書至る。外に新聞数葉来着。山田珠一、前田彪に東京に発信す。

十二月二十五日 陰天。心気不好。下午白岩来談。三時白岩と出て沈文藻を訪ふ、在らず帰る。白子を留めて晩食す。荒井、梅津来談。

十二月二十六日 陰。沈文藻来る。留て中食す。津川の贈銀十弗を与ふ。下午宇土川野邦江、同廉、岡村善三郎、村田権蔵、林田清、井門亨、栗崎達也。吉道徳重、堤尚彦、上羽亀太郎、矢嶋篤宜、田鍋忠雄、浅井寅喜、尾越辰雄、玉崎、宮原、米原、太田等諸氏に寄するの信及び熊本深水、松倉列、東京佐々友房氏に致すの信を作る。新年を待て之を發せんとす。夜白岩来談。

十二月二十七日 晴。終日在寓、詩稿を整理す。

井手三郎芝罘よりの信到る。下午五時半白岩と沈文藻の招邀に赴く、冬至節を以てなり。八時帰る。白岩来り宿す。蘇州姚芙初の信到る。

十二月二十八日 晴。終日在家。本月八日より昨七日迄の宿料其他一切を計算し了る。夜木公来。

十二月二十九日 晴。午前白岩来訪。晌午共に出て郵船を待つ、到らず。速水、加藤等を公館に訪ひ小談、晡時帰る。漢口官星塔、李泉溪の信到る。夜井手素行に芝罘に復するの書及び高木正雄に致すの信並に内藤儀十郎氏に与ふる書信を作る。那部来談。

十二月三十日 晴。下午郵船入港。佐々木高行氏及び深水、松倉列、有働格四郎並に内田友行氏の信、外妻行よりの信三通来着。夜家信を写して深更に至る。荒井、梅田来訪。

十二月三十一日 晴天。是日正午山城丸出口。熊本、東京行の信十六通を投郵す（内田氏行信第三号）。午後白岩来話、暮時帰る。是日乙未除夜たり。回顧すれば去年今夜広島大本営下に在り、井手、鳥居、中嶋等の諸友と鳥居町の明月亭に相会し、酒を把り詩を賦し、豪興如山鶏鳴に至りて散ず。今や予孤身隻影滬上の家舎に棲居し、残燈に対して兀坐不眠、感慨四集す。静かに去年来の事を追思すれば、身世幾変或は万死の地に出入し、或は砲煙弾雨の間に彷徨し、或は間関崎嶇終に身を以て免れ、北馬南船（この後数字分不明）。蓋し此の兩年の間天予以試むるに患難を以てし、之をして至成せしめんとする者の如し。今や既に二十七年を送り、指顧の間又た將に二十八年を餞せんとす。我豈に恋々たらざらんと欲するも得べけんや、噫。

4. 明治29年1月～12月の日記

1月10日に佐々友房宛の手紙で「漢報買収の事に付き、高島中将に前約を踏ましめ金六百元を出さしめんことを依頼」し、この手紙を書くことを皮切りにしてその実現に向けて動き出し、19日に漢口に着いている。そして2月10日に海軍から1千円を補助する事に決定した旨の手紙を安原から受け取り、翌11日には従来このために

協力してきた白岩、姚文藻と相談し漢報側との交渉を進めた結果話がまとまり、12日には主筆の阮に会い、更に「仏国領事館を訪ひ、領事に面し漢報接弁の事に付き、道台に照会の事を依頼し」た。漢報館がフランス租界にあった事に伴う必要な手続きを行うべく訪ねたものであろう。更に15日には漢報館の建物（洋館）をもう1度見て借用する事に決め、1年の借家代300元を支払う事にした。その後も解決すべき問題があったが、とにかくこうして数年來追及してきた中国での新聞経営の夢が実現したのである（注）。

今回漢口に着くとその足で楽善堂に向かったが、「已に廃業の後にして」1人の顔見知りも居なかった。それとも知らず、これまでのようにそこに泊めてもらおうとして無駄足を踏んだ事になる。宗方にとっては明治21年以来漢口に着けば必ず立ち寄った店であり、荒尾以下グループとしての活動が途絶え、また店が移転しても、必ず顔を出す場所になっていたのである。なぜ廃業になったかについての記述はない。

ところで、この年の日記から分かる海軍省に報告を送った日付は次の通りである。

1月10日一第二号、24日一号外信、2月8日一第三号、（第四号は日付不明）、3月23日一第五号、4月6日一第六号、5月4日一第七号、11日一第八号、23日一第九号、6月5日一第十号、12日一第十一号、19日一号外信、7月4日一号外報告、9月5日一第十二号、第十三号、26日一第十四号、第十五号、10月9日一第十六号、15日一号外信、11月18日一第十七号、30日一第十八号、第十九号、12月12日一第二十号、28日一第二十一号

なお、国会図書館に所蔵されている宗方の海軍宛の報告でその年月日が不明であるものはいくつかあるが、明治29年分でいうと、第五、八、十、十一、十三、十八、二十、二十一がそれに当たり、これらについては上記日記の日付から判明する事になる。

ここで報告に記された内容についてだが、4回送った号外信（報告）の内容は不明ながら、国会図書館所蔵の報告の題目を見る限りで言うと、朝廷内、軍隊内、地方役人一張之洞、盛宣懷等の動

静から留学生派遣、江西省内河輪船等の中央地方の各種の情報が含まれていて、それらの情報は直接足を運んで得たものもあれば、人から聞き新聞から得たものもあるのである。情報収集のプロとはかくあるかと思える豊富な内容である。

宗方にとってのこの年の大事件としてあげられるのは、10月30日に荒尾が台湾で病没したことで、11月9日に知らせが届くと、「当代の一俊傑志を齎らして孤島に没す。曷ぞ痛悼に堪へん」と書き、16日には「荒尾精を祭るの一文を作り」根津宛に送っている。漢口楽善堂の同志として始まった荒尾との関係は、上海日清貿易研究所での協力と意見の齟齬を経ながらも途切れることなく10年近く続いてここに終わりを告げたのだが、この両者の関係についても今後明らかにすべき事柄が残っている。

（注）参考までに、同年宗方が佐々友房宛に送った手紙中の新聞経営の役割について触れた部分を以下に引用する。「ご承知の当国新聞の記事論説は朝野の人心を動かすにすこぶる勢力有之候間、日本の今後清国に対する政略上より申すも、上海漢口の如き要地に二、三の機関新聞を有するの必要は言を俟たず候間、国家の事業としても後来のためにやりて置度ものに御座候。兎に角種々の処に勢力を植付けて置かずしては、手を伸ばすにすこぶる困難に御座候。」（原件は国会図書館蔵。ここでは馮正宝『評伝宗方小太郎』から重引）

明治二十九年正月 上海、漢口、上海
日乗

一月元日 晴。夜来心気不佳、悪寒頭痛交侵。盥漱後東天の一涯を遙拝し、食後寝に就く。夜に及ぶ迄病勢少しくも衰へず頗る痛苦を覚ふ。是日高道竹雄、三輪高三郎、白岩、那部、吉嶋、山口、吉瀬、橋元、永原、沈、吉田、林、速水、荒井、海津等諸氏交も来問。蘇州姚姓の信到る。夜白岩来り宿す。

一月二日 晴。朝来心気稍爽、只だ少しく頭痛を覚ふのみ。晡に至りて又激、夜に入りて益す甚し。白岩来宿。

一月三日 晴天。朝来病の身を去るを覚ふ。終日

起坐。晩松田満雄来訪。福州より所用を以て来る者、共に晩食す。夜八時白岩龍平、金島等、姚芙初を伴ひ来る。姚当分予と同宿す。三沢漢口の信到る。四川行の諸人盗の為に殺されたりとの風説有るを報じ来る。夜更姚と談ず。

正月四日 晴天。終日在家。姚、白岩等と談ず。夜姚と金島等の寓に至る。九時帰る。四川行の諸人重慶にて殺害されしとの説あり。

正月五日 晴天。終日在家。晡時姚及び其子並に白岩と金嶋の寓に至り会食す。雑談十一時に至り帰る。沈文藻の信到る。

正月六日 晴。晌午松田氏来訪。下午白岩、新橋来談。夜姚と出て白岩の寓を訪ふ。

正月七日 晴。下午白岩等を訪ふ。是日郵便入港。荒尾精来滬。出て之を東和洋行に訪ふ。小談帰る。家大人、高橋謙、廈門より内田友行氏、妻行の信到る。

正月八日 晴。是日下午三時姚姓蘇州に帰る。白岩と之を新開大王廟の船中に送り談話。時を移て帰る。夜速水、白岩来談。八時白子と出て松田満雄を常盤に訪ふ。

正月九日 晴天。終日在家。書信を作る。夜白岩来談。

正月十日 陰天。東京佐々友房氏に致すの信を作り、漢報買取の事に付き、高島中将に前約を踏ましめ金六百元を出さしめん事を依嘱す。此外台湾角田海軍少将に致書姚姓の事を依嘱す。又た佐々木高行、高原鉄太郎、中島真雄諸氏に発信す。海軍省への報告第二号を出す。井手三郎芝罘よりの詩信来る。紋儒子を購ひ、幸便を待て内君に送らんとす。之に附するに一書を以てす。

正月十一日 晴。午前白岩と東和洋行に抵り荒尾精を敲き、中食後帰る。夜実相寺生を樂善堂に訪ひ小談、帰る。

正月十二日 晴。下午白氏と松田満雄を常盤に訪ひ小談。白を誘て帰り晩食す。夜五馬路に散歩す。白氏来り宿す。

正月十三日 雨天。終日在家。

正月十四日 雨天。終日在家。是日郵船入港。米原繁藏、佐々木高行、安原金次、有働格四郎諸氏の信到る。夜熊本深水、松倉二子へ寄するの

信を認む。

正月十五日 陰。午前出て速水列を訪ひ、辞別して帰る。白岩在焉。牛を割て午食す。松田満雄来訪、日明日赴福州。下午荒尾精来り行を送る。夜白岩、高道、外二三子来訪。十時寓を出て怡和洋行の元和号輪船に搭じ、官艙に坐す。漢口に至る十二円也。白子来送。

一月十六日 陰。前二時半開船。十時四十分通州を過ぐ。十一時□飧。午後五時晩食。夜八時鎮江に達す。午前一時開船。

一月十七日 陰、微雪。午前九時起床。既に南京を過ぐ。正午蕪湖に達す。下午一時半開船。三時二十分南琛兵船の左岸に膠するを見る。

一月十八日 陰。午前十時半湖口県を過ぐ。船外江よりして行く。冬期水少きとき常如此。十二時半九江に達す。廬山半峯白雪。皚然船終不開、夜潯陽の湓浦口に泊す。連日詩長短十首を得たり。

一月十九日 健晴。日曜日。前四時開船。九時半壁山田家鎮の間を過ぐ。下午三時半黃州を過ぐ。塔有り。城丘陵に依り江流に臨む。恰も武昌の如くにして規模頗る小なり。人家一千余。夜九時船漢口に達す。上岸新街樂善堂に至る。已に廢業の後にして李、官諸人を見ず。即ち去て河街に折回し、十時半星記客棧に投ず。客室人海身を容るるの地無し、不得已店夥等と同居す。

一月二十日 陰。新街、洋街に散歩す。是日一室を占む。夜清人等来談す。

一月二十一日 陰天。午前武昌楊子荃に致書、来漢を報ず。上海白岩、芝罘井手素行に発信す。下午楊子荃武昌より来訪。互に久闊を叙し、相携て李泉溪を新街に敲かんとす。途上李並に金石泉に邂逅す。四人華陽茶樓に上り閑談、時を移す。楊氏事を以て辞し去る。金、李兩人を拉し河街後の三元茶樓に上り小飲。(この後数字分不明)官星塔来談、八時半帰去。

一月二十二日 陰天。水曜日。終日在寓。下午李泉溪来訪。四時官星塔、金石泉来る。誘て萬華酒樓に上り小酌。六時半帰る。

一月二十三日 積陰。上海を發してより殆ど一日の晴無し。家舎陰暗夜の如し。終日在家、信を

作り楊子荃に贈るの七古一篇を賦す。夜官、金二氏来訪。

一月二十四日 陰天。是日海ぐん省への号外信及び細君に寄するの書を附郵す。金石泉来談。

一月二十五日 晴天。劉价人、劉達安二生来談。予が潯陽夜泊の詩に和し来る。二劉は漢陽の儒生なり。下午洋街に散歩。夜官星塔来談。

一月二十六日 晴天。日曜日。下午洋街に散歩す。夜楊子荃、李泉溪来訪。李生子の為に井手素行煙台よりの書信を受取り来る。少焉浙江人周際唐来訪。布政使衙門の官吏たり。六時半に至りて帰る。

一月二十七日 陰天、風大。午後洋街に散歩す。楊、李両氏来訪、小談即去る。晚金石泉、官星塔来談。洋街に散歩す。

一月二十八日 陰天、寒氣太し。井手素行芝罘、白岩龍平上海に発信す。家大人、内田友行氏、松倉、深水、井口列、並に内君第五号の信到る。一月十一日発のものに係はる。

一月二十九日 雪。終日在家。夜金石泉来談。

一月三十日 陰、積雪三寸。終日在家。石泉其子を携へ来る。晚昌和輪船宜昌より来る。緒方二三、川村曄、高木利太等帰来、宋寶康の家に投ず。行て之を訪ふ。談話九時半に至りて帰る。江口駒之助等一行は船上に在りと云ふ。三澤信一宜昌よりの信、緒方携へ来る。

一月三十一日 陰天。午前緒方、川村、高木、金来訪。下午緒方の寓に至る。高木生今夕を以て上海に赴く。緒方の寓宋宝康の家に宿す。夜江口駒之助、志村源太郎等来談。

二月一日 雪。終日緒方の寓に在り。傍晚東京日々新聞社員川村上海に帰る。江口、志村等亦然り、前後客棧に帰る。是日東京佐々友房氏の電報来る。漢報買取に要する金六百円準備整へりと云ふ。外に白岩、速水並に桂齊一の信到る。桂は近日上海に着せりと云ふ。夜緒方来り宿す。

二月二日 陰。日曜日。中食後緒方と出て衣服二点を買ふ。下午緒方の寓に至る。晚餐後談話、八時半に至りて帰る。是日副將周添順に晤す。二年前の知人なり。是日南溟と洞庭春に至り洗澡す。上海を出てより始となす。

二月三日 雨天。白岩龍平の信到る。午前緒方、金二氏来訪。下午緒方の寓に至り会食す。家大人への信一封並に金拾円、内田行への信一封(第五号)並に上海に托留せし帯地及び深水、松倉、秋山、岡本、葉室宛ての書信を緒方氏に托す。明日を以て上海に下り熊本に帰るを以てなり。外に上海速水、桂、白岩、金島等に致書す。

二月四日 陰天。下午緒方二三を訪ふ。四時緒方及び石泉の子を送りて怡和の吉和輪船に至る。五時開船。金に金二元を送りて餞と為す。

二月五日 陰。終日在家。

二月六日 陰。終日在家。夜官星塔来談。金三元を贈りて歳暮の送禮に代ゆ。

二月七日 陰天。報告を作る。

二月八日 雨天。土曜日。是日午前工部書信局に至り発信。東京河原氏に第三号報告を送る。外に安原氏への信を封中す。内君の信(第六号)及び本島正禮、白岩龍平、亀雄等の書信来着。

二月九日 健晴。入漢後積陰連旬、是日初て晴に逢ふ。快道ふ可からず。陰曆年末に付き旅宿の計算を為し、僕傭等に酒資三円を給す。外雑物数点を購ふ。

二月十日 晴。工部局に至り受信す。安原、林則□、速水一孔、白岩、山田珠一諸氏の信来着。漢報買取の事に付き金一千円海ぐん部より予に補助する事に決定せし旨、安原氏より通報し来る。蓋し佐々氏の手を経て已に上海に匯寄せりと云ふ。下午楊子荃及び其子来訪。共に茶業公所に至り小談。広東、江西、江南、湖北、湖南、山西六幫の公所に係はる。一清と出て袍衣一領を購ふ。夜又た出て黄坡街の夜市に至り硯、劍、水つば等の件を買ふ。官星塔来談。

二月十一日 晴天。午前七時大通輪船来る。白岩、姚二氏の来るを聴き行て之を見る。八時姚、白岩来る、諸事を商量す。夜姚来訪、漢報受取りの件全く成功せりと云ふ。官、金二子亦来訪。

二月十二日 晴天。午前是日上海桂齊一、林正則、速水一孔、東京佐々友房、宮嶋大八諸氏並に内君行子へ第六号信を發す。十時白岩と出て漢報館に至り、姚及び主筆阮に会し諸事を照量

し、去て仏国領事館を訪ひ領事に面し、漢報接
弁の事に付き道台に照会の事を依頼し、帰途宋
宝康を敲き中餐し、又た漢報館に至り小談帰
る。夜姚、官二子来訪。是日陰曆除夕。
二月十三日 晴天。是日清曆元旦たり。下午姚来
訪。晩食後共に洋街に散歩す。
二月十四日 陰天。午前漢報館に至る。姚、白岩
二子と通済門を出て独逸の居留地を一覧し、郊
外を散歩し、大智門を入りて漢報館に帰る。林
某に面す。前の漢報館主たり。館内にて晩食し
帰寓。
二月十五日 晴天。午前白岩と出て漢報館に至ら
んとす。会々金石泉、官星塔来訪。相携て漢報
館に至る。下午姚等と洋房を再看し愈々借用す
る事に決す。一ヶ年の租金三百兩たり。姚、白
岩と寓処に帰る。正金銀行の信到。
二月十六日 健晴。中食出て漢報館に至り、黄昏
白子と星記客棧を出て新借の洋房に移転す。
二月十七日 晴。
二月十八日 晴。李泉溪来る。
二月十九日 晴。下午楊子荃、李泉溪及び外一人
来訪。楊氏和章一篇を贈る。李鴻章の魯国に赴
くとの電報在り。
二月二十日 晴。
二月二十一日 晴。
二月二十二日 晴。東京佐々友房、内田行（第七
号信）、齊藤員安、鳥居赫雄、前田彪、林正則
諸氏の信到る。
二月二十三日 晴。家大人の信二封到る。速水よ
り正金銀行の爲替証手續不充分にて送金する能
はずとて（この後数字分不明）を請求し証書を
送り来る。二十七八年戦役の功により勲七等に
叙し青色相葉章を賜ひ、年金六十円を下賜され
たりとの通知あり。自ら顧て不堪一笑。朝鮮王
魯国公使館に通れ、同使館内に於て新に政府を
組織し、日本主義の大臣を悉く殺戮し、魯人若
くは魯人に服従せる韓人を挙て内閣を再造せり
との報あり。東洋如此ただ多事、邦家の前途真
に憂慮に堪へず。
二月二十四日 晴天。是日東京佐々友房、山田珠
一、前田彪三氏並に上海速水一孔、桂齊一、林
正則三氏へ致書す。速氏には正金銀行爲替券を

封送せり。
二月二十五日 晴天。井出素行に芝罘に発信す。
是日姚賦秋の夫人病危篤の電報来り。白岩と共
に元和輪船に搭じて上海に帰る行を送り、五時
半帰る。午前楊子荃、周際唐、外三人来訪。夜
洗澡す、快適言状す可からず。上海を出てより
一閱月余入浴僅かに二次のみ。
二月二十六日 日陰、夜晴。井出素行芝罘よりの
信到る。正月末日より膠州湾に旅行せりと云
ふ。外九州新聞来着。夜月に江干に歩す。徘徊
多時にして帰館。
二月二十七日 雨天。午前白岩龍平に致書す。
二月二十八日 晴。
二月二十九日 晴。武昌劉彝卿、周 翁来訪。
三月一日 日曜日。晴天。東京安原金次氏の信並
に山田珠一、家大人、内田行、台湾田鍋安之
助、上海林正則、桂齊一諸氏の信到る。東京西
郷従道氏並に山田珠一、河原要一（四号）、熊
本家大人、内田友行氏、内田行（七号信）、高
木正雄、台湾田鍋安之助、上海白岩龍平、速水
一孔、西村忠二郎諸氏に致すの書を作る。
三月二日 雨天。日本上海行の書信を工部郵便に
附す。主筆袁竹一病を以て職を辞す。
三月三日 晴。午前林正則、安原金次両氏の信並
に正金銀行より銀四百十兩五十六錢送來。
三月四日 陰天。午前白岩及び正金銀行西巻に発
信す。芝罘井出素行、上海白岩の信到る。是日
主筆袁竹一職を辞して上海に帰る。賬房詹姓を
も解傭す。
三月五日 雨天。無事。
三月六日 陰天。桂齊一上海よりの信到る。
三月七日 半晴。是日天津井出素行、梶川重太郎
に発信す。
三月八日 晴。日曜日。内田友行氏並に同行子
（第八号）、緒方二三、上海白岩龍平諸氏の信到
る。
三月九日 陰天。是日内田友行氏並に行子（第八
号）、緒方二三諸氏に発信す。張漱青来訪。
三月十日 晴天。
三月十一日 雨天。白岩龍平の信到る。
三月十二日 晴天。下午仏国領事ドートメルの書
信到る、明日会見の事言ふ。夜宋宝康と入浴

す。上海を發してより殆ど二閱月沐浴を具するもの僅に三次のみ。歸りて江畔を散歩す。快適殊に甚し。

三月十三日 晴天。午前十時出て仏国領事を訪ふ。漢報館器械云々の件に付き云々して歸る。

上海白岩龍平の信到る。直に之に復信す。

三月十四日 陰。土曜日。熊本新聞並に上海白岩の信到る。井出素行に天津に致書す。

三月十五日 晴雨無定。日曜日。

三月十六日 陰晴無常。上海白岩に発信。

三月十七日 晴。家大人の信二通並に煙台高垣徳治の信到る。直に之に復信す。

三月十八日 陰、下午雨。午前三沢信一來訪。昨日来着せりと云ふ。下午二時を出て招商局江永輪船に至り、津川謙光、高橋茂（井田）、三沢信一、外二名を訪ふ。共に重慶より下りしものなり。談話五時に至りて歸る。東京鳥居赫雄、齊藤員安、中西正樹諸友、上海白岩、桂、林諸氏に致すの信を托す。

三月十九日 積陰。夜来朔風甚烈、春寒頓に加ふ。下午降雹、少焉變じて霰となり雪となる。刻寒骨を刺す。

三月二十日 雪。去年是日聯合艦隊旗艦松島に搭じ澎湖列島中八罩島の根拠地に着す。鳥兎倏忽正に復た一年、此間身世の変遷想去想来百感係之矣。芝罘井出、上海白岩の信到る。

三月二十一日 半晴。土曜日。

三月二十二日 夜来飛雪擦乱屋瓦皆白。午前横田三郎、堀口九萬一來訪。本日の鄱陽輪船より来着せりと云ふ。留て洋饌を饗す。午後四時に去て歸る。上海林正則、白岩龍平の信到る。堀口九萬一、東京中島真雄の信、横田三郎、煙台井手素行の寄詩を携へ来る。晚太古洋行の鄱陽輪船に至り横田、堀口を訪ひ、寛談十時に至て歸る。

三月二十三日 陰天。午前横田三郎来談。下午堀口来訪。是日かいぐん部に第五号報告を送る。夜江辺に散歩す。

三月二十四日 晴。午前横田三郎来訪。下午沙市輪船に至り横田、堀口を訪ひ、五時歸る。

九州日々新聞来着。白岩上海の信二封来着。

三月二十五日 陰天。是日上海林正則、桂齊一兩

氏に致書す。桂氏には其母堂の逝去を吊せり。午前堀口、横田兩氏来訪。午時兩氏の招を以て洞庭春に至り洋饌を吃す。下午沙市輪船に至り二氏を訪ふ。仏国領事亦来会。閑談四時半に至り別を叙して歸る。内田友行、内田行（九号）兩氏の信到。夜会審衙門官吏董治勛来訪。

三月二十六日 晴天。

三月二十七日 健晴。是日上海林氏の信到。東京より二百元送来せりと云ふ。是夜陰曆望前一日。碧空如水皎月洗ふに似たり。恰も有明月滿高城長天一鳥鳴之趣。

三月二十八日 土曜日。晴。東京鳥居赫雄、中島真雄、尾本寿太郎、熊本（この後1行分不明）、内田友行、同行（九号）諸氏に致すの書を作る。白岩龍平の信到る。

三月二十九日 雨天。日曜日。

三月三十日 雨天。熊本、東京行の書信並に上海林氏の信を發す。夜天津棍川重太郎、井手素行の信到る。

三月三十一日 陰天。

四月初一日 陰天。桂齊之氏、鄱陽輪船より来着、往て之を迎ふ。東京河原要一、上海林正則、白岩龍平諸氏の信到る。上海林正則、津川三郎二氏に発信す。

四月二日 晴。横田三郎沙市よりの信到る。晚桂氏と洋街に散歩す。

四月三日 陰天。下午洗澡す。

四月四日 晴天。土曜日。上海白岩龍平、天津井手素行に発信す。

四月五日 雨天。日曜。煙台高垣徳治、上海白岩、東京亀雄の信到る。煙台に復信す。白岩、姚二子に復信す。

四月六日 陰。午前仏国領事を訪ふ。井手素行天津よりの信到る、漢報補助費四十元贈り来る。武昌楊子荃、周際唐に致書す。煙台高垣、上海林に送信す。東京への報告第六号、林の手を経て郵致す。夜桂氏と江干に散歩す。

四月七日 晴天。上海白岩龍平の信到る。

四月八日 健晴。春色盪人。下午重慶領事加藤義三、外二人来着。熊本内田友行氏及び行子（十号）の信を携へ来る。夜桂氏と加藤列を固陵号輪船に訪ふ。

四月九日 晴天。八十二度。晩加藤義三、外二名を招き饗す。

四月十日 晴天。八十六度。熊本内田友行氏並に行(十号)、天津井手素行、上海林に致書す。夜加藤義三の招邀に固陵輪船に赴く。八時帰る。

四月十一日 晴。八十八度。熱気如焼。二十余日前風雪奇寒に苦み、転瞬忽ち葛衣を着す。纔かに数日を隔てて寒暖計四十余度の差あり。殆ど春色人間に到らざるの感無き能はず。

午前張玉泉来訪、楊子荃の友人なり。下午加藤列来り別を告ぐ。本夕宜昌に向て進発すと云ふ。楊子荃、張玉泉及び郭某来訪。上海白岩に覆信す。

四月十二日 日曜。雷雨。寒暖計六十八度。天津井手素行の信到る。外に該地の直報を送り来る。

四月十三日 陰天、寒暖計五十六度。僅か三日の間寒暖三十二度の差あり。熊本内田行(十一号)、山田珠一、篠原由雄、東京中西正樹、上海白岩龍平、東京安原金次諸氏並に家大人の信到る。是日直に家大人、山田、河原要一、安原金次、中西正樹、佐々友房諸氏に復信す。夜加藤列の重慶行を送りて固陵輪船に至る。

四月十四日 陰天。

四月十五日 積陰。上海白岩龍平、天津井手素行、北京中嶋雄に寄書す。

四月十六日 雨天。

四月十七日 雨天。上海白岩龍平の信到る。

四月十八日 積陰。上海白岩、台湾田鍋、中島、小濱等に寄書す。是日午後内田行の十二号信及び緒方二三、弟亀雄の信到る。

四月十九日 日曜日。陰天、下午雨。

四月二十日 雨天。是日熊本内田行(十一号)及び緒方二三、東京安原金次(安原氏には澎湖出張中の旅費計算書を郵送す)諸氏へ発信す。別に東京中西正樹、弟亀雄に致書す。中西には金四五元を亀雄に送らん事を依頼す。

四月二十一日 雨天。是日武昌拳人朱徳宝より扇子を贈り来る。

四月二十二日 雨天。熊本山田珠一の信到る。

四月二十三日 陰天。

四月二十四日 雨天。上海白岩、蘇州姚の信到る。

四月二十五日 雨。内田行(十三号)、鳥居赫雄、白岩龍平、井手素行の信到る。直に白岩に覆信す。昨夜□□土廖生書を予に致して交を通ず。即ち之に復書す。夜廖蓉初来訪、四川重慶人忼慨にして気節あり。快談時を移して帰る。

四月二十六日 半晴。是日洗澡。夜雨。

四月二十七日 雨。月曜日。熊本山田珠一に発信す。廖蓉初の信到る。

四月二十八日 晴。武昌楊子荃の信到る。直に之に復す。夜雨。

四月二十九日 雨。

四月三十日 雨。

五月一日 陰天。姚賦秋、白岩龍平兩子来着。上海河北、橋元、金嶋、遠藤、那部諸人の信到る。

五月二日 雨天。

五月三日 陰晴無常。日曜日。夜洋街に散歩す。

五月四日 雨天。月曜日。東京安原に第七号報告を送る外、内田行に十二号信を致す。

五月五日 雨天。

五月六日 陰。早朝永瀧久吉一行来着。上海より台湾山内の信を携へ来る。

五月七日 晴。永瀧来訪。

五月八日 晴。芝罘高垣の信到る。夜洋街に散歩す。

五月九日 晴。土曜日。

五月十日 大風。午前風濤を冒し江を渡りて楊子荃を武昌保安門外に訪ふ。張玉泉、郭両氏来会。主人酒肴を出し饗す。四人寛談、時を移し三時風雨を衝て帰る。熊本内田行(十五号)(十四号は安和輪船沈没の時同く災に罹りしものなり)、家大人並に妹等及び台湾景山長次郎の信到る。東京安原金次氏の信到る。

五月十一日 晴。熊本山田珠一、緒方二三兩氏及び東京安原金次氏に第八号報告を送る。外に家大人並に上海高道竹雄氏に一封を送る。午時永瀧領事洞庭春に招邀す。姚、沈、白三氏と赴く。六時姚等と出て昌和輪船に至り、永瀧を送る。

五月十二日 雨天。

五月十三日 雨天。是日江裕輪船より上海に下らんと擬す。黄昏白岩、姚、沈三氏と上船、九時開船。桂氏来送。

五月十四日 雨。午前八時九江着。上陸、城内に於て磁器数種を購ふ。十一時開船。陰雨新霽、満月青山、翠黛如梁、湖口、大小姑山等の諸勝風色一段好趣を加ふ。諸氏と唱和吟詠適殊甚。

五月十五日 晴。午前十時南京着。白、姚二氏及び船員兩三名と各驢馬に策ち金陵城に入り、匆々一覽して帰船。下午三時鎮江府着。白、沈二氏と上岸、居留地を一巡して帰る。六時開船。

五月十六日 晴。九時吳淞口に進む。安和輪船沈没の処、僅かに桅桿数尺を水面に露はすあるのみ。十一時招商局馬頭に着す。船中にて中食後上陸、金島氏の寓に至る。下午出て林正則氏を文路の寓に敲き、小談帰る。

五月十七日 晴。午前高道竹雄、山崎龜造諸氏来訪、共に中食す。下午二三氏亦来訪。夜白、金二氏と熊本屋に至り小談。池部秀次在り、蘇州より本日帰来せりと云ふ。十二時帰る。

五月十八日 晴。月曜日。午前海津、外一名来訪。白氏と出て四馬路廣懋館に至る。帰途樂善堂に実相寺を敲き帰る。夜金島氏と正金銀行に西巻を訪ひ談話、移時而帰。

五月十九日 晴。午前出街。下午丸山生来訪。晚白、金二氏と領事館山崎龜造の招邀に赴く。九時帰る。井口生熊本より来着せるを聞き、往て訪ふ。談話十二時に至りて帰る。熊本内田行の十六号信並に其の贈物を受取る。外に緒方、深水、松倉諸氏の信及び東京鳥居赫雄の信あり。内田行の十四号又た本便を以て来着、過般安和号にて沈没せりと為せしものなり。此信客月二十二日熊本発に係はる、遲着如此不可解也。

五月二十日 晴。夜井口忠次を訪ひ、十時帰る。

五月二十一日 晴。山口生来訪。熊本緒方、漢口桂、熊本内田友行氏並に行、東京鳥居赫雄諸氏に寄するの信を作る。夜白岩と熊本屋に井口を訪ひ、十一時帰る。

五月二十二日 陰天。安原金次、尾本寿太郎二氏の信到る。夜金、白二氏と東和に至り、池部に辞別し帰る。

五月二十三日 陰。朝山城丸出口。熊本、東京行の書信を發す。海ぐんに第九号報告を送る。夜金、白、永、井口諸氏と熊本屋高道氏の招邀に赴く。十一時帰る。

五月二十四日 陰。日曜日。午前林正則氏を豊陽館に訪ひ、中餐後帰る。熊本屋に至り小談。去りて領事館に山崎龜造を敲き、黄昏帰る。

五月二十五日 晴。下午林正則、井口諸氏来訪。漢口桂齊一の信到る。北越某の事に付き云々し来る。直に之に復信す。是日白岩子蘇州に赴く。夜金島氏と熊本屋に至り小談。

五月二十六日 半晴。午前海津、岡、外一名来訪。是日天津梶川重太郎、井手素行に致書す。郵便船入港。東京田鍋安之助の信到る。夜三馬路に散歩す。

五月二十七日 雨天。

五月二十八日 雨天。終日在家。

五月二十九日 雨天。金曜。東京田鍋、三澤、前田、片山等に致書。外熊本緒方二三、山田珠一に発信す。井口来訪。晚金嶋子と熊本屋に至り晩食、終に宿す。

五月三十日 晴。晚出て熊本屋に到り、十一時帰る。

五月三十一日 雨。熊本山田珠一、漢口桂齊一の信到る。沈文藻来訪。夜熊本客棧に到り小談。

六月初一日 陰。漢口桂氏に復書す。是日心気不舒。沈堯民蘇州より帰来、白岩の書を携へ来る。夜金島と高道を正金銀行に訪ひ、十時帰る。

六月二日 陰。下午井口を訪ひ、熊本屋にて晩食し、縮緬、襦子類を購ひ、十一時帰る。

井手素行、桂齊一兩氏の信到る。

六月三日 雨。熊本内田行(十七号)、緒方二三、東京鳥居赫雄の信到る。海津、岡来談。夜金島氏と熊本屋に至る。

六月四日 雨。朝来頭痛殊に甚しく起座すべからず。白岩氏蘇州より帰来。姚賦秋の信及び予が内人への贈物を携へ来る。

六月五日 半晴。鳥居赫雄の信到る。熊本内田行、山田珠一、緒方二三、家大人、台湾中西正樹及び東京安原氏に十号報告を郵送す。夜白、金二氏と外出。

六月六日 雨天。杭州速水一孔，東京荒賀直順の信到る。午前白岩，金島，井口，那武諸氏と熊本屋に鯉魚飯を喫す。晩帰る。夜子雲と山崎亀造を領事館に敲き十時帰（栃原孫蔵来訪）。

六月七日 雨天。日曜日。午時姚賦秋蘇州より来る。金，姚等と上車，東和洋行に至り，漢陽槍砲局総弁馮敬安，白岩等に会し飲む。四時帰る。

六月八日 陰。栃原来訪。夜領事館に至り河西を敲く。

六月九日 陰，雨。家大人，安原金次，前田彪，亀雄，内田行（十八号）の信到る。夜熊本屋に至る。高道亦来る。

六月十日 雨。

六月十一日 雨。夜姚，白，金と熊本屋に至る。漢口桂齊之氏に致書す。

六月十二日 晴。熊本山田珠一，佐々友房，井芹経平，野田寛，大里猪熊，藤本，米原，岡本源次，志水元吾，池邊源太郎，葉室，秋山，塘林虎五郎，田鍋安之助，三澤，片山諸氏及び安原氏に第十一号報告を寄す。外に熊本内田行に（十五号）与ふるの書を作る。物品十余点を明日井口の帰熊に托送す（内田，田鍋，安原行の三本は郵便にて送す）。外に鳥居，齊藤，堤，中西正樹，熊本緒方列に致書す。夜井口を訪ひ小談，帰る。

六月十三日 晴。午前出て井口忠次郎の帰国を送る。

六月十四日

六月十五日 晴。午前白，金二氏と熊本棧に至り中食す。是日陰曆端午。

六月十六日 晴。是日午後四時前田彪来着。白，金，永三氏と前田の寓常盤に至り晩食す。夜前田を誘て寓に帰る。山田珠一の信到る。

六月十七日 晴。午前前田と林正則を訪ふ。在らず帰る。林来訪。熊本山田珠一，緒方二三の信到る。晩常盤に至り晩食す。

六月十八日 雨。午時東和洋行に世良田大佐を訪ひ寛談半日。晩餐後辞して熊本屋に至り前田を訪ふ。白岩在焉。夜金嶋，高道亦来会。諸氏と共に飲む。

六月十九日 晴。午前通信省秘書官中橋徳五郎来

訪。是日郵船出口。東京安原氏に号外信を送る。是日臨時船，内田行（十九号）信到る。直に返信す。夜金，白二氏と前田氏を訪ひ，終に宿す。

六月二十日 晴。東京安原金次，鳥居赫雄二氏の信到る。漢口桂氏に致書す。姚賦翁蘇より帰来。晩前田氏を訪ひ宿す。

六月二十一日 雨。下午前田寓より帰る。

六月二十二日 晴。午時姚，白，金，前田諸氏と画舫蘇州河に浮び飲む。下午大馬路金嶋の処に至り小談，帰る。夜山崎を領事館に敲き，九時帰る。

六月二十三日 陰。午前西京丸入口。内田行（二十号）の信到る。晩金，白と前田の寓に至り会食し，十一時帰る。

六月二十四日 陰。午前山崎亀造来訪。午後前田氏の寓に至り，晩食後終に宿す。

六月二十五日 晴。前田，岡両氏来訪。前田の処に至り，晩餐す。白，金両氏亦来る。十二時帰る。

六月二十五日 陰。熊本内田友行，家大人，緒方二三列，東京鳥居赫雄，内田行（十七号）諸氏に致すの書を作る。外に杭州速水一孔，桂齊之二氏及び天津井手素行に致書す。白，金二氏と熊本屋に至り晩食す。

六月二十六日 晴。是日西京丸出口。

六月二十七日 晴。午前河北純三郎氏北京より来る。夜熊本屋に至り飲む。

六月二十八日 晴。

六月二十九日 晴。晩熊本屋に至り，前田彪を饒す。福州に赴くを以てなり。会するもの高道，金島，白岩，河北一及予也。十一時帰る。

六月三十日 晴。下午熊本屋に前田彪を訪ひ晩食す。十時白，金二氏と前田を送りて招商局碼頭の美富船上に到り，十一時別を叙して帰る。是日内田友行，田鍋安之助，井口忠二郎諸氏並に内田行（二十一号）の信到る。

七月一日 雨。午前前田来訪。今晚十二時にあらざれば出帆せずと云ふ。中食後相携て熊本屋に至る。白，金二氏亦来会。晩食閑談，十一時に至り散ず。前田別を告て船に帰る。

七月二日 雨天。終日在家。夜熊本屋に至り，河

北純三郎を餞す。
七月三日 晴。下午河北の帰国を送る。熊本内田行に十八号信を發し、外に糖菓四箱を送る。緒方、井口列に發信。夜熊本屋に至り白岩、金島二氏に留別す。十一時帰る。
七月四日 陰。東京安原氏に号外報告及び鳥居赫雄、山田珠一に發信す。午前出て、林正則、山崎龜造、河西等を訪ひ別を叙す。金嶋、那部、高道諸氏を敲き辞別。高道氏に金百三十円を預く。晩金、白二氏の招邀で熊本屋。姚賦秋、高道、岡、海津、多田、那部諸氏（この後1行分不明）高道、姚、白岩、金島諸氏来送。十二時帰る。
七月五日 晴。午前二時半開船。
七月六日 晴。下午一時蕪湖に着す。安徽省沿江兩岸の地は概して平行にして、芦荻蒼々十里以外に連るの処あり。夜安慶を過ぐ。
七月七日 晴。午時小姑山の下を過ぐ。馬当磯、彭沢県、湖口等の諸勝多く此の一带に在り。一時半九江着。三時開船。下午七時武穴を右舷に見る。人煙稠密の一市鎮なり。
七月八日 半晴。午前十時漢口に達す。直に漢報館に入る。天津井手素行の信三封、豊前高橋謙の信一封並に沙市廖蓉初の信あり。
七月九日 晴。上海白、金、高道、海津、橋元、遠藤、那部諸氏に發信す。夜金石泉来談。
七月十日 陰。
七月十一日 北京井手素行に致書す。熊本葉室湛純、宗像儀吉並に家大人の書到る。儀吉氏より奥村叔母の病を報じ来りしを以て、同氏に宛て金十円を送り、奥村に転贈を囑托す。家大人並に上海白岩に致書す。上海金嶋氏に半税金三円二十銭を支那信局より郵送す。夜洋街に散歩す。
七月十二日 雨天。終日在家。日曜日。
七月十三日 晴天。沙市横田三郎、廖蓉初に致書す。上海正金銀行より百三十円の預り証を送り来る。外に武昌楊子荃の信到。
七月十四日 晴。午前北京井手素行の信到る。是日仏国領事より招待を受く。其の国祭なるを以てなり。
七月十五日 晴。午前中西正樹台湾よりの信到

る。職を辞して北清に遨遊すと云ふ。上海林の信到る。東京より金四百元（八月より十一月迄）来着せりと云ふ。林正則、白岩龍平二氏に致書す。外高橋謙に一封を致す。上海正金銀行高道竹雄氏に致書す。
七月十六日 晴。
七月十七日 夜来大雨如傾盆。上海白岩龍平の第一号信到る。
七月十八日 午前陰、午後大雨。仏国領事を訪ひ小談、帰る。
七月十九日 日曜日。熊本内田行（二十三号）、上海白岩、金嶋諸氏の信到る。
七月二十日 半晴。熊本内田行、緒方二氏に致書す。
七月二十一日 晴。武昌楊子荃、上海白岩に致書す。上海白岩龍平の信到る。三澤信一の信を転致し来る。
七月二十二日 晴。白岩龍平の信到る。北京井手素行に致書す。
七月二十三日 晴。
七月二十四日 晴。武昌楊子荃及び田龍彬の詩信到る。沙市廖蓉初の信並に上海橋元生の信到る。是夜桂氏九江廬山に避暑。
七月二十五日 午前晴、晡時雷雨。正午楊子荃来談、晚餐して去る。是日東京鳥居赫雄、熊本緒方二三、浅井寅喜、上海高木正雄、白岩龍平、沙市横田三郎の信到る。
七月二十六日 晴。寒川生来り別を告ぐ。明日より帰国すと云ふ。
七月二十七日 晴。月曜日。上海白岩龍平に致書す。
七月二十八日 晴。上海白岩龍平、正金銀行西巻豊作、高道竹雄諸氏の信到る。西巻よりは予の預金四百元保管の通知書なり。
七月二十九日 晴。九江廬山桂氏の信到る。武昌楊子荃の信到る。
七月三十日 晴。
七月三十一日 晴。夜承恩来宿。
八月初一日 晴。午前武昌楊子荃来訪。下午三時帰る。郭厚卿が予の韻に次せし七言一篇を携へ来る。長崎中西正樹、東京鳥居赫雄、天津井手素行の信到る。

八月二日 晴。日曜日。
八月三日 晴。熊本内田行（二十号），上海白岩龍平，林正則，九江桂齊之諸氏に致書す。前田彪福州よりの信到る。
八月四日 晴。朝承恩来る。
八月五日 晴沙市永瀧久吉に致書す。
八月六日 晴。北京井手素行，上海岡幸七郎の信到る。
八月七日 晴。承恩来る。
八月八日 晴。土曜日。内田行（二十四号），鳥居素川，家大人，妹佐久の信到る。是日炎熱非常，百五六度以上に在り。
八月九日 晴。午正日蝕。上海白岩龍平の信到る。
八月十日 晴。上海白岩龍平，栃原孫藏，高木正雄，古城貞吉（古城は今度新に來りしもの），北京井手素行に致書。外に宇土浅井寅喜，米原繁藏，熊本内田友行氏，並に内田行に発信す。
八月十一日 晴。午後沙市副領事堀口九萬一來訪，只今着せりと云ふ。寛晩に及で元和輪船に搭じ，上海に向ふ。送りて船に到り，九時帰る。
八月十二日 晴。沙市横田三郎，廖鏡清に致書。廖には重慶領事加藤義造への紹介状を封送す。
八月十三日 晴。本月七日より炎熱異常，名状すべからず。
八月十四日 晴。夜來北風微動，頗る涼快を覺ふ。上海白岩，九江桂の信到る。夜北越隆來着。中嶋真雄の信並に同氏の贈品煉羊羹を携へ来る。
八月十五日 晴。土曜日。午後沙市永瀧領事の信到る。永恩來訪。
八月十六日 晴。午前沙市郵便局員上山良吉來る。土宜数点を携へ來り贈る。午時之を留て會食す。熊本緒方二三，三池親信，内田行（二十五号），宗方儀吉，上海古城貞吉，高木正雄の信到る。
八月十七日 晴，午後陰。九江桂齊之に五号信を送り，日本よりの書信四通並に新聞を郵致す。外に沙市永瀧久吉に同氏より依托の物品並に預り金の残余七十四円伍十錢を，上山良吉の沙市に赴くに托送す。上海林，熊本緒方列，山田珠

一，京都中嶋真雄に発信。晚上山を招商局の快利船上に送り，辞別して帰る。
八月十八日 積陰，微雨，不至潤土膏。七月十二日以来之を始となす。晚京都都紅の老板西田清左衛門來訪，昨日來漢せりと云ふ。夜武昌周濟唐，楊子荃二人の書到る。
八月十九日 雨天。
八月二十日 雨天。上海白岩，姚二氏に致書す。楊子荃武昌より，廖鏡清宜昌よりの信到る。廖に復信す。
八月二十一日 晴。湖南光州胡，梁二姓への信を發す。
八月二十二日 晴。
八月二十三日 雨。日曜日。
八月二十四日 晴。朝周際唐（復生）の書到る。直に之に復す。晌午周姓來訪。寛談移時而去。是日芝罘高垣，上海林，山崎，九江桂，熊本内田行（二十二号）に致書す。夕廖蓉初の信宜昌より到る。
八月二十五日 晴。
八月二十六日 晴。午前小雨。周衡齋，劉彝卿兩氏來訪。談話時を移して帰る。
八月二十七日 晴天。
八月二十八日 晴天。午前福州群島忠次郎，上海白岩，九江桂三氏の信到る。下午楊子荃來訪。共に出て某街の聖公会堂に到り，黃，楊子荃等八人と流通巷の江漢大觀樓に上り會飲。樓四層にして漢水の涓に□み江漢の全局を襟帶の下に俯瞰す。本年の新築に係はり，一万四千兩を要せりと云ふ。毎層茶客溢れんと欲す。一日の収入二百吊以上にして開張の当日は七百吊の収額ありしと云ふ。七時散ず。
八月二十九日 雨天。土曜日。熊本内田行（二十六号）信到る。東京鳥居赫雄，熊本山田珠一，安達謙造に発信す。沙市永瀧領事，横田，上山三氏の信到る。
八月三十日 雨天。朝高木正雄氏來着。内田行（二十二号）の信並に（この後数字分不明）姚夫人への贈品及び予に贈るの諸品を高木氏より領収。外に熊本山田珠一，柳原，岡本源次，緒方二三，上海白岩，姚賦秋，岡，荒井，古城諸氏の信到る。岡本及び佐々正之より朝鮮鮓各一

箱を贈り来る。

八月三十一日 夜来不眠，午前二時起床。上海白岩，古城，熊本岡本，佐々正之諸氏へ致すの書状を作り，外に台湾角田少将，古莊嘉門二氏に致すの□書を作り，白岩を経て姚賦秋に交ゆ。蓋し姚□府の物色甚しき為め台湾へ密航して□国籍に帰入せんとするを以てなり。是日以上の書信を郵寄す。

明治二十九年九月

日記

漢口

九月一日 午前陰，午後雨。前八時高木，北越二氏と江に泛んで漢陽の晴川閣に遊び，去て大別山脊を通過し，月湖の伯牙琴台に遊ぶ。茗談時を移し，漢水を下りて馬王廟より上岸。月華楼に午餐して帰る。井手素行燕京より齊藤員安相州よりの信到る。

九月二日 陰。終日在館。晚沈堯民，黄某来訪。堯民今夕上海に向ふ。因て姚夫人に贈るの物品を托送し，併せて白岩に致書。桂氏の信到。

九月三日 陰。下午高木氏と入浴。夜文伯超，鄔筱蠡二生来訪。

九月四日 陰天。下午上海より電報到り，予の下申を促す。發電者の姓名無きを以て書を白岩に致して之を問ふ。白岩，林の信上海より至る。

九月五日 陰天。土曜。東京安原氏に第十二号，十三号報告，熊本内田行に二十三号書，並に上海林に致書す。楊子荃，郭厚卿，黄坤甫三氏来訪。緒方，深水，寒河，家大人，白岩の信到る。

九月六日 晴。下午宜昌廖鏡清の信到る。

九月七日 上海林正則，家大人の信到る。宜昌廖に復信す。午時緒方二三，深水十八来着。内田友行氏の信到る。下午諸氏と出て河街の家屋を見，帰途緒方の寓星記棧に至り晚餐し，諸氏を誘て帰る。十一時緒方等辞帰。

九月八日 陰。九江桂，東京津川三郎の信到る。北京井手素行に発信す。夜緒方，深水来訪。

九月九日 晴。劉彝卿来訪。夜深水，緒方来訪。

九月十日 晴。東京白須貞，田鍋，片山，三澤，高橋謙，家大人，内田友行，内田行，上海白岩

龍平諸氏に致すの書を認む。夜四官殿附近失火，行て看る。

九月十一日 晴。晚高木正雄を餞す。緒方，深水，北越，桂来会。桂氏は今日廬山より帰りし者。八時高木を送りて元和輪船に至り，九時帰る。熊本内田行に信箋三匣を托送す。宜昌廖鏡清の信到る。銀拾余両を送り来り，取当を囑托す。

九月十二日 陰天。土曜日。下午洗澡。出て緒方，深水を星記棧に敲き小談，帰る。夜緒方，深水来訪。

九月十三日 晴。上海白岩，河西，林三氏の信到る。下午緒方，深水二氏と宋寶康の招邀に赴く。五時帰る。周衡齊，劉彝卿，外一名来訪。

九月十四日 晴。下午桂，緒方，深水，北越諸氏と金石泉の招邀に赴く。夜康岐山来談。

九月十五日 晴。午前藤森茂一郎，寒田某来着。外に重慶郵便局員鈴木夫婦来着。沙市永瀧久吉の信到る。花蓆買送を依頼し来る。上海白岩，熊本松田満雄，柳原又熊の信到る。沙市永瀧，上海白岩，古城，高道，熊本家大人に致書す。永瀧には花蓆二巻を鈴木に托送し，上山には長江図説を托送す。夜緒方，深水を吉和輪船に送り，九時帰る。

九月十六日 陰。宜昌廖鏡清，熊本山田珠一，東京亀雄の信到る。藤森，鈴木等前後来訪。鈴木に托し，廖に書状並に衣物一包を送る。武昌周復生より図章三顆を送り来る。

九月十七日 晴。腹痛下痢。是日藤森，寒田星記棧より移寓す。

九月十八日 雨。腹痛下痢，粥食に改む。

九月十九日 雨。下痢，身体頗る衰ふ。

九月二十日 雨。下痢未治。下午河南光州胡書漁，梁肇川の信到る。予の来遊を待つ切なり。

九月二十一日 体気積佳，下痢今止。是日陰曆八月十五，夕月色甚好。

九月二十二日 晴。武昌楊子荃に河南光州の信を転寄。上海白岩に致書す。上海白岩龍平の信到る。

九月二十三日 雨。下午武昌楊子荃，李泉溪，周衡齋三氏前後来訪。閑談時を移し，四時楊，李二氏を廣恒信に伴て洋饌す。

九月二十四日 雨天。
九月二十五日 雨。□
九月二十六日 雨。上海白岩の信到る。東京安原に十四,十五,二号の報告を發す。
九月二十七日 雨。
九月二十八日 積陰。熊本内田行の信並に東京鳥居赫雄の信到る。下午内田行, 安原金次, 中西, 田鍋, 中島等に發信す。重慶領事加藤義三, 上海高道竹雄の信到る。
九月二十九日 晴。朝瑞記の油棧失火, 往て之を觀る。上海林, 白岩, 古城, 武昌楊子荃に覆するの信を作る。外に上海高道竹雄, 山崎龜造, 荒井, 岡へ致すの信を作る。
九月三十日 陰。午前上海白岩龍平, 東京片山敏彦の信到る。下午楊子荃, 周復生來訪。寛談暮に及て歸る。晚北越平隆を餞す。
十月初一日 晴。下午洗澡。是日北越平隆上海に歸る前日作る所の書を以て之に托送す。晡時行を送て鄱陽輪船に至る。
十月二日 晴。藤森と市街を巡視し, 帰途大觀樓に上り茗を啜りて歸る。宜昌廖鏡清の信到る。
十月三日 陰。午前沙市領事官補林某來訪, 只今到着せりと云ふ。是日高橋謙, 高木正雄, 柳原又熊, 緒方二三の信到る。山田珠一, 高木正雄に致書す。沙市領事永瀧及び横田, 上山諸氏の信到る。護照並に沙銀十八兩を送り來る。
十月四日 晴。午前梅林, 松倉, 宇都宮太郎諸氏の信到る。前年此日廣陵の大營に於て特に謁見を賜はる。是れ予が終生忘る可からざるの日なり。知らず, 九重の深き処重て天顔を拝するは其れ果て何の日にか有る。俯仰今昔感何極。
十月五日 晴。午前武昌王姓, 楊子荃の信を携へ到る。
十月六日 雨。邇來江水盛漲平, 水上四十八英尺を長ぜり。
十月七日 雨。秋冷首に透るを覚ふ。
十月八日 雨。秋冷大に加はる。東京安原金次, 台湾篠原由雄, 上海林正則, 東京白須貞の信到る。
十月九日 晴天。東京安原氏に十六号報告を送り並に辭職願を出す。上海林正則, 松倉善家に致書す。北越平隆の信到。江水盛漲, 河街を浸

し, 居留地に侵入せり。
十月拾日 半晴。土曜日。熊本内田行, 上海白岩, 林の信到る。林, 白岩に復書す。
十月十一日 晴。晚水量少しく減ざるを見る。
十月十二日 晴。水大に減ず。上海林氏より香炉一個を送り來る。
十月十三日 晴天。熊本内田行 (英国郵便にて, 二十五号), 北京井手素行に發信す。外に東京鳥居, 齊藤に復書す。下午沙市領事永瀧久吉及び横田三郎來訪, 只今來着せりと云ふ。夜横田を星記棧に訪ふ。
十月十四日 晴天。午前永瀧, 横田來訪。夜横田, 桂, 藤森等と永瀧を波樓館に訪ひ, 相携て居留地を散歩し, 歸る。楊子荃, 黃某來訪。
十月十五日 雨天。是日東京安原氏に号外信を出し, 家大人, 林正則に致書し河南行を報ず (英国郵便より)。夜桂, 藤森, 横田諸氏と永瀧氏の招邀に廣恒信に赴き, 九時歸。
十月十六日 雨。午前永瀧, 横田來訪。是日井手素行燕京の信到る。晚永瀧, 横田二氏來りて行を送る。
十月十七日 晴天。是日詰朝僕僮二人を從へ光州行の程に上らんとす。船に招商局碼頭に投じ, 倉子埠に向ふ。
十月十七日より十一月四日迄の日紀は紀行に詳かなれば茲に之を略す。
十一月四日 午前八時漢口に達す。台湾山内崑, 山口中島真雄, 東京安原金次, 鎌倉田鍋安之助, 福州前田彪, 上海林正則, 並に家大人及び龜雄の信到る。龜雄は台湾の守備隊に赴任せりと云ふ。劉彝卿, 李泉溪來訪。
十一月五日 陰。是日上海林正則, 白岩, 古城, 松倉諸氏に致書す。武昌劉彝卿より菊花十盆を贈り來る。
十一月六日 晴。午前楊子荃を武昌に訪ふ。中餐の饗を受く。共に相国寺に遊び, 途中李義山, 朱子榮二氏を敲く, 在らず。四時辭歸。子荃送りて江干に至る。上海白岩龍平の信二通到る。
十一月七日 晴。福州前田, 北京井手, 台湾山内崑, 大坂深水, 熊本家大人, 山田珠一, 福岡高橋謙, 東京田鍋, 中西, 中島諸氏に復するの信

を作る。

十一月八日 陰。河南光州胡，梁二氏に致すの書を作る。又た上海白岩龍平，熊本内田行に復するの書を作る。

十一月九日 晴。是日日本並に支那各地への信を發す。又た河南胡，梁二氏に致書す。下午楊子荃來訪。共に出て羅進夫を訪ふ，在らず。上海河本磯平の信到る。長崎の報を伝て曰く，十月三十日夜十時荒尾精台湾の旅次に病没せりと。当代の一俊傑志を齎らして孤島に歿す，曷ぞ痛悼に堪へん。

十一月十日 雨天。

十一月十一日 陰天。

十一月十二日 晴。

十一月十三日 半晴。北京井手素行の□信到る。又た白岩龍平，井上弥三郎，那部武二，林正則諸人の信到る。午後楊子荃來訪。李泉溪の胞弟娶親に付き往賀を勸む。即ち花燭の資を備へ荃翁と江を渡りて李宅に至る。賀家海門，午後宴席を設け來客を饗す。食後文華書院に至り教師劉德甫，胡某等と談じ，書院の客室に宿す。

十一月十四日 降雨。朝楊君と李宅に至る。午時又た開宴。下午楊君と聖公会附屬の男女病院を見る。米国人員，羅二人に面す。

文華書院外教の書生の入学する者は一年月謝，食料，其他一切の費用四十元。教内子弟は月謝，食料一切の費一ヶ月一吊文也。目下武漢の地信徒一万左右。書院の課程一日六時間，内三時間英学，二時間漢学，一時間美学其他。

下午又た文華書院に至り談ず。四時聖公会堂に於て結婚の式を挙げ，行て之を見る。員會長白衣紅袍，經文を誦し，男女を前面に立たしめ訓告数次，男女戒指を交換して証と為す。約一時間にして式畢る。楊及び其他の諸氏に辞別し，雨を衝て歸る。道路泥濘，衣履皆汚る。上燈の時漢口に達す。月華樓に登り雞絲麵及び炒鷄を吃して歸る。植字生馬某此夜館中に死す。銀十五圓を給して之を葬らしむ。

十一月十五日 雨。日曜日。

十一月十六日 晴。河南胡，梁二氏と会見始末の草稿を了る。東京中西正樹の信到る。武昌劉彝

卿來談。是日荒尾精を祭るの文一篇を作り，上海白岩を経て根津氏に転寄す。

十一月十七日 晴。午前堀口九萬一の信到る。和蘭国外交官に任ぜられたりと云ふ。下午武昌李泉溪の弟來訪。

十一月十八日 晴。頭痛。午前上海白岩の信到る。荒尾の死状を報じ来る。是日上海林の手を経て東京本部安原氏に十七号河南行の始末を報ず。

十一月十九日 晴。午前周復生，楊子荃，李泉溪來訪。下午三氏を誘て大觀樓に至り，羅進夫，李品三二氏を函招し会飲，上燈時散ず。李氏來談。

十一月二十日 晴。上海白岩，那部二氏に致書。那武氏に黃牛皮の調査書を送る。又た蕪湖井上に送書，楊子荃の信を転送せり。午前李泉溪と武昌に渡り周復生を漢陽門内に訪ふ。楊子荃來会。茶話午に至りて辞去。郭厚卿を遷善所に訪ふ。即ち新設の懲役場にして，頗る整頓。罪人に紡績，針工，織布等の手芸を教へ，其の製品を所内の集貨処にて販売しつつあり。所長翟子誠に面晤す。安徽寧国府人也。此の一帶の地，鑄銀局，化学堂，自強書院，鉄政局等あり。結構宏大。帰途兩湖書院を見る。壮大無比。

十一月二十一日 陰天。上海古城貞吉の信到る。

十一月二十二日 晴。武昌に操練有るを聞き，早朝往て觀る。小操已に終はりし後にして大操は清曆本月二十七日に挙行すと云ふ。十時歸る。

十一月二十三日 陰。晚重慶廖蓉初の信到る。

十一月二十四日 雨。緒方，柳原上海よりの信到る。東京鳥居赫雄の信に接す。

十一月二十五日 雨天。午前緒方二三，柳原又熊二氏來着。熊本高木正雄，塘林虎五郎，叶，内田友行，内田行（二封），上海荒井，白岩，北越，岡諸氏の信に接す。晚諸氏と会飲。上海姚賦秋より其母公の死を報じ来る。

十一月二十六日 陰天。是藤森，左無田，緒方三氏，東肥洋行に転居す。上海白岩，荒井，北越，姚列に復書す。楊子荃來訪。夜緒方列を東肥洋行に訪ひ，九時歸る。

十一月二十七日 晴。北京井手素行の信到る。晚緒方列を訪ひ，九時歸る。

十一月二十八日 陰。上海林正則，白岩龍平の信到る。熊本内田友行氏並に高木正雄，東京鳥居赫雄，台湾宗方亀雄，内田行に発信す。下午緒方来訪。

十一月二十九日 陰天。午前周衡齋翁来訪。相携て方氏を敲き小談，帰る。下午羅進夫，外一人来談。

十一月三十日 晴天。是日井手素行に発信し，汪道熙の遺族へ金三円を封送して香花の資に充てしむ。外に呉凌秋に詩一首を送る。東京安原に第十八号，十九号の報告を郵送す。又重慶加藤義造，廖鏡清に復書す。沙市郵便局上山氏をして重慶に転交せしむ。夜緒方列を訪ひ，九時帰。

十二月一日 陰天。午前李泉溪来訪。夜東肥洋行に緒方列を訪ふ。日清戦争の写真を見て帰る。雨。

十二月二日 半晴。李氏来訪。是日家大人の信到る。

十二月三日 晴天。下午羅進夫来訪。夜緒方列を訪ふ。

十二月四日 晴。上海白岩の信到る。夜羅進夫の招邀に黄陂街の聚興樓に赴く。

十二月五日 晴。熊本内田行の信到る。上海白岩の信到る。

十二月六日 半晴。日曜日。上海松倉，白岩に致書す。

十二月七日 晴。

十二月八日 晴。午前楊子荃来訪。金口鎮周復生の贈に係はる鯽魚六尾を携へ来る。十時楊子荃と共に江を渡りて保安門内蕭家巷の新宅に到る。子荃午餐を饗す。下午李泉溪来る。四時辞出。楊，李両氏送りて江干に来る。夜緒方氏列を東肥洋行に訪ふ。十時帰る。昨年は日上海に着す。到蕭家巷楊氏宅，進文昌門，一直過大都司巷，出横大街右折，少許南折進水陸街，向南直下行二里許右折入礪子巷，行少許左折即蕭家巷，楊宅斜対面為医寓。

十二月九日 晴天。終日在家。

十二月十日 晴。晚李来訪。夜東肥洋行の緒方，藤森来訪。

十二月十一日 沙市上山良吉の信到る。

十二月十二日 積陰。土曜日。是日熊本内田行，東京安原に発信（第二十号報告）。東京齊藤員安，熊本内田行，山田珠一，上海古城貞吉諸氏の信及び荒尾精葬儀の報知其の事務所より到る。夜雨。

十二月十三日 晴。日曜日。夜緒方氏等を訪ふ。

十二月十四日 陰。台湾亀雄の信到る。下午周衡齋来訪。楊子荃氏武昌の考官明和皆氏を伴ひ来る。四川夔州人にして名紳士也。又た高月波の信を帶來。

十二月十五日 雨。是日蕪湖井上に楊氏より依囑の銀五十元を工部信局より郵送す。福州前島真の手書到る。夜東肥洋行に到る。

十二月十六日 晴。上海林正則氏の信到る。

十二月十七日 陰。

十二月十八日 雨天。上海古城貞吉，松倉善家の信到る。夜緒方来談。

十二月十九日 雨天。熊本内田行，台湾彰化荒賀直順の信到る。下午桂氏等と一品香に東肥洋行の招邀に赴く。来客周霽雲以下数人なり。武昌楊子荃の信到る。余の字を乞ふ。即ち国風一首を書し贈る。且つ之に金五元を送寄す。

十二月二十日 飛雪紛々。上海林正則の信到る。夜藤森来談。

十二月二十一日 陰天。寒気料峭寒暖計三十六度に下る。上海林正則，白岩，姚に発信す。下午李品三来訪。夜東肥洋行の招飲に赴く。

十二月二十二日 晴。下午東肥洋行に至る。楊子荃，李泉溪亦来会。晚諸氏と会飲。十時半帰寓。

十二月二十三日 晴。午前楊，李来訪。中餐後辞帰。

十二月二十四日 晴。下午白岩龍平の信到る。周衡齋，劉彝卿，唐卓棠来訪。電燈会社創立の協議を為す。夜緒方，藤森来訪。

十二月二十五日 陰，夜雪。午前周復生来訪。相携て東肥洋行に至り小談，辞帰。北京井手，天津樞川重太郎の信到る。夜東肥洋行に至る。

十二月二十六日 陰。下午羅進夫来談。是日鄭板橋の字帖及び古柏行の古字一帖を買ふ。

十二月二十七日 健晴。日曜日。緒方氏来訪。乾豊花行の主人鍾姓河南光州より帰来。来て胡書

漁氏の言を伝ふ。夜東肥洋行を訪ふ。

十二月二十八日 晴天。東京安原氏に二十一号報告を送る。外家大人及び内田友行氏、同行、内藤儀十郎、台湾荒賀直順、宗方亀雄諸氏に致書す。

十二月二十九日 陰。夜東肥洋行に至る。

十二月三十日 陰。上海白岩、台湾七里の信到る。上海白岩に復信す。夜緒方来談。

十二月三十一日 陰天。下午東肥洋行に至る。晚同行内に於て桂、緒方、藤森、柳原、左無田諸氏と炉を囲て会飲、以て二十九年を送る。十一時帰る。

以下は、宗方の海軍宛報告の第十七号の内容の全部である。この文に書かれている内容が明治29年10月17日から11月4日までの彼の行動記録にもなっており、上に見た29年の日記にはその期間の記載がないことから、その欠を補う意味もあって載せる事にする。更には、この報告に書かれているのは、中国の現状に満足せず寧ろ変革しなければならないと考えている中国人を相手に、日頃宗方が考えている中国の現状分析を語り、どうすれば変えられるかを熱っぽく語っているものであって、8年前に漢口樂善堂に有志が集って議論し実行しようとした中国人有志への働きかけをまさにこの時実行している趣が感じられる内容なので、是非読んでいただきたいと思う。なお、この報告は歴史研究所にのみあり、かつこれまで公開された事がないので、その意味でも貴重である。

報告第十七号

梁胡二氏との応対始末

明治二十六七年の交、武昌人楊相蘅に問ふに在野の人物を以てす。楊、河南光州の梁啓元、胡慶煥二人を挙て答ふ、曰く、此の二人の者非常の志を懷て民間に晦跡すと雖ども、声望遠近を押し相識北清に充つ。以て共に為す有るに足れりと。偶々日清の役起るに会い往訪を果たさず。本年九月一日楊氏を介して書を梁胡二氏に致し会見を求む。同月二十日二人の返書到る。鄙人の来遊を待つに切なり。是を以て十月十七日払曉担夫一人、

僕僮一人を従へ漢口を發し、陸路四百八十清里、同月二十三日河南省光州に達す。州城南北二城に分れ、漢水其の間を流る。一大橋を架して両城を連接す。二城の人煙概ね一万二千許。梁胡二氏共に北城に居る。因て先づ西門外の旅舎に投じ、髪を理し衣を更め、出でて胡慶煥を龍門街に訪ふ。市人皆呼ぶに胡大老爺を以てす。其家に抵る。家人曰く、主人貴客の来臨を待つもの茲に十余日、適々湖北候補道台某来訪、数日前相携へて胡家寨の本宅に赴けり。去るに臨んで言を留めて曰く、若し貴客の光臨を辱ふせば、直に胡家寨に枉顧を請ふと。即ち去て雲路街に至り梁啓元を敲く、出迎歡ぶ事甚し。梁本年五十歳、風姿颯爽、言語明快、一見已に凡庸に非ざるを知る。直に酒饌を備へ其子天任、天縱、天授の三人を招て席に陪せしむ。鄙人携ふる所の贈物数点、時勢論一篇、途上の雜詩長短十余首、並に上海林正則氏より托されし贈品、及び書翰一通を出して之に贈る。梁辞せずして之を受く。既にして其の諸子を促して坐を去らしめ、語りて曰く、先生の心事及び今回来遊の主旨我悉く之を了知す、然れども我歳正に五十、已に老たり、先生一片の盛意に孤負す、愧赧の至りに堪へず。願くば頑児輩をして平生の志を継紹せしめんと欲す、自今先生の提誘を祈るのみ。予曰く、五十未だ老たりと為さず。今日の形勢閣下の一臂を仮らざるを得ざる者多々なり。且つ人天地の間に在る、一息尚ほ存すれば一息の義務あり。況んや時局多艱の今日志士仁人たる者豈に衰老を以て責を辞すべけんや。梁曰く、誠に貴説の如し。更に語を転じて曰く、俄国近日中国の儒士数百人を聘し、我が孔孟の教を取て其国に伝播せん事を企て、又た孔子の廟を国内に設立するとの説あり。是れ我が道西方に行はるゝの兆か、將た別に深意の有る在りて存する乎。予曰く、鄙意を以て之を付るに、兵法に所謂心を攻むるを上と為し、城を攻るを下と為す、露人其の攻心の術を以て貴国に試んと欲するのみ、故胡林翼氏は今を距る三十年前に於て後日中国の患を為す者は必ず俄人ならんと謂へり。而して今日の形勢を以て之を見れば、現に中国の患を為す者は独り俄国のみならず、法の如き英の如き独の如き皆狡焉、逞ふせんと欲する意あり。梁曰く、今日の急

務は中国貴国と提携して起ち、以て外侮を折衝するに在り。予曰く、真に貴説の如し、目今亜細亞洲中に在て独立の体面を全ふせる者は僅かに貴国と敵国とのみ、此他の諸邦は多く泰西人の蚕食する所となり、朝鮮、暹羅諸国の如きも往々將に滅亡し了はらんとす。此の時に当りて日清両国相携へて起ち亞洲の中堅と為り首脳と為り、滅国を興し絶世を継ぎ隠然勢力を養ひ、巍然として欧米諸邦と対峙して相下らざるの位置に進ましむるは、実に当務の急なり。然れども今日の貴国は此の事を共にするに容易ならず。梁曰く、何の謂ぞや。予曰く、我をして直言せしめば貴国の政府は老朽為す有る能はず。窃かに思ふに十年を出でずして江山或は主を替ゆるに至らん乎。梁黙して言はず。時に日暮に際す。明日を約して帰る。

二十四日 詰朝梁氏を訪て昨來の談話を継続す。

梁其の著書二冊並に余の韻に和し詩数章を贈る。且つ曰く、目下光州考試の期にして州属諸県の諸生來集するもの千数百人、現に敝宅の如きも寄寓者十数名日々來往煩煩接違あらず、内地の諸生聞見寡隔（漏のつもりか一大里）、若し君の外人たるを知らば、或は謠言を流布し嫌疑を招かん事を恐る。貴説江山主を替ゆるの一事曾て胡君と之を熟商せり、余の志は胡君の志にして胡君の意は則ち余の意なり、二十年來同心一体彼我の別無し。先生請ふ、胡家寨の閑地に至り胡君と其の議論を上下せば、互に要領を得るに便ならん、而して余が深意の在る所も始て胡君の口物を仮りて明了なるを得ん。州城人煙稠密往來紛雜、大事を議するに便ならず。先生請ふ、微意の存する所を諒察せよ。余曰く、謹で教を奉ず、此より去て胡翁を敲き更に大教を請はんと欲す。梁又た盛饌を設け饗応至らざる無し。午後三時辭別して出つ。

梁宇啓元、太卿と稱し、又た肇川と号す。光州の名家にして官民の間に重望有り。祖先以來専ら慈善を事とし（この後数字分不明）三百六十餘頃の田産を売りて教育と貧民救助に費やし今又た同善社長として力を善業に致し、独力を以て孔子廟を修理し学校を設立しつつあり。

午後三時風雨を衝て光州の南門を出で、胡家寨

に向ふ。道路泥濘行く可からず。州を距る二十清里の鄢家堆に宿す。

二十五日 晴を待て發す。途上逢ふ者兒童走卒も胡の姓名を知らざる者無く、皆な尊稱して大老爺と謂ふ。行く三十清里胡家寨に達す。一千三百米突の墻壁を繞らし、東西二門を穿ち墻外繞らすに水濠を以てす。巖として城郭の如し。居宅は寨の中央に位置し二十餘棟より成る、宏壯比無し。刺を通じて入る。家人導て客厅に至る。曰く、微恙を以て床に在り、今將に來り見んとす。再び導て一屋に至り、告て曰く、主人予め此の屋を掃て貴客を待つと。即ち寢室、書室、客厅の三間にして、床帳椅棹整然見るべし。待つ少時にして胡慶煥出で來る。衣冠華麗礼容甚だ重し。年齒五十四、頭髮斑白、瘦軀にして疎髯有り。坐定りて携ふる所の土宜数点を出し之に贈る。閑談多事、胡頻りに日本の政体風俗を敲く。予知る所を挙て之に答ふ。彼れ曰く、僕少壯曾て武職を奉じ中国内部の各省より伊犁、蒙古地方を歴遊せり。昨年又た福建汀州に遊び親戚の家に寓す。適々台湾総督樺山氏の雄略を諗聞し、往て之に謁せんと欲し廈門に至る。台地より歸來せる者の言を聞くに、台湾出入の困難にして且つ突然総督を見るの至難たるを知り、終に渡台の念を絶てり。今にして之を思へば遺憾長く存す。又た曰く、敝州地僻民貧、一の以て貴客を慰むるに足る者無し。誠に慚愧に堪へず。予曰く、昔は蘇轍韓魏公の人物を偉なりとし、窃に之を名山大川に比す。僕此の遊貴下と梁君とを見る、真に名山大川の偉觀に勝る者有り。且つ漢口より一路白雲紅葉、秋光満目、溪山の風致画中に入るが如く、大に客懷を慰むるを得たり。胡曰く、敢て当らず敢て当らず。貴下敝国に在る幾年、又た曾て地方に遊歴せし事ありや。予曰く、貴国に滞留する十三年、足跡十三省に亘り内地を跋涉せしもの約そ二万三四千清里。胡曰く、何の目的を以て遊びしや。予曰く、山川の勝を探り兼て英俊の士を索めんが為なり。胡曰く、英俊の士を見る凡そ幾人。予曰く、貴国山川の偉觀は則ち驚く可きも、人物の偉觀は甚だ寥々たるの感あり。胡曰く、此時官界に禄仕する者寔に言ふに

足らずと雖草沢の間尚ほ多少の傑物有らん乎。
晩盛饌を備て歓待、雑話深更に及て就寝。

二十六日 午後胡氏来り談ず。予今朝草する所左
の一篇及び七言古風一章を出し之に示す（原作
は漢文なれども茲に之を訳載す）。

今日の清国は恰も老屋頽廈の如し。是れ人人
の見る所大風一び興り其れをして転覆せしめ、
然る後朽楹を代へ敗椽を棄て新材を雑へて
而して之を再造すれば乃ち美観たり。天下の
人其の老且つ頽なる者に就て一楹一椽を抜
で之に代へ、以て数年の風雨を支へんと欲
す。迂も亦た甚し矣。前年以来大勢一變覺羅
氏鼎之輕重問はずして知る可きなり。是を以
て露人は意を鋭にして専ら東三省及び新疆の
地を窺ひ、仏人は安南より広西雲南の二省に
逼迫し英人も亦た將に印度緬甸を以て根拠と
為し、四川雲南を経営し、往々將に西湖の腹
地に荐及せんとす。此他独の如き米の如き東
南沿海の重地に垂涎し謀遠くして志大なり。
是れ豈に為す無くして已むものならんや。之
を内にしては政府の威令行はれず、上下隔絶
賄賂公行庸官道に當りて威福を専らにし、哲
人君子英雄豪傑の士有りとは雖ども、手足を伸
ぶるの地無し。政道日に衰へ民心日に畔く二
帝三王周公孔子の道煙没して明かならず。国
運の頽壞恰も江河日に下るの勢有り、是れ誠
に危急の存亡の秋に非ずや。是の時に當り苟
も一英雄の奮起する有るに非ずんば、中国は
竟に猶太波蘭の覆轍を踏で終らんのみ。鄙人
常に興亜の大業を以て志と為し、死生之と始
終せんと欲す。若し貴国にして一び外人の有
に帰せば、朝鮮其他東亜の諸小国固より終に
自立し難し。略嗟、堂々たる亜州の大局をし
て西夷北狄の蹂躪する所とならしむ。千秋の
遺恨にして万世の大恥なり。僕短才輩徳敢て
自ら揣らず身を以て国事に許すもの茲に十余
年、以為らく、亜洲を興さんと欲せば先つ須
らく中国を興すべし。中国を興さんと欲する
者は広く交を英雄豪傑の士に結ぶに非ずんば
不可也と。是を以て单身襍被海内を周遊する
もの八九年、今日始て天良縁を仮し足下と梁
君とを見る事を得、僕の欣抃如何ぞや。天下

之時機漸く熟し、今より数年の内必ず風雲飛
騰草沢の英雄袂を投じて起つの日有らん。天
下を廓清し億兆を塗炭の中に救ひ以て我が天
職を全ふするは、実に此の一時機に在り。此
の時機一たび失せば復た為す可からず。僕資
性朴率知己に遇ては則ち肝胆を傾け包蔵する
所無し。知らず、足下亦た能く教ゆる所有る
乎。凡そ如此の事独り賢士と言ふ可くして、
俗士と語る可からず。機事密ならざれば則ち
害成るは易の大戒なり。足下必ず能く鄙意の
在る所諒せん也

胡氏通読一次、可否を言はずして之を収め、話
頭を転じて専ら日本の政体風俗を問ひ、雑談半
日にして去る。晩又た来りて会食す。説く所一
も国事に及ばず。予其の深意の存する所を知る
に苦む。則ち胡に告て曰く、僕今回百忙を措て
此の遊を企つ。本と風流韻事の為に非ず。請
ふ、明朝分袂直に帰程に上らん。胡曰く、何ぞ
其の急なるや、尚ほ滞留一ヶ月、我をして地主
の誼を尽さしめよ。予曰く、厚意多謝、只だ月
余の日子を閑過する能はざるのみ。胡曰く、明
朝帰去の事決して然るべからず、月末相携へて
再び光州に至り該地に逗留十余日の後始て帰途
に上らん事を望む。予曰く、此の閑暇無し。胡
曰く、万に已むを得ざれば更に兩三日を緩ふせ
よ。議すべき事尚ほ多々なり。予之を諾す。
二十七日 胡氏左の一篇を携へ贈る（原作は漢文
なり、茲に之を訳録す）。

且つ夫れ人宇宙の間に生る。幼にして詩書を
読み、壯にして戎馬を習ひ、経邦濟世の才を
養ひ、歩月凌雲の志を抱き、上は以て君を致
すべく、下は以て民を沢すべし。昇平の世に
在りては原と遁跡消光山水に笑傲すべし。倘
し離乱の秋に遇へば、豈に首を埋め身を蔵し
隴畔に逍遙し甘んじて庸愚と伍を為す可けん
や。正に国家の為に身を致し蒼生の為に倒懸
の苦を解くべし。焉ぞ能く優游閑暇徒らに春
光を一世に消磨すべけんや。方今天下の大局
明公之を言ふ、詳かなり。一字一珠確として
是れ正論、閣下胸襟闊達識見淵深百芸精にし
て、学問広万事明にして、眼力の真なるを見
るに足る。宵小之を見れば即ち迹を匿し君子之

を見て心を傾く。此の際に乗じて、何ぞ大に経綸を展べ謀猷を壮にするに難からんや。飛黄騰達想ふに指顧の間に在らんのみ。当に目を拭て之を待つべし。僕奔走半世飄泊一身武に邦を安ずるの志無く、文に国を定むるの策無し。首を蓬閼に潜め身を林泉に匿す。悠忽たる歲月何ぞ道ふに足らんや。然れども既に閣下の不棄を蒙る、敢て直言せざらんや。中外の情勢甚だ危急虎視眈々たる者一にして足らず。閣下の手翰業に已に之を言ふ詳かなり。因て更に贅瀆するの要無し。試に我が中国に就て之を論ずれば李鴻章身首相に居り位尊く権重し。理宜く京外を統率し、忠を乗りて国に報ひ以て其の職を尽すべきに、賄賂通行法を売り権を弄し劣跡百端枚挙す可からず。中国の宰相已に如此なれば則ち中国の宰相俱るゝに足らざるなり。李瀚章位爵憲に列し、曾て兩広を総督す。堂属交も争ひ収拾すべからず。但だに補署一欠の如きも金錢にあらざれば不可なり。即ち□の委弁一差の如きも初めに先つ価を講じ而て後之を定む。此他各省の総督巡撫の如きも昏憤なる者は昏憤、懦弱なる者は懦弱、中には道府下にしては州県穿窬の輩に非ざるは無し。狗洞に入り虎威を仮る。勢利の小人に非ざるは無し。以て号令行はれず朝政顛倒、是なる者を非と為し非なる者を是と為す。国因民窮勝て言ふ可からず。僕資性庸愚と雖ども一念此に及ぶ毎に真に痛嘆憤慨、自ら禁ずる能はざらしむ。大勢の壞已に如此実に如何ともす可き無きに属す。僕数歳の間各省に歴遊し連絡する所の人甚だ多し。精明の者之れ有り、強幹の者之れ有り。忠義豪邁の者亦た之れ有り。常に心を救世に存し、万民を水火の中に拯ふを欲せざるに非ざるも、北部一帶連年荒歉一は糧餉足らず二は軍械を得るに道無し。糧足らざれば事を挙ぐるに難く、軍械欠ぐれば烽壘対し難し。敢て人衆の糾合し難きに非ざるなり。此れ誠に僕の日夜籌思五内焦灼如何ともす可き莫き所なり。輾転付度今日只だ將に広く有志の士を連絡統合し暗に訓練を加へ以て有志の英雄を待たんとす。一旦事を挙ぐれば則ち

僕等甘じて前駆と為り大に力を効さんと期す。是れ真に已むを得ざるの策のみ。先生若し庸愚を嫌はず代りて一主を荐めば、僕亦た甘心命を用ひ以て後援を為さんとす。只だ未だ貴意如何を知らざるのみ。願くば先生明かに以て我に教へば誠に僕の大幸なり。愚昧を揣らず書で此に謹呈伏て鈞裁を乞ふ。

予一読して曰く、大著剗切愚見と其帰を同ふす。欣抃の至に堪へず。敢て問ふ、貴国本部十八行省中用ゆるに足る者凡そ幾省。胡曰、概して之を謂へば長江以北の諸省風俗堅固にして人情亦た厚し。長江以南の諸省に至りては人心懦弱にして狡詐用ゆるに足らざるなり。予問ふ、湖南、福建、広東は如何。胡曰、湖南、安徽は髮賊の変後人物輩出、国家中興の大業を成就せしは皆此二省の人なり。然れども爾來星霜三十年今日の湖南は已に經に暮氣に属し、殆ど又た人物の種子を留めざる者の如し。安徽に至りては湖南より甚し。福建は稍や佳。広東は悍獍巧詐にして重厚の風無し。事を共にす可からず。予又問、北部各省中何れの省か最も頼るべき。胡曰く、河南、山東二省及び江蘇の北部人物最も用ゆべし。此他四川省の如き亦頗る有望の地なり。予曰く、外洋の諸国貴国を分割するの機漸く逼れる者の如し。如何せば可ならん乎。胡曰く、此れ恐くは勢の免かれざる所、此の機即ち敵国の内部英雄割拠の時なり。我輩の力分割を未然に防ぐ能はずんば則ち此の機に投じて大事を為さんのみ。予曰く、僕の見亦た如此のみ。胡曰く、貴国大に俄国を恐るゝとの説有り、真乎。予曰く、敵国境域大ならずと雖ども四千万の人民を有し、精兵三十万、艦艦数十隻、明君上に在り人傑朝に充ち、上下一心八洲を城と為し蒼海を池と為す。豈に一露国を恐れんや。貴国の各新聞紙皆な此説を為し、甚しきは清露提携して日本を制するを以て今日の至計と論ずる者あり。妄見妄論大局の形勢に通ぜざる、真に驚くに堪へたり。胡曰く、新紙の言意とするに足らざるなり。予問ふ、足下の同志何の地に最も多き、且つ人員約そ幾何。胡曰く、僕の同志腹心河南、山東、江南の三省に在りて一方の首領たる者二十余人に下らず。而して毎

人の部下に属するもの精力強壯の輩皆一千以上あり。総て之を計れば大約二万数千人の衆を挙げべし。胡問ふ、足下同志の士凡そ幾名。予曰く、志を同ふする者数十人、然れども真に大事に任ずべき者十余名に過ぎず。胡曰く、貴国の樺山公能く通同し得べきや否。予曰く、樺山氏は朝廷の大臣なり。其の進退挙動国家と共にせざる可からず。我輩は民間の一処士にして国に官職無し。故に進退自在なるも一国の大臣は之と同じき能はず。予曰く、大事を為す者は時機に投ずるを要す。僕の愚見を以てすれば近数年内必ず外難有らん。今日積弱の余に加ふるに外寇を以てせば内憂亦た必ず之に乗て発せん。是れ真に群雄角逐の時也。徳有り力有りて名正しき者能く大業を成就すべき也。胡曰く、僕数年来苦心経営、各省を奔走し糾合する所の者甚だ多し。而して未だ端を發せざる所以の者は其の動の易からざるを以てのみ。予問ふ、哥老、白蓮、九龍、三合等の諸會名目少なからず。知らず、此の種の會員互に連絡を通ずるや否。胡曰く、名目一ならず。各各路の統率に帰す。惟だ哥老、九龍の二會相通ずるのみ。予曰く、哥老、白蓮以下の諸會員を糾合し打て一団と為し、其の進退挙動をして一途に出でしむ。之を目今の急務と為す。個々分立動靜一ならずんば、常に事を誤る。惜むべきの甚しき也。未だ知らず、統一糾合の策如何せば則ち可ならん。胡曰く、之をして一に帰せしむるは容易ならずと雖、互に連絡を通ずるは至難にあらず。只だ頗る周張を費やすのみ。予曰く、現に廈門地方に復明會なる者あり。僕去年人をして其状を探らしめしに、其の勢力頗る盛。足下之を知るや否。胡曰く、是れ福建九龍山の一派ならん。敵國中現に三種有り、一は江湖會（哥老の別名）、二は紅江會、三は私塩幫とす。是れ則ち三大團結なり。就中私塩幫なるもの最も堅実。

二十八日 午後又た昨來の談話を繼續す。予曰く、諸般の準備を為す實に今の時に在り。機會の得失間に髪を容れず。若し事端一び發するの後手を下さんと欲するも及ばざるなり。胡曰く、此の時に當りて宜く早く布置を為すべし。僕北部一帯の地に往き更に声氣を通ぜんとす。

此の一事人衆しと雖ども難からず。難き所の者は銃砲火薬と糧餉とのみ。尚ほ能く細かに良法を講ぜざるべからず。予曰く、凡そ無知の愚民は之に由らしむべし。之をして知らしむ可からず。事未だ發せずして形跡露頭せば則ち平日の苦心一朝烏有に帰す。實に千載の恨事なり。是の故に高等の人物を除くの外細情を洩らす可からざるなり。胡曰く、謹で教言を領す。此事所謂機事密ならざれば則ち害成る者也。胡問ふ、事を為す何の地か最も適せる。予曰く、四川の形勝に抛り武漢の要地を占む。鄙意之を以て上策とす。胡曰く、確として是れ明見、何となれば進んでは以て人を制すべく、退ては以て守るべきのみ。予問ふ、光州近傍亦た有力なる同志の士有りや。胡曰く、光山県白雀□に劉忠主なる者あり、声名甚だ盛一千三百の部下有り。息県に鄭李二大族有り、強勢無比官府の如きも此の二人の歡心を買はざれば地方を治むべからず。威勢隆々遠近を圧倒せり。李氏最も激烈なり。此の諸人は皆僕の同志親交なり。胡又た曰く、足下に余閑有らば再び光州に至り右の諸友を會し前途の計を協議すべし。予曰く、諸同志と會する事必ずしも今日に於てせず。已に足下と梁とを知る。北部の貴友は皆な予の同志なり。胡曰く、然り。然らば足下の姓名を以て各地の同志に紹介する可ならん乎。予曰く、毫も不可無き也。胡曰く、足下去るの後此の天氣晴暖に乗じ北部各地に巡歴し同志の連絡を固め、且つ諸般の要項を商量すべし。明春漢口若くは上海に於て集會を開く如何。僕北部同志中の鏘々たる者数人と相携て之に臨むべし。若し漢口、上海の兩地不可なりせば、貴国東京に於て集會するも亦た可なり。予曰く、集會地及び期日の如きは帰漢の後仔細に思量し、改めて報告する所有るべし。鄙意窃かに東京に會するを以て利有りと為す。胡曰く、固より望む所なり。以後互に通信を頻煩にし連絡の益す固からん事を望む。某曰く、敬諾。此夜胡氏盛饌を備へて餞別し、且つ河南の名産猪絲二包、雨前茶二簍、月餅二包を贈る。歎談深更に及んで散ず。

二十九日 朝食後胡家寨の東門を出つ。胡氏送りにて門外数丁の処に來り、更に其の家丁を派して

某を送りて寨を距る八清里の双柳樹に至らしむ。之を固辞すれども聴かず一揖して別る。行程七日、即ち十一月四日漢口漢報館の寓所に達す。

明治二十九年十一月十八日